

# 一条氏館跡遺跡

—第4次調査報告—

1993

山梨県三珠町教育委員会

# 序

三珠町は、曾根丘陵のほぼ西南端にあたり、大塚古墳群とともに貴重な文化財が多く残されていることで知られています。

町では、文化財保護の立場からこれらの保全、保護、更にはその活用に積極的に取り組まれているところであります。

近年、上野地区に町民文化資料館を建設したことに加え、町民のご要望に応えるため、周辺に農村広場をはじめとする、文化・スポーツ施設の集積がはかられてきました。これらの施設の建設にあたっては、当然のことながら文化財保護地として、すでに上野遺跡の調査、一条氏館跡遺跡第1次・第2次調査を行いました。

現在は、ふるさと創生事業事業の一環のふるさとふれあい会館をメインとする、歌舞伎文化公園の建設が着々と進められています。

この報告書は、歌舞伎文化公園事業計画に係る、試掘調査・一条氏館跡遺跡第3次調査をうけての本格的発掘として、平成3年8月から、町民文化資料館北側の5.700m<sup>2</sup>を対象とした、第4次調査の成果をまとめたものであります。

検出されたものの中には、方形周溝墓をはじめ、竪穴式住居址、古墳の石室など、学術的にも貴重な遺構が高い密度で確認されています。

先人の残された郷土の歴史を詳らかにすると同時に、私たちにはこれを記録として後世に遺す責務があります。そして、ただ単に、学術的意義にとどまらず、これから文化行政に大切に生かされていくべきであろうと思います。

終りになりましたが、このたびの調査にあたり、ご指導を賜りました文化財関係機関の皆さん、直接調査にご協力くださいました皆さんに心からお礼を申し上げ、序文とします。

平成5年3月

三珠町教育委員会

教育長 三 神 邦 秀

## 例　　言

1. 本書は三珠町上野字一条林に所在する一条氏館跡遺跡の第4次調査報告書である。
2. 本調査は町民文化資料館に隣接する歌舞伎文化公園造成とふるさとふるさとふれあい会館の建設に伴う事前調査で、三珠町教育委員会が実施した。
3. 第4次発掘調査は平成3年7月22から平成4年11月20日まで行われたが、途中10ヶ月余りの中止があった。
4. 調査組織は以下のとおりである。

調査主体　三珠町教育委員会

調査担当者　和田　豊（三珠町教育委員会主事）

調査参加者　有泉しげり　有泉木子　有泉と志子　有泉福代　有泉ゆき　市田照彦  
一瀬明子　窪田あや子　小池美恵子　小林留雄　小林よ志子　込山英勝  
塙島富美子　塙島芳美　丹沢町子　土橋利枝　土橋純一　堀口智樹  
村松八重子　吉原ふさ子　若林初美

5. 本書の編集は和田　豊が行った。

6. 発掘調査、報告書の作成にあたって次の方々の御指導、御教示をいただいた。記して謝意を表する次第である。（敬称略）

小瀬忠秋　坂本美夫　清水　博　木木　健　杉本　充　長沢宏昌  
中山誠二　保坂康夫　堀ノ内泉

7. 本調査に係わる資料は三珠町教育委員会で保管している。

## 凡　　例

1. 採図の縮尺は採図中のスケールで示す。
2. 採図中の方位は真北を示す。
3. 土層の色調は土色帖（農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版土色帖』富士平工業株式会社　1987）に従った。

# 目 次

序	
例言	
凡例	
第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 遺跡を巡る環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	4
第3章 縄文時代の遺構と遺物	6
第1節 壴穴住居址	6
第2節 壴穴状遺構	38
第3節 上坑	40
第4節 遺構外出土遺物	44
第4章 弥生時代の遺構と遺物	52
第1節 壴穴住居址	52
第2節 方形周溝墓	56
第5章 古墳時代の遺構と遺物	78
第1節 上坑	78
第2節 古墳石室	80
第6章 まとめ	84

## 挿図目次

第1図	遺跡位局図	2	第43図	4号七坑出土遺物	43
第2図	グリッド設定図	3	第44図	遺構外出土遺物(1)	45
第3図	調査全体図	5	第45図	遺構外出土遺物(2)	46
第4図	2号住居址	6	第46図	遺構外出土遺物(3)	47
第5図	2号住居址炉址	7	第47図	遺構外出土遺物(4)	48
第6図	2号住居址出土遺物(1)	8	第48図	遺構外出土遺物(5)	49
第7図	2号住居址出土遺物(2)	9	第49図	遺構外出土遺物(6)	50
第8図	4号住居址	10	第50図	遺構外出土遺物(7)	51
第9図	4号住居址炉址	11	第51図	1号住居址	52
第10図	4号住居址出土遺物	11	第52図	1号住居址出土遺物	53
第11図	5号住居址	13	第53図	3号住居址	53
第12図	5号住居址炉址	14	第54図	3号住居址出土遺物	54
第13図	5号住居址出土遺物(1)	14	第55図	8号住居址	55
第14図	5号住居址出土遺物(2)	15	第56図	1号方形周溝墓	57
第15図	5号住居址出土遺物(3)	16	第57図	2号方形周溝墓(1)	58
第16図	5号住居址出土遺物(4)	17	第58図	2号方形周溝墓(2)	59
第17図	5号住居址出土遺物(5)	18	第59図	2号方形周溝墓出土遺物	60
第18図	6号住居址	19	第60図	3号方形周溝墓	61
第19図	6号住居址炉址	20	第61図	3号方形周溝墓出土遺物	62
第20図	6号住居址出土遺物(1)	21	第62図	4・5号方形周溝墓(1)	63
第21図	6号住居址出土遺物(2)	22	第63図	4・5号方形周溝墓(2)	64
第22図	7号住居址	24	第64図	4・5号方形周溝墓出土遺物	65
第23図	7号住居址炉址	25	第65図	6号方形周溝墓	66
第24図	7号住居址出土遺物(1)	26	第66図	7号方形周溝墓	67
第25図	7号住居址出土遺物(2)	27	第67図	8号方形周溝墓	68
第26図	7号住居址出土遺物(3)	28	第68図	9号方形周溝墓	69
第27図	9号住居址	29	第69図	10号方形周溝墓	70
第28図	9号住居址炉址	30	第70図	10号方形周溝墓出土遺物	71
第29図	9号住居址出土遺物	30	第71図	11号方形周溝墓(1)	72
第30図	10号住居址	31	第72図	11号方形周溝墓(2)	73
第31図	10号住居址炉址	32	第73図	11号方形周溝墓出土遺物	73
第32図	10号住居址出土遺物(1)	33	第74図	12号方形周溝墓	74
第33図	10号住居址出土遺物(2)	34	第75図	12号方形周溝墓出土遺物	75
第34図	11号住居址	35	第76図	13号方形周溝墓	76
第35図	11号住居址炉址	36	第77図	13号方形周溝墓出土遺物	77
第36図	11号住居址出土遺物	37	第78図	14号方形周溝墓	77
第37図	堅穴状遺構	38	第79図	1号土坑	78
第38図	堅穴状遺構出土遺物	39	第80図	1号土坑出土遺物	79
第39図	2・3号土坑	40	第81図	古墳石室	80
第40図	2・3号土坑出土遺物	41	第82図	古墳石室出土遺物(1)	81
第41図	3号七坑出土遺物	41	第83図	古墳石室出土遺物(2)	82
第42図	4号土坑	42	第84図	古墳石室出土遺物(3)	83

## 図版目次

図版 1	2号住居址	図版12	9号方形周溝墓
	2号住居址炉址		10号方形周溝墓
図版 2	4号住居址		11号方形周溝墓
	4号住居址遺物出土状態	図版13	12号方形周溝墓
図版 3	5号住居址		13号方形周溝墓
	5号住居址炉址		14号方形周溝墓
図版 4	6号住居址	図版14	1号土坑
	6号住居址炉址		1号土坑遺物出土状態
図版 5	7号住居址		古墳石室
	7号住居址炉址	図版15	1号住居址出土遺物
図版 6	9号住居址		4号住居址出土遺物
	10号住居址	図版16	5号住居址出土遺物
	11号住居址	図版17	6号住居址出土遺物
図版 7	竪穴状遺構	図版18	7号住居址出土遺物
	2・3号土坑	図版19	9号住居址出土遺物
	4号土坑		10号住居址出土遺物
図版 8	1号住居址		11号住居址出土遺物
	3号住居址	図版20	竪穴状遺構出土遺物
	8号住居址		2・3号土坑出土遺物
図版 9	1号方形周溝墓		4号土坑出土遺物
	2号方形周溝墓	図版21	遺構外出土遺物
	2号方形周溝墓遺物出土状態	図版22	遺構外出土遺物
図版10	3号方形周溝墓	図版23	遺構外出土遺物
	4・5号方形周溝墓	図版24	2号方形周溝墓
	5号方形周溝墓遺物出土状態		10号方形周溝墓
図版11	6号方形周溝墓		11号方形周溝墓
	7号方形周溝墓		12号方形周溝墓
	8号方形周溝墓	図版25	1号土坑出土遺物 古墳石室出土遺物

# 第1章 調査に至る経緯と経過

三珠町では昭和62年度事業として三珠町上野字一城林の歌舞伎公園隣接地に三珠町民文化資料館を建設した。この事業に伴う事前調査が一条氏館跡遺跡第1次調査で、昭和62年8月12日から同月31日まで行われた。この調査では6基の方形周溝墓が検出された。その内容は『一条氏館跡遺跡』1988に報告されている。

その後、平成3年度事業として三珠町歌舞伎文化公園内に公衆トイレを建設することとなった。この事業に伴う事前調査が一条氏館跡遺跡第2次調査で、平成2年2月21日から同月26日まで行われた。この調査では4基の方形周溝墓が検出された。

さらに三珠町では町民文化資料館の西側から北側にかけてふるさとふれあい会館の建設と歌舞伎文化公園を造成を行う計画を立てた。この事業に伴う事前調査として工事予定地15,670m<sup>2</sup>を対象に、平成2年12月10日から同月28日まで試掘調査を行った。これが一条氏館跡遺跡第3次調査である。この調査では町民文化資料館の北側に多数の方形周溝墓、縄文時代、弥生時代の竪穴住居址などが発見された。古墳の石室も発見されたが、これは本町の古墳の西限にあたる。

第2・3次調査の成果は『一条氏館跡遺跡—第2次・第3次調査—』1991に報告されている。

今回行われた第4次調査は、第3次調査によって遺構の存在が確認された町民文化資料館北の約5,700m<sup>2</sup>を対象として開始された。

調査は1991年8月19日に開始された。グリッドの配置は第3次調査の際に設定されたものをそのまま使用した。遺跡の中央を南北に走る道路の西側から表土の除去を始めたが、厚さ60cm前後の耕作土層の直下の褐色土層ですべての時代の遺構が確認された。遺構確認作業では試掘調査のトレンチをはずれた方形周溝墓も多く発見され、予想外の遺構の密度であった。道路東側の調査は同年10月に着手した。しかしここは遺跡を保存しながら公園を造成することとなつたため、ふるさとふれあい会館の建設が予定されていた遺跡北端にあたるD-7グリッド付近と、すでに遺構の調査を開始していた町民文化資料館に接するF-4グリッド付近を除き調査を中止した。1992年1月30日には現地調査が一旦終了した。

その後、ふるさとふれあい会館に多目的ホールが設置されることとなり、多目的ホールの建設予定地を調査することが必要となった。この調査は第3次調査で発見されていた古墳の石室を中心に、1992年11月11日から1同月20日まで行われた。

多目的ホール建設予定地を含めた第4次調査の実調査面積は約3,400m<sup>2</sup>である。

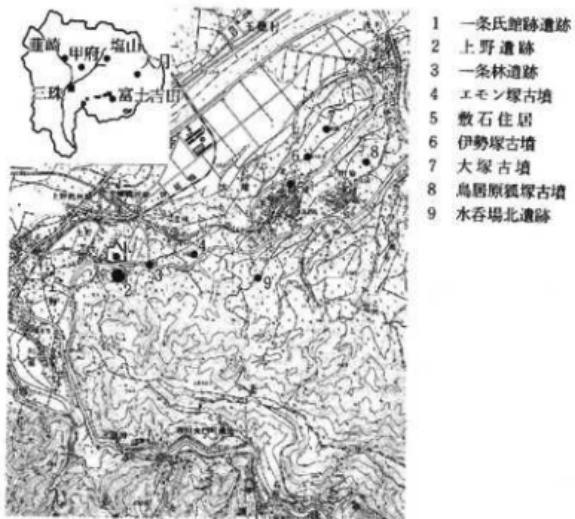
## 第2章 遺跡を巡る環境

### 第1節 地理的環境

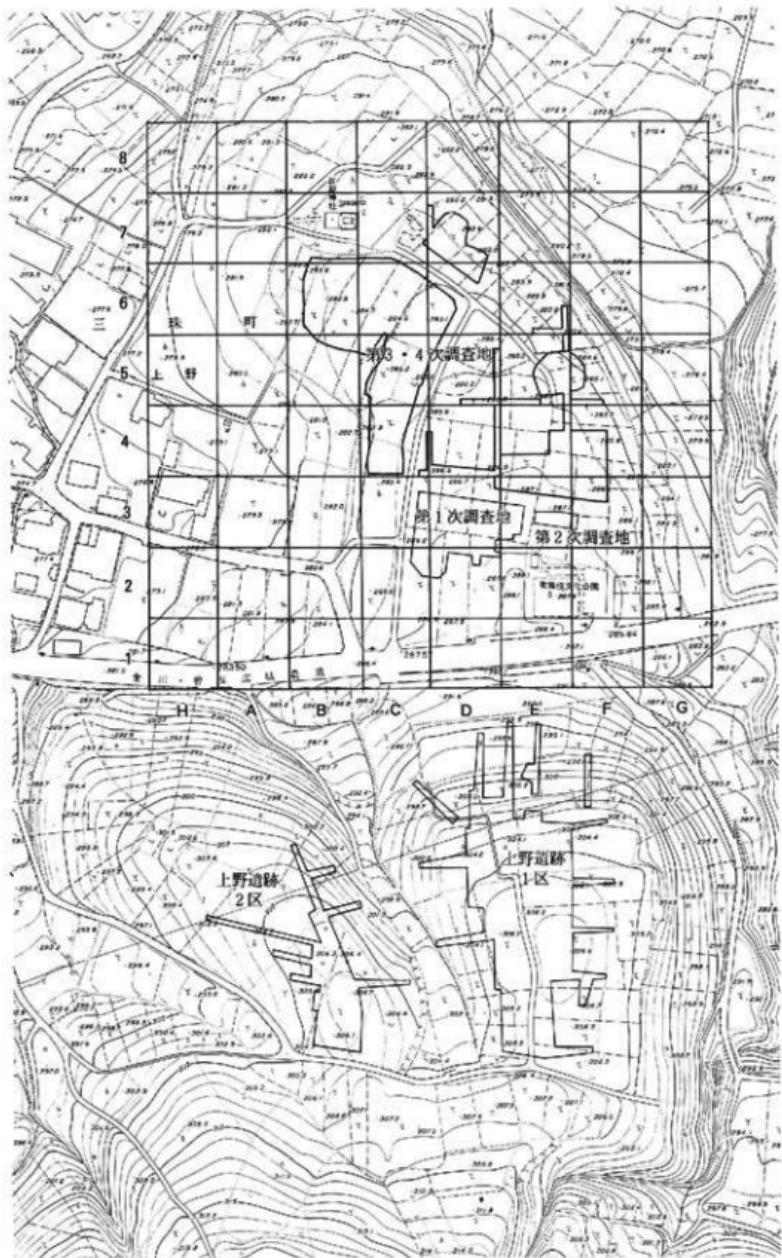
三珠町は甲府盆地南端、盆地の東縁を流れる笛吹川の左岸に位置する。笛吹川は本町の西で甲府盆地の中央を南下する釜無川と合流し、富士川となる。

町の大部分は御坂山地よって占められるが、御坂山地と笛吹川の間に曾根丘陵が形成されている。御坂山地から北西に流れる芦川は甲府盆地に接する町の西端で扇状地を形成し、笛吹川に合流する。三珠町において遺跡が濃密に分布するのはこの扇状地より北東の曾根丘陵上である。

本遺跡は笛吹川沿いの低地と御坂山地に挟まれた曾根丘陵上のわずかに北西方に向突出する舌状台地上に位置する。遺跡内の標高は280m台で、笛吹川沿いの低地との比高は約40mである。背後は一段高い台地で、標高は306m前後である。遺跡の東側は沢状の地形となっているが、西側へは比較的緩やかな傾斜で下降する。調査前は畠地として使用されていた。



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)



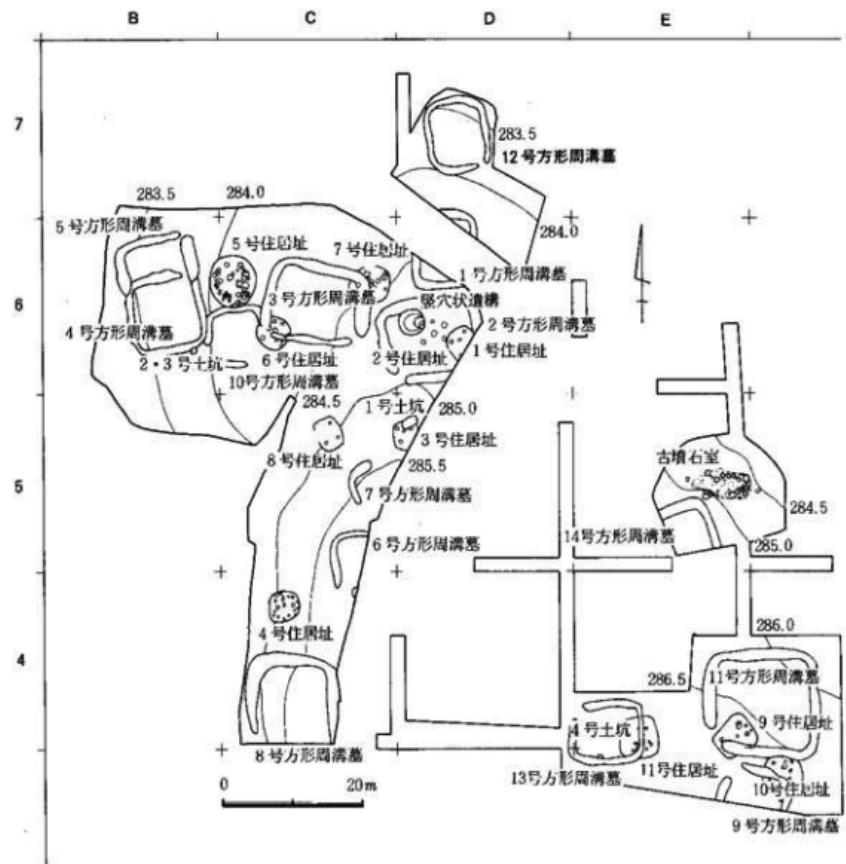
第2図 グリッド設定図【1/2,000】

## 第2節 歴史的環境

三珠町の丘陵地帯は古くから多くの考古遺物が採集されることで知られている。昭和45年から47年にかけての農道整備事業の際に確認された水呑場遺跡では、JH石器時代の石器、縄文時代早期の押型文土器が出土している。大塚西原地区では敷石住居と思われる遺構が発見されている。本格的な発掘調査が行われた遺跡としては、昭和63年に調査が行われ、縄文時代早期・中期の土器、占墳時代の土器などが出土した水呑場北遺跡、昭和53年に調査が行われ、弥生時代後期の堅穴住居址などが検出された。一条林遺跡、昭和63年に調査が行われ、縄文時代前期前半の堅穴住居址、弥生時代後期から古墳時代にかけての堅穴住居址、方形周溝墓、円形周溝墓、中世の墓壙群などが検出された上野遺跡などが挙げられる。上野遺跡は本遺跡南の一段上の台地に隣接し、本遺跡と同様多数の弥生時代の遺構が検出されていることから本遺跡との関係が注目される。

三珠町は曾根丘陵に点在する古墳群の南西端にあたり、十数基の古墳が所在したと考えられるが、現在墳丘が比較的良好残っているのは帆立貝式前方後円墳と思われる大塚古墳、円墳の伊勢塚古墳のみで、鳥居原狐塚古墳、前方後円墳とも伝えられるエモン塚古墳はほとんど原形を留めていない。鳥居原狐塚古墳からは内向花文鏡、赤鳥元年銘の神獸鏡が出土している。大塚古墳からは円筒埴輪、直刀、須恵器、土師器が採集されている。他に桜塚、仏塚、中塚、錢塚、オエン塚、堂塚、弁天塚などの古墳が存在したと伝えられているが、現在は墳丘などは全く確認できない。本遺跡の北に隣接する蹴裂神社には大形の石の累積が認められ、露出した古墳の石室である可能性がある。

この蹴裂神社は武田信玄の異母弟の一条信竜が構えた上野城の跡地と伝えられているが、本遺跡内では今まで中世の遺構は発見されていない。しかし隣接する上野遺跡では墓壙群が発見され、15世紀中葉から後半の年代が推定されている。



第3図 調査全体図 [1/800]

# 第3章 縄文時代の遺構と遺物

## 第1節 壺穴住居址

### 2号住居址（第4・5図、図版1）

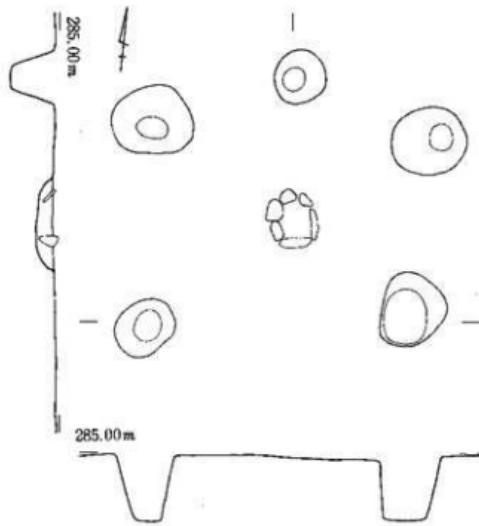
北西向きの緩斜面にあたるD-6グリッドに位置する。縄文時代前期の壺穴状遺構、弥生時代の1号住居址と重複する。

上部を大きく削平されているため、壁は検出できなかった。ビットの位置、遺物の出土範囲から推して、規模は直径5m前後と思われる。

ビットは5口検出された。北側のビットは直径55cm、深さ45cmとやや小形で、他の4口は直径が60cm～90cm、深さは63cm～78cmを測る。周溝は検出されなかった。

床面はビットに囲まれる範囲内で硬化が認められた。

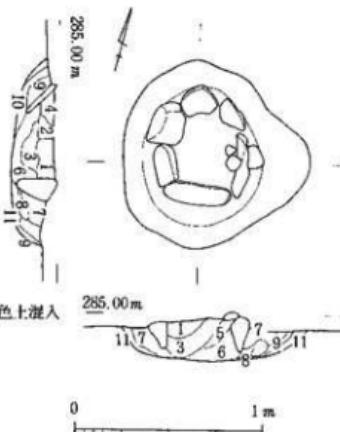
炉は石耕炉で、6点の石が並べられている。石臼は南北65cm、東西36cmを測り、南側は長さ36cm、東側も長さ36cmの長い石を用いて直線的に、他は弧を描くように石が配置されている。堀り方の直径は1m、深さは18cmである。掘り方内の石臼の外側に焼土が顯著であった。



第4図 2号住居址



- 1 暗褐色土 (7.5 YR 3/4) 焼土多量  
 2 褐色土 (7.5 YR 4/4) 焼土少量  
 3 暗褐色土 (7.5 YR 3/4) 焼土少量  
 4 褐色土 (7.5 YR 4/3) 焼土・炭化物多量  
 5 暗褐色土 (7.5 YR 3/4) 焼土微量  
 6 暗褐色土 (7.5 YR 3/4) 焼土微量・黒褐色土混入  
 7 暗赤褐色土 (5 YR 3/6) 焼土主体・炭化物多量  
 8 暗赤褐色土 (5 YR 3/6) 焼土主体・炭化物多量・黒褐色土混入  
 9 褐色土 (7.5 YR 4/6) 焼土微量・黒褐色土混入  
 10 褐色土 (7.5 YR 4/6) 焼土微量  
 11 褐色土 (7.5 YR 4/6)



第6図 2号住居址 炉址

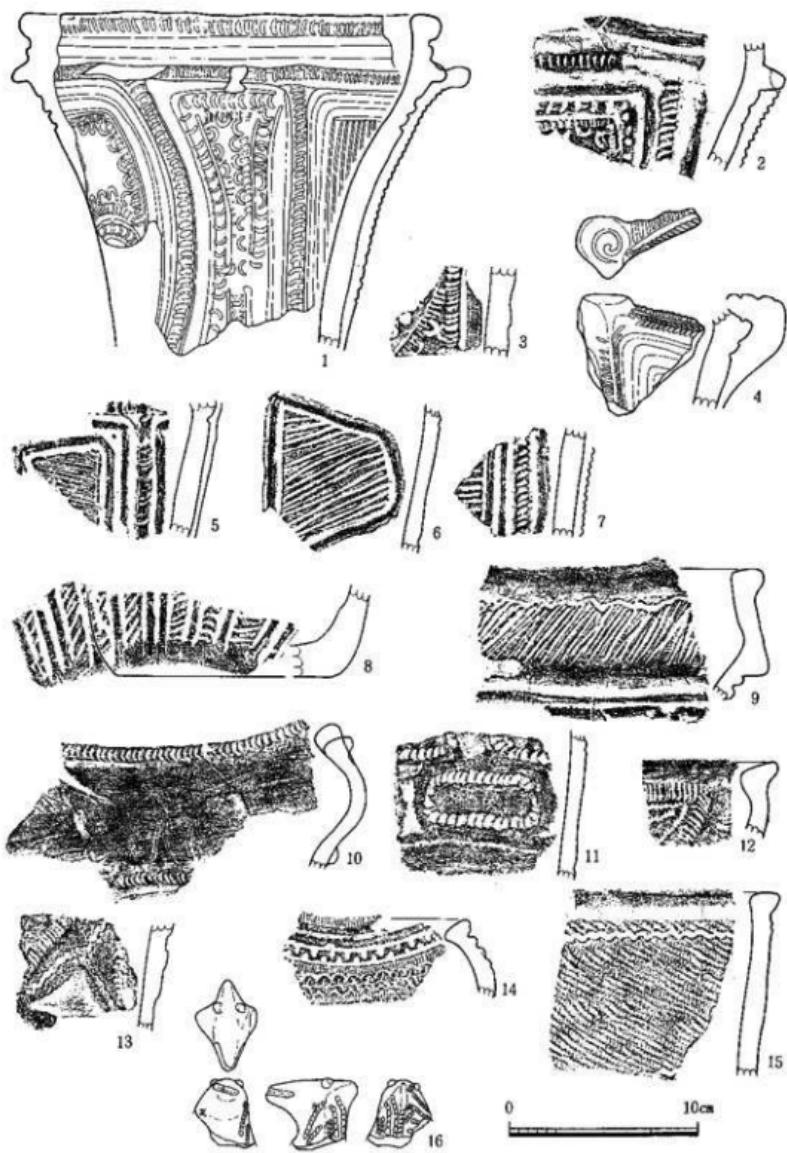
掘り込みの底面に近い位置から二次焼成を受けた土器の底部が出土している。

本址は山上土器から見て中期前半の所産と思われる。

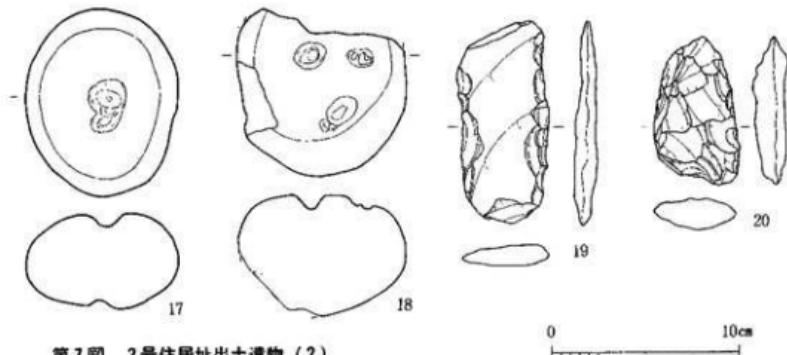
#### 出土遺物 (第6・7図、図版15)

1は推定口径23cm、残存高18cmを測る深鉢である。1～3にはキャタピラ文、半円形刺突文が、1・2には爪形文が施されている。いずれも赤褐色を呈する。4の突起の上面には渦巻状の沈線が、隆帶上には矢羽根状の刻み目が施されている。赤褐色を呈する。5・6は平行沈線による区画内に斜位の沈線が充填されている。5には隆帶上に爪形文が施されている。5～7は赤褐色を呈する。8は推定底径11cmを測る。縦位の平行沈線と斜位の沈線、爪形文が施されている。明褐色を呈する。9は口縁部に斜位の沈線と不規則な横位の波状沈線が施されている。9・11は橙色を呈する。10は隆帶上に爪形文が施されている。赤褐色を呈する。12はキャタピラ文と三角押文が施されている。13はキャタピラ文と波状沈線が施されている。12・13は赤褐色を呈する。14は口縁部に爪形文が、その下の横位の沈線間に丸棒状工具の側面を使用した交互押印が施されている。その下はキャタピラ文が施され、半円形の刺突文が内側を向かい合わせにして2列並ぶ。2列の刺突文の間に緩い波状の細かい三角押文が、半円の内側にも細かい三角押文がほどこされている。暗褐色を呈する。15は繩文と横位の波状沈線が施されている。赤褐色を呈する。16は把手と思われる。細長い顔に目と口が表出されている。首の背面に刻み目が、首の側面に角押文状の連続刺突が施されている。橙色、一部黒褐色を呈する。

17・18は安山岩製の磨石である。19・20は粘板岩製の打製石斧である。



第6図 2号住居址出土遺物（1）



第7図 2号住居址出土遺物（2）

#### 4号住居址（第8・9図、図版2）

南向きの斜面にあたるC-4グリッドに位置する。

平面形は丸みをもった台形で、規模は東壁寄りで東西4.0m、西壁寄りで東西4.3m、南北は4.3mを測る。壁高は斜面上位にあたる東壁で45cm、斜面下位にあたる西壁で15cmを測り、西に向かって徐々に低くなる。

ピットは19口検出された。直徑25cm～55cmの比較的小形のもので、深さは21cm～61cmである。屑溝は検出されなかった。

覆土下部は黄褐色土を主体としていたが、炉址の周辺では焼土を含む暗褐色土層が認められた。

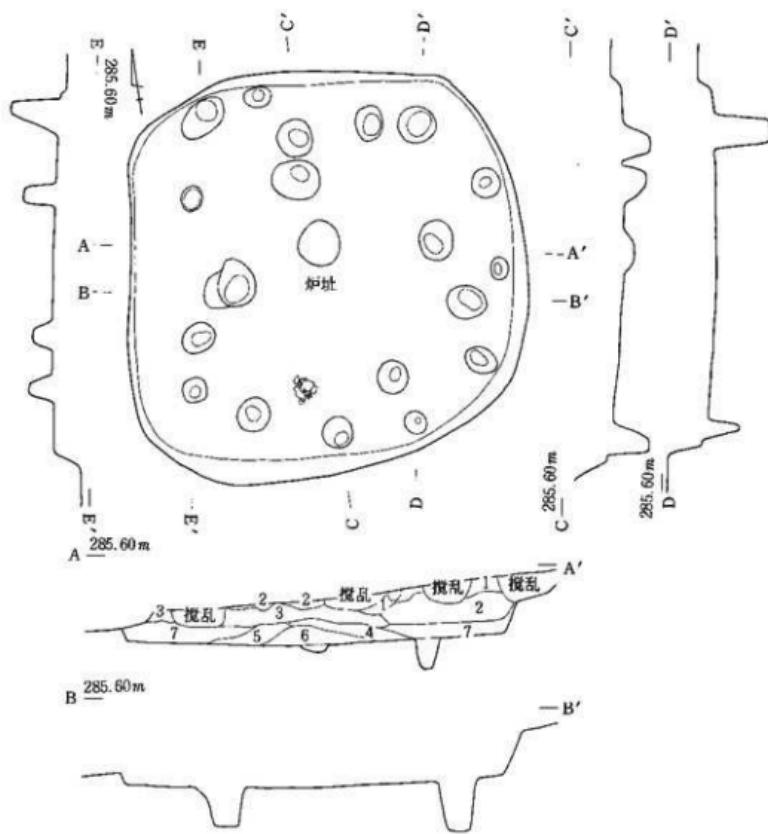
炉址は地床がで、床面中央よりやや北寄りで検出された。直徑50cm前後の不規円形を呈し、深さは10cmである。

住居址中央より南よりの床面から底部を欠損した十三菩提式土器が出土した。他に十数点の土器片が出土しているが、それらは覆土中からの出土である。

本址は出土土器から見て前期木葉の所産と思われる。

#### 出土遺物（第10図、図版15）

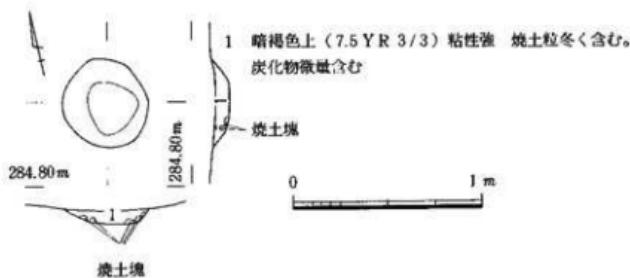
1は床面から出土した鉢形土器で、口径20cm、残存高14cmを測る。口唇部は内側に肥厚する。口縁部に長楕円形の隆帯が巡り、その下に三角形の陰刻が横に並ぶ。さらにその下に綫長のレンズ状の陰刻とそれをとりまく浅い平行沈線が横に並び、上下の空白部に三角形の陰刻が配されている。胴下半部は弧状の浅い平行沈線文が施されている。胴下半部は内湾するが、下端で外反気味となることから脚台が付く可能性がある。赤褐色を呈し、胎土に多量の金雲母を含む。2は三角形の陰刻を取り扱むように平行沈線文が施され、一部に刻み目が施されている。赤褐色を呈する。3～6は細い粘土紐が貼り付けられた土器で、いずれも地文に繩文が施されている。3は口唇部に刻み目が施され、内折した口縁の内面にも繩文と粘土紐の貼り付けがなさ



- |   |                 |
|---|-----------------|
| 1 | 褐色土 (10YR 4/4)  |
| 2 | 暗褐色土 (10YR 3/3) |
| 3 | 黑褐色土 (10YR 3/2) |
| 4 | 暗褐色土 (10YR 3/4) |
| 5 | 褐色土 (10YR 4/4)  |
| 6 | 暗褐色土 (10YR 3/4) |
| 7 | 褐色土 (10YR 4/6)  |
- 烧土・炭化物微量含心  
燒上・炭化物少量含心  
燒土・炭化物少量含心  
暗褐色土少量混入

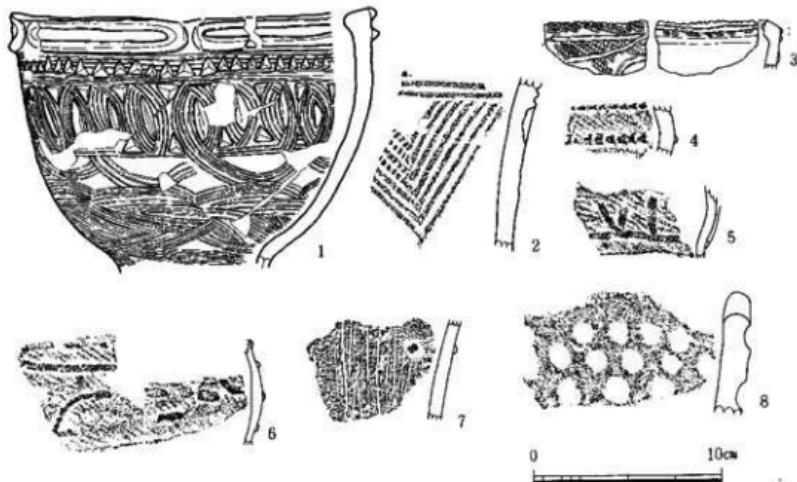
0 2 m

第8図 4号住居址



第9図 4号住居址 炉址

れている。器厚は7mmと薄い。4は粘土紐に半截竹管の内側を用いた押し引きが施されている。5・6は器厚が4mm前後と薄い。3～6は赤褐色を呈し、胎土に少量の金雲母を含む。7は縦位の細い平行沈線文とボタン状の貼り付け文が施されている。赤褐色を呈する。8は小波状を呈する口縁部である。全面に多数の円形の押圧がなされている。器厚は15mmと厚い。胎土に金雲母を含み、暗褐色を呈する。



第10図 4号住居址出土遺物

### 5号堅穴住居址（第11・12図、図版3）

西向きの緩斜面にあたるB・C-6グリッドに位置する。

楕円形を呈し、南北7.5m、東西6.6mを測る。深さは20~40cmである。

多数のピットが検出された。ピットは床面全体に散在するのではなく、特定の場所に重複しながら集中する傾向が認められる。周溝は検出されなかった。

覆土は褐色土を主体としたもので、下層は粘性が強く緻密であった。一部に暗褐色土の堆積が認められた。

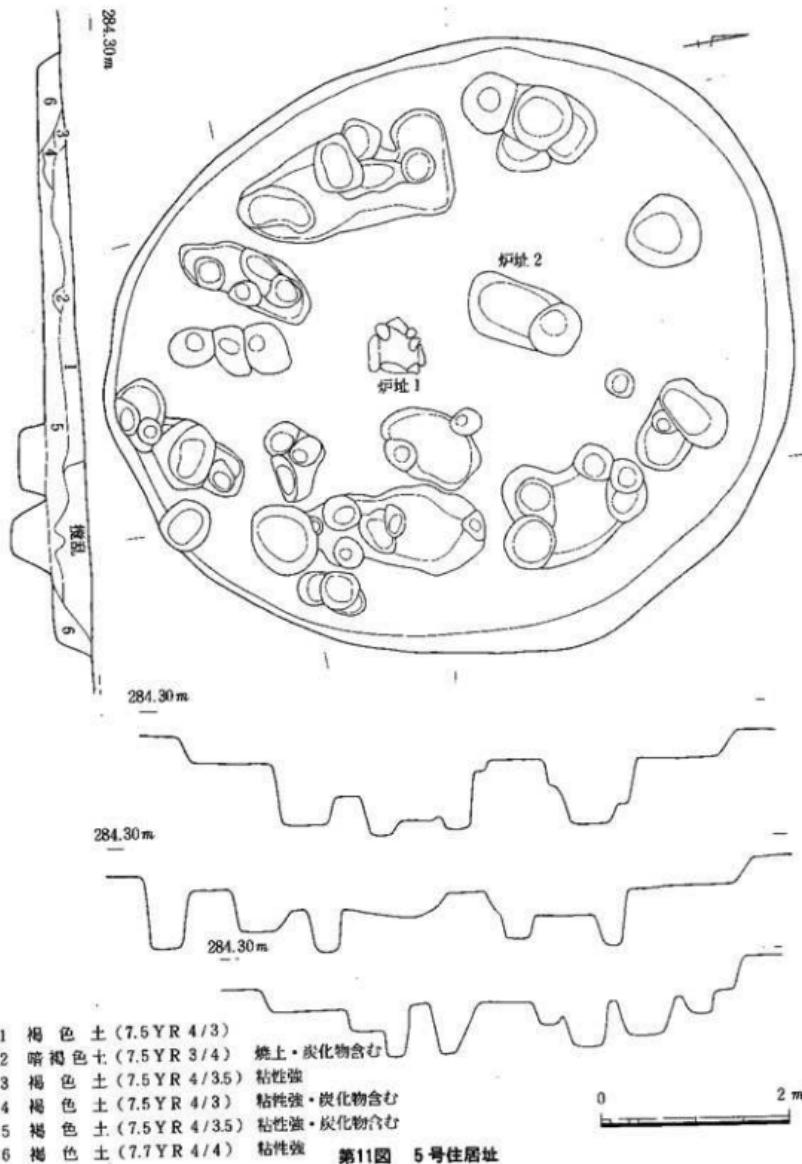
炉址は2ヶ所で検出された。炉址1は石圓炉で、床面中央よりやや南に築かれている。石圓いは南北60cm、東西60cmを測る。8点の石が用いられているが、南側は長さ40cm、東側は長さ30cmの長い石で直線的に築かれている。他は弧を描くように石が配置されている。掘り込みの深さは17cmである。南側の石は多孔石である。炉址2は石圓いをもたない。床面中央よりやや北寄りで検出された。北側をピットによって切られているが、楕円形を呈し、長軸は55cmと推定され、短軸は33cmを測る。深さは21cmである。少量の焼土が認められた。

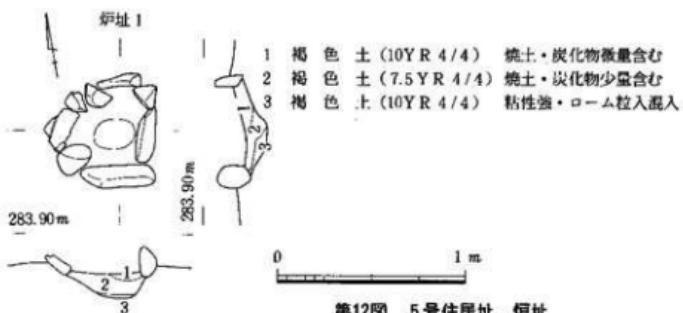
遺物はすべて覆土中から床面にかけて散漫に出土した。本址は上偶、十製円板の出土が多いのが特徴である。

本址は出土遺物から見て中期前半の所産と思われる。

### 出土遺物（第13~17図、図版16）

1は口径20cmと推定され、残存高19cmである。隆帯上に刻目が施されている。橙色を呈する。2は無文の上器で、口径12cmと推定され、残存高は12cmである。橙色を呈する。3~6は三角押文が施されている。3は横位と波状の隆帯が付けられている。いずれも赤褐色を呈する。7~13は三角押文とキャタピラ文が施されている。7~9は浅鉢と思われる。いずれも赤褐色を呈する。14~15はキャタピラ文と波状沈線が施されている。いずれも赤褐色を呈する。16はキャタピラ文が施されている。赤褐色を呈する。17はキャタピラ文が施され、突起部に刻み目が施されている。赤褐色を呈する。18~19は幅の狭いキャタピラ文が施されている。18の隆帯上には爪形文が施されている。17は赤褐色、18は暗褐色を呈する。20は先端中央に小さな切り込みを入れた工具を用いた押し引き文が施されている。赤褐色を呈する。21は先端をW字状に加工した工具を用いた押し引き文が施されていると思われる。橙色を呈する。22~25は爪形文が施されている。いずれも赤褐色を呈する。26~28は隆帯上に矢羽根状の刻み目が施されている。いずれも赤褐色を呈する。29は地文に繩文が、隆帯上に刻み目が施されている。赤褐色を呈する。30~36は沈線による区画の内側に沈線が充填されている。36は内折する口縁である。30は暗褐色、31~33・36は赤褐色、34・35は橙色を呈する。37は波状の口縁に沿って3条の沈線が施されている。暗褐色を呈する。38~41は繩文が施されている。38は外折する口縁の直下に波状沈線が施されている。いずれも赤褐色を呈する。





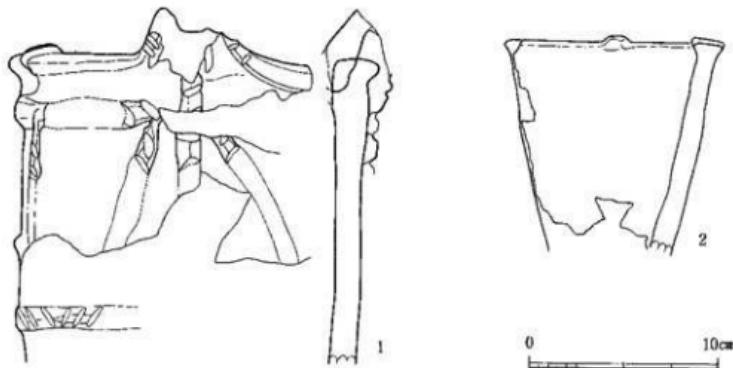
第12図 5号住居址 炉址

42・43はミニチュア土器である。42は浅鉢形で、口径は6.0cmと推定され、残存高は2.4cmである。内面は赤彩されている。胴部外面に縄文原体と思われる押圧文が施されている。黒褐色を呈する。43は手づくねの土器である。口径4.7cm、底径2.8cm、器高は2.0cmを測る。橙色を呈する。

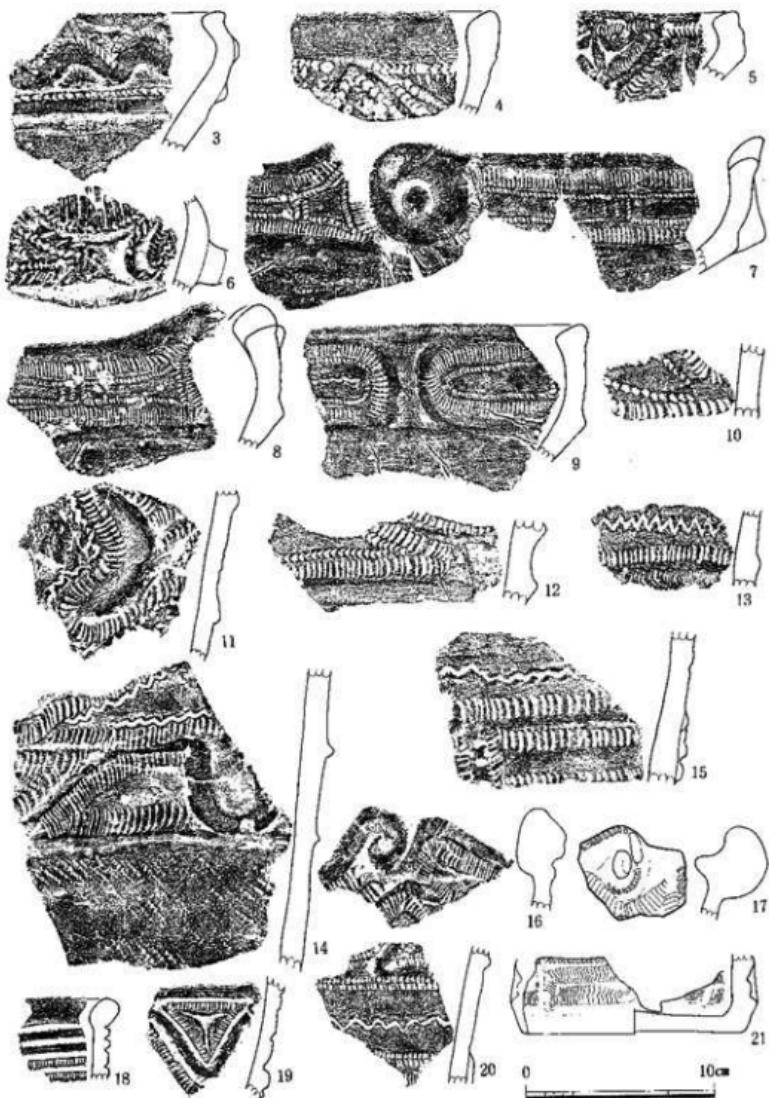
44～48は土偶である。44は沈線、刻み目、先端が丸みを帯びた工具による押し引きが施されている。46は直径4mmの穴が貫通している。いずれも橙色を呈する。

49～58は上製円板で、直径は3.0～7.0cmである。

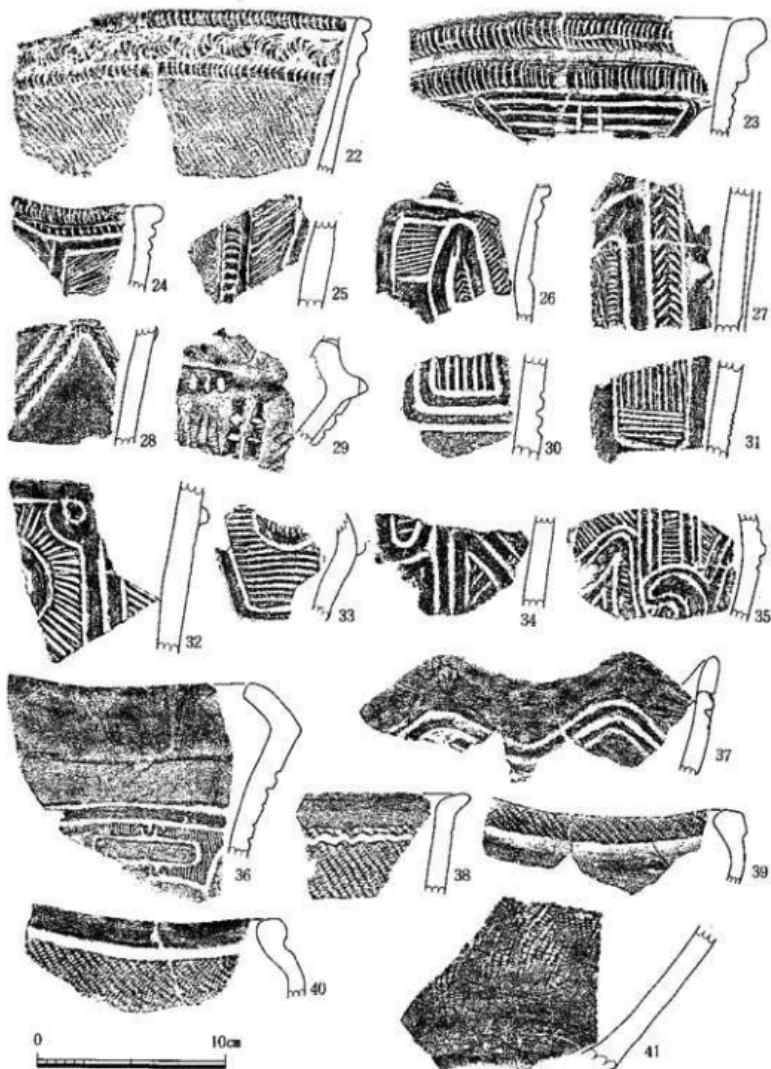
59は安山岩製の多孔石で、石窯炉の構築材として使用されていたものである。60・61は磨石で、いずれも安山岩である。62～64は打製石斧で、62は頁岩、63・64は粘板岩である。65～68はスクレイバーで、いずれも千枚岩である。



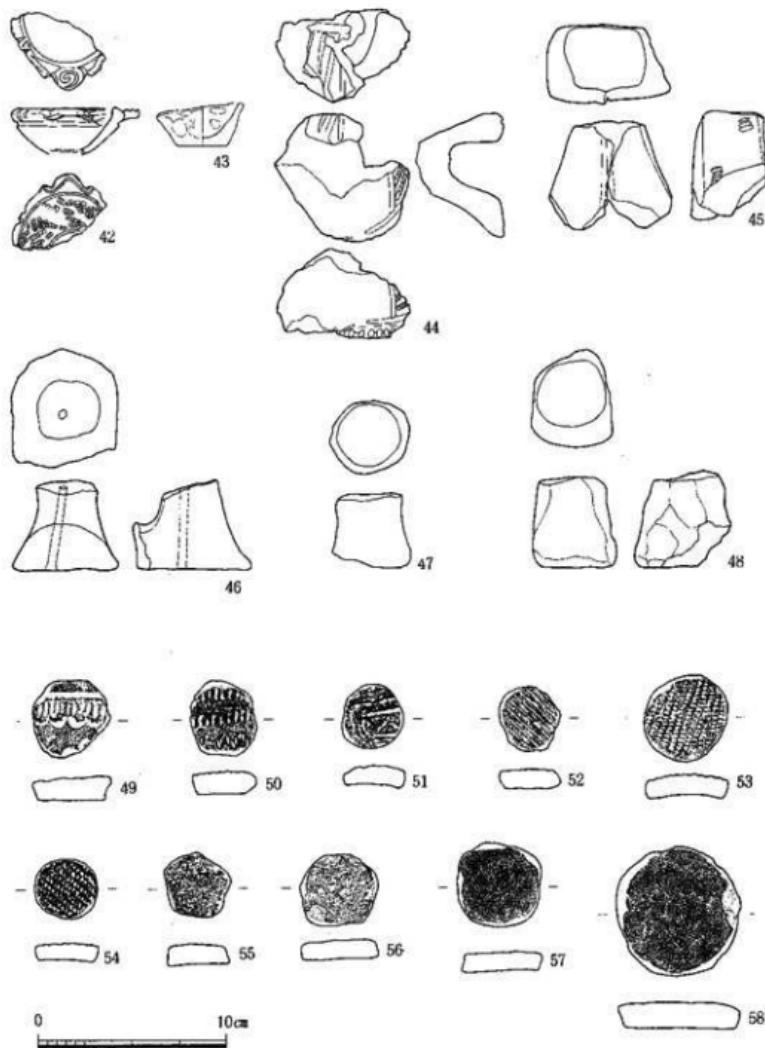
第13図 5号住居址出土遺物（1）



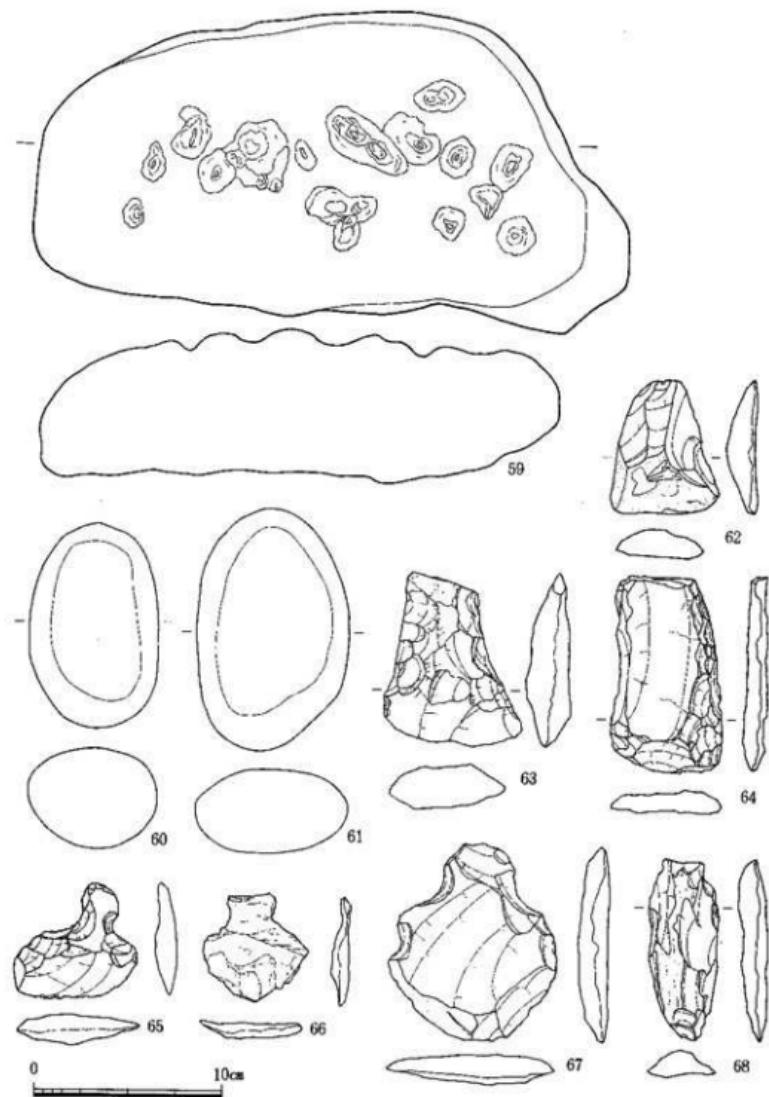
第14図 5号住居址出土遺物（2）



第15图 5号住居址出土遗物（3）



第16圖 5號住居址出土遺物（4）



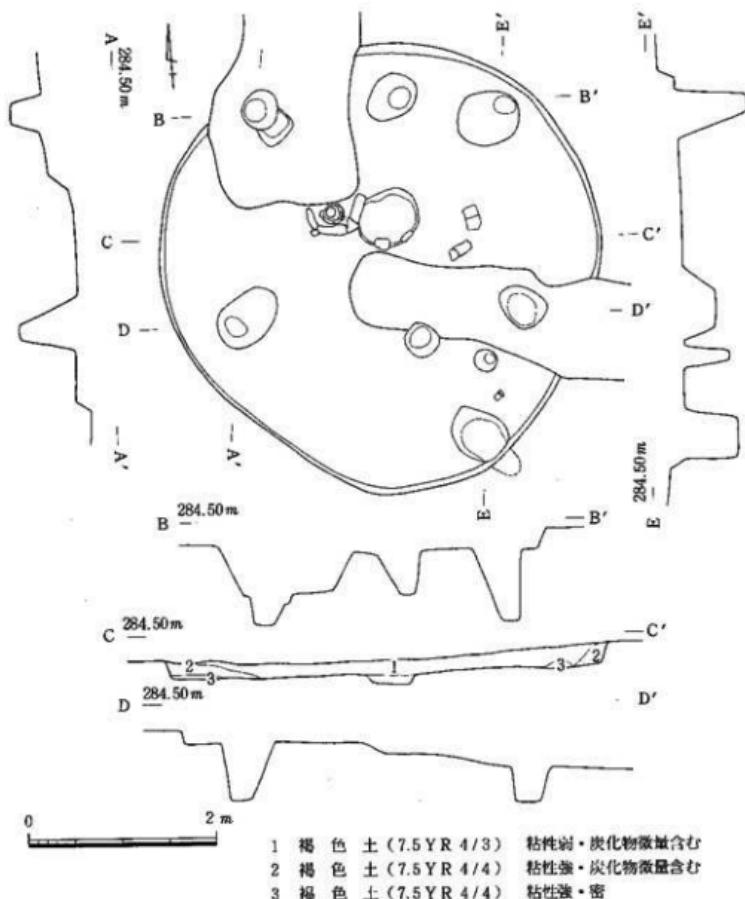
第17图 5号住居址出土遗物 (5)

6号住居址（第18・19図、図版4）

西向きの緩斜面にあたるC-6グリッドに位置し、3号方形周溝墓に切られる。

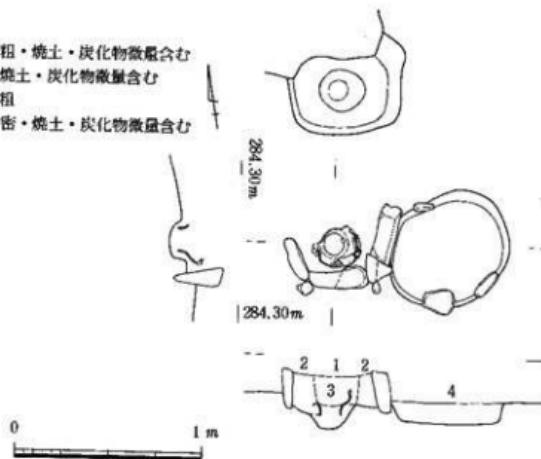
4.55×4.75mの不整円形を呈し、深さは25cmである。

ピットは8口検出された。深さは、方形周溝墓に上部を切られ推定値となったものも含め、45~77cmである。周溝は検出されなかった。



第18図 6号住居址

- 暗褐色土 (10YR 3/3) やや粗・焼土・炭化物微量含む
- 暗褐色土 (10YR 3/4) 密・焼土・炭化物微量含む
- 暗褐色土 (10YR 3/4) やや粗
- 褐色土 (7.5YR 4/3) やや密・焼土・炭化物微量含む



第19図 6号住居址 炉址

覆土は3層に分けられたが、すべて褐色土である。

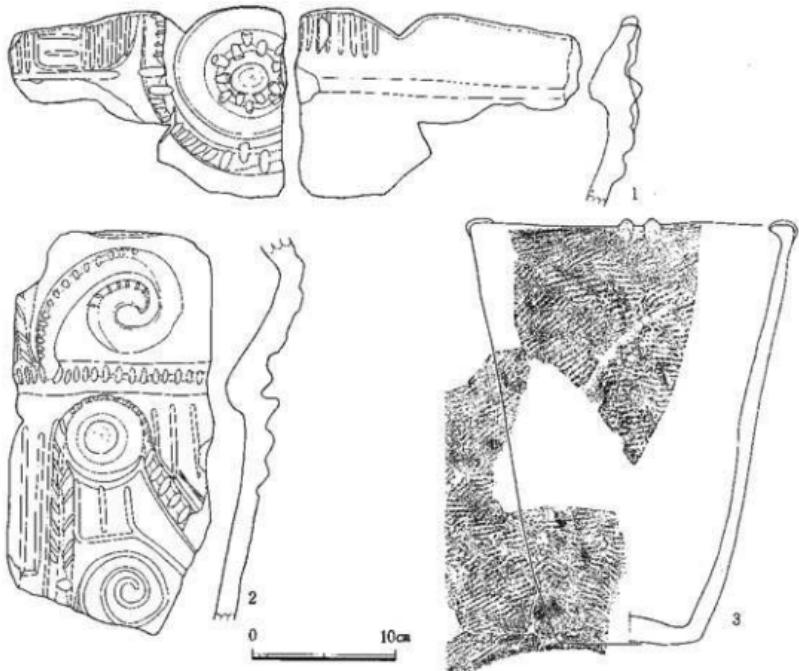
炉址は床面中央よりやや北に築かれている。石窓の北半分を3号方形周溝墓のために失っている。石窓の中に胴部下半を欠いた土器が埋設されていた。石窓の直径は60cm前後と思われ、掘り込みの深さは15cmである。炉址の東に浅い不整円形の掘り込みが検出された。直径は60×70cm、深さは10cmである。覆土は褐色土で、微量の焼土・炭化物が検出された。

遺物は覆土中から床面にかけて散漫に出土した。

本址は出土上器から見て中期前半の所産と思われる。

#### 出土遺物（第20・21図、図版17）

1と2は大形の深鉢で、同一個体と思われる。沈線と、刻み目を持つ偏平な隆帯によって環状、渦巻状の文様が描かれている。口縁部に付けられた円形の隆帯の裏側に縦位の沈線が並ぶ。橙色を呈する。3は直線的に開く深鉢で、口径23cm、底径9.6cmと推定される。器高は29cmである。口縁部に2つの貼り付けが並び、全面に無筋の繩文が施されている。橙色を呈する。4は炉体として使用されていた深鉢である。口縁部に、刻み目を持つ大波状隆帯と環状の隆帯が組み合わされている。胴部は繩文が施されている。5は沈線による長方形の区画の中に刻み目が施されている。赤褐色を呈する。6は沈線と押捺された隆帯が縦位に施されている。赤褐色を呈する。7は緩い突起を持つ口縁部である。突起の先端上部に縦長の刻み目があり、その下に横位の短沈線が施されている。胴部には繩文が施されている。暗褐色を呈する。8は把手である。赤褐色を呈する。9は動物の頭部を模した把手と思われる。沈線によって口が表現されている。



第20図 6号住居址出土遺物(1)

赤褐色を呈し、焼成は堅緻である。

10は深鉢形のミニチュア土器である。口径 7.5cm、底径 4.5cm、器高は 9.0cmを測る。把手は正面のみで、縁位の粘土紐の貼り付けは 4 単位である。地文に無節の縄文が施されている。暗褐色を呈する。

11・12は磨石で、いずれも安山岩である。13・14は打製石斧で、いずれも原石面を残す。13は結晶片岩、14は粘板岩である。



第21図 6号住居址出土遺物（2）

## 7号住居址（第22・23図、図版5）

北西向きの緩斜面にあたるC-6グリッドに位置し、3号方形周溝墓に切られる。

5.60×5.65mの不整円形を呈し、深さは25cmを測る。

床面の中央、炉址の北に深さ20cm前後の浅い掘り込みが2ヶ所検出された。他に14口のピットが検出された。直径は40～65cmで、深さは擾乱によって上部を失ったため推定値となったものも含め39～74cmである。住居址：中央部の床下に厚さ10～20cmの焼上層が検出された。周溝は検出されなかった。

覆土は上部が暗褐色十、下部と壁際が褐色土であった。

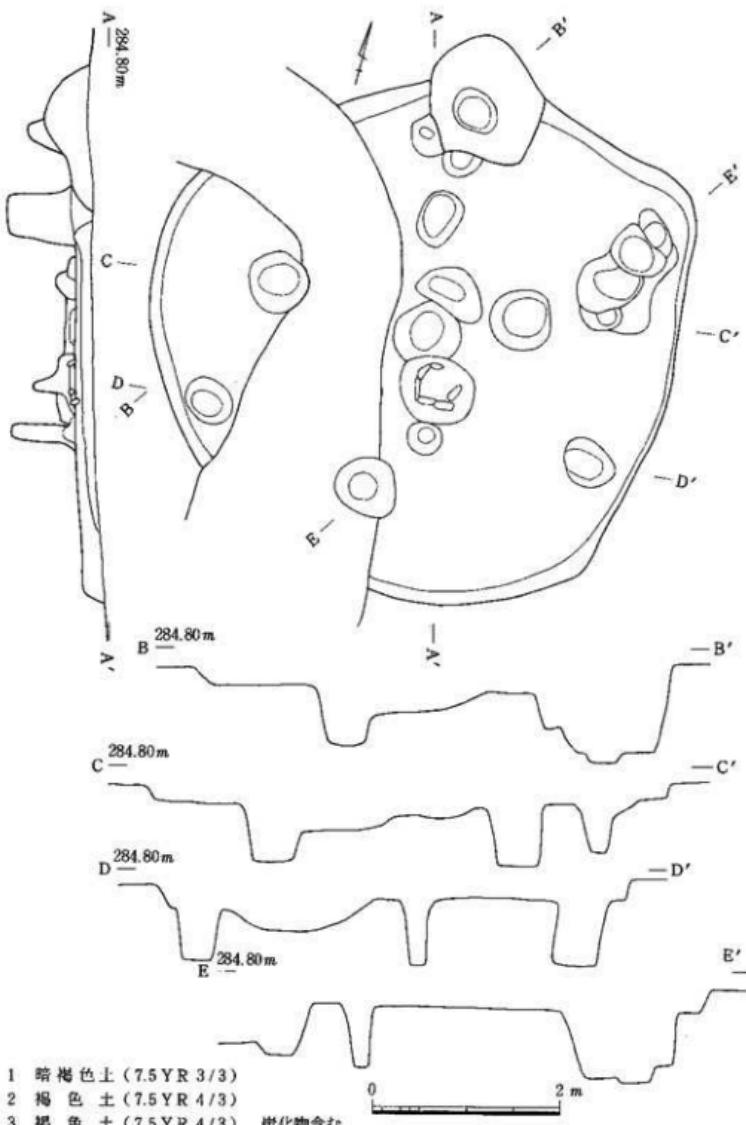
炉址は石囲炉で、床面中央よりやや南に築かれている。北東部の石を失っているが、南辺と西辺は石が直線的に配置されている。石囲いの規模は45×50cmで、床下の焼土層上に築かれている。石囲いの内側ではほとんど焼土が認められなかった。石囲いの中央直下に地山から25cmの深さのピットが検出された。

本址は遺存状態が悪いにもかかわらず、遺物は本遺跡の住居址の中では最も多い。土器は復土中から床面にかけて、多数の小破片が散乱するような状態で出土した。

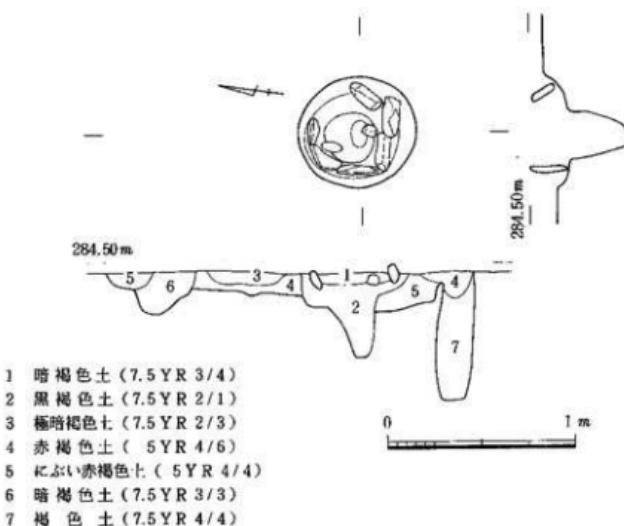
本址は出土土器から見て中期前半の所産と思われる。

## 出土遺物（第24～26図、図版18）

1は浅鉢形土器である。口径は34cmと推定され残存高は11cmである。口縁部に波状の隆帯が配され、その下は鋸状に張り出し、そこから1ヶ所突出した部分が造られている。赤褐色を呈する。2は推定口径17cmを測る深鉢で残存高は10cmである。口縁部は強く内湾する。細い隆帯列が配される。口縁部の突起から鋸状隆帯が垂下する。赤褐色を呈する。3は深鉢で、口径は20cmと推定され、器高は24cmである。口縁部は緩く内湾する。口縁部に刻み目を持つ弧状の隆帯を配し、その内側に刻み目を持つ弧状、円形の隆帯と刺突文が施されている。その下に逆「U」字状の断面三角形の隆帯が配されている。口縁部から胴部中位まで4、5条の断面三角形の隆帯列が配されている。胴部下半は無文である。赤褐色を呈する。4・5は同一個体である。キャリバー形の深鉢で、4単位の中空の把手を持つ。口縁部に環状、沈線を伴う楕円形、三叉文を組み込む花弁状の貼り付けがなされている。くびれ部の下は網文が施される部分と偏平な隆帯が付けられる部分に分けられる。把手は背面にも円孔が開けられている。赤褐色を呈する。6は三角押文、7は三角押文とキャタピラ文が施されている。いずれも赤褐色を呈する。8は先端に抉りを入れた工具によるキャタピラ文と波状沈線文が施されている。褐色を呈する。9～12は爪形文が施されている。いずれも赤褐色を呈する。12・13は沈線による区画の中に刻み目が充填されている。13は赤褐色を呈する。14は刻み目が連続施文されている。赤褐色を呈する。15は小形の上器で、口縁部に2列の隆帯が横走し、隆帯上に刻み目が連続施文されている。褐色を呈する。16～19は沈線による区画の中に沈線が充填されている。16は刻み目の



第22圖 7号住居址



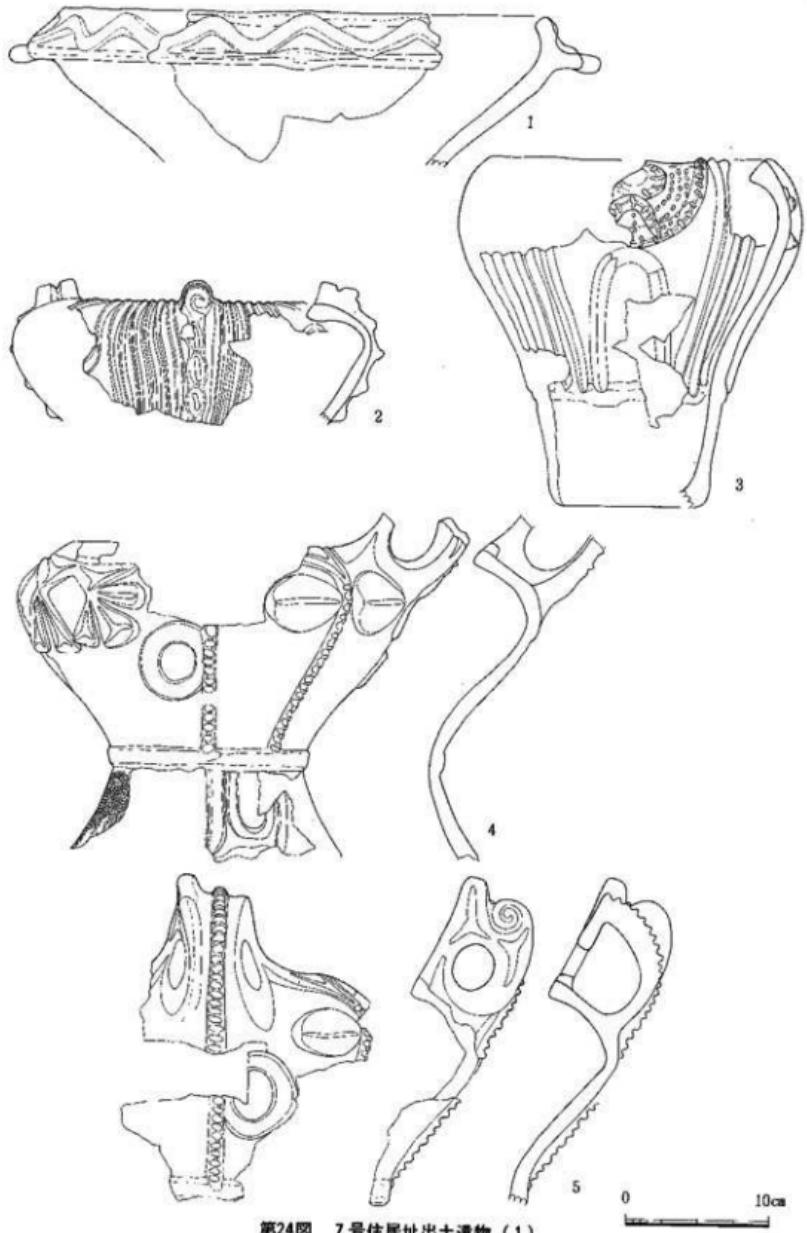
第23図 7号住居址 炉址

連續施文がなされている。19は弧状の沈線の内側に沈線が充填されている。16～18は暗褐色、19は赤褐色を呈する。20は隆帶による椭円形の区画の中に椭円形の沈線が二重に施され、その内側には刻み目が施されている。黒褐色を呈する。21は渦巻状、三叉文状の沈線が施されている。赤褐色を呈する。22は横走する隆帶の上面に刻み目が、垂下する隆帶に爪形文が施されている。赤褐色を呈する。23は太い粘土紐が「U」字状に貼り付けられ、その上端に丸棒状の工具による沈線状の押圧がなされている。24は刻み目を持つ隆帶と粘土塊を連続して貼り付けた隆帶、施文のない隆帶が2条ずつ垂下する。赤褐色を呈する。25は小空の把手である。円孔が上下2段と背面に開けられている。赤褐色を呈する。

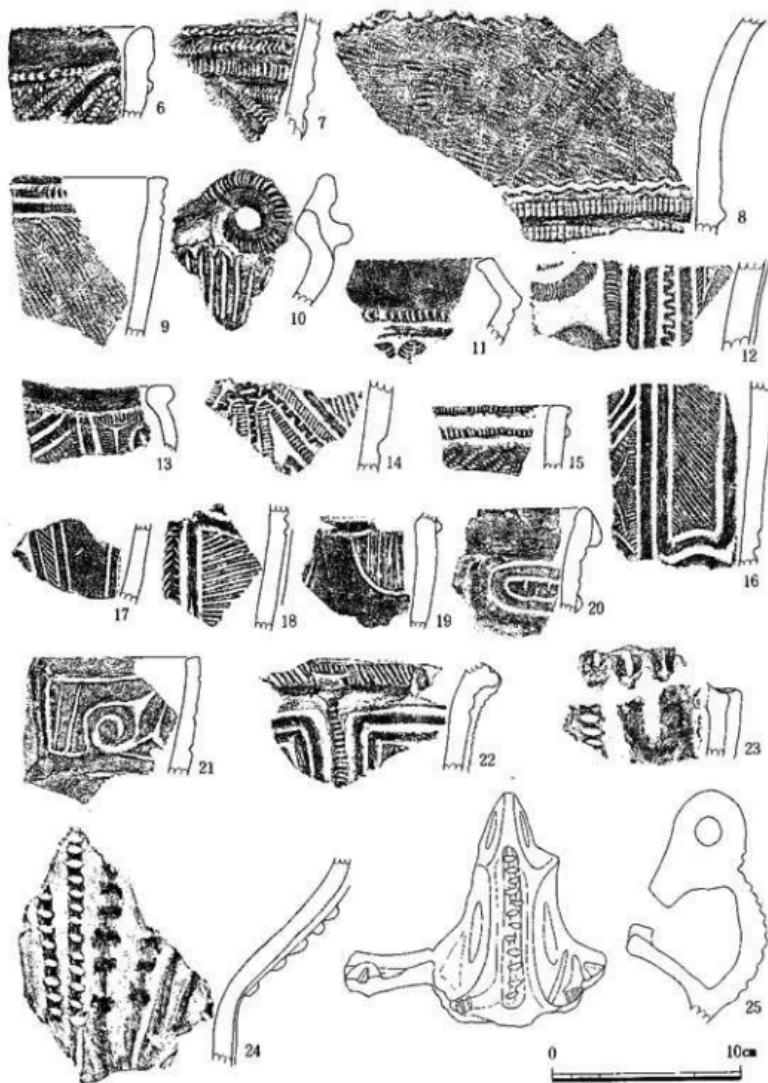
26はミニチュア土器である。底径は3.2cm、残存高は3.0cmを測る。無節の網文が施されている。褐色を呈する。

27～32は土製円板で、直径は2.2～5.0cmである。

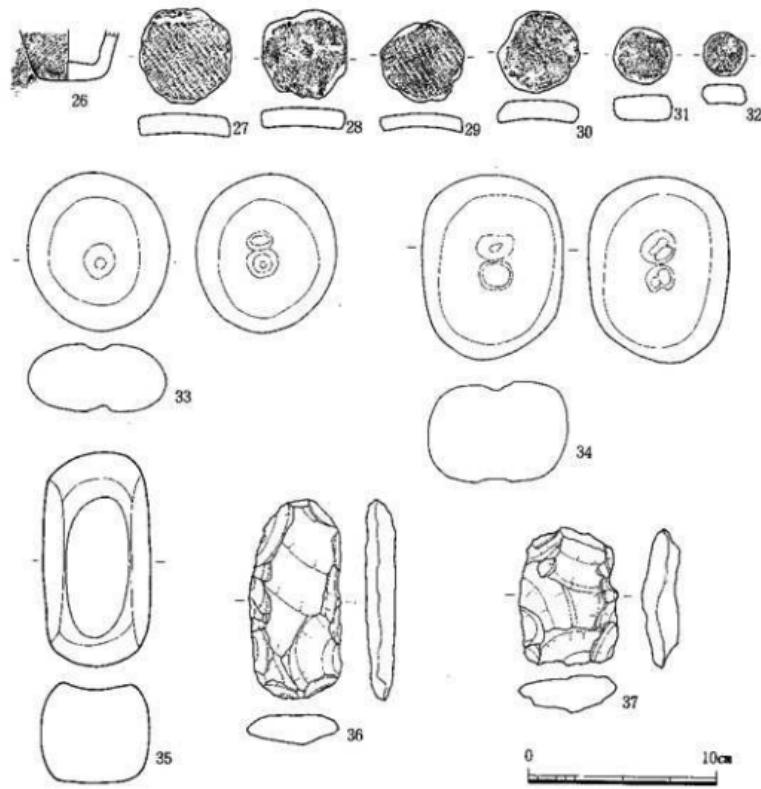
33・34は安山岩製の磨石で、いずれも表裏面に凹みを持つ。35は小形の石皿で、側面、裏面も面取りされている。安山岩製である。36・37は打製石斧で、いずれも粘板岩製である。



第24图 7号住居址出土遗物 (1)



第25圖 7号住居址出土遺物（2）



第26図 7号住居址出土遺物（3）

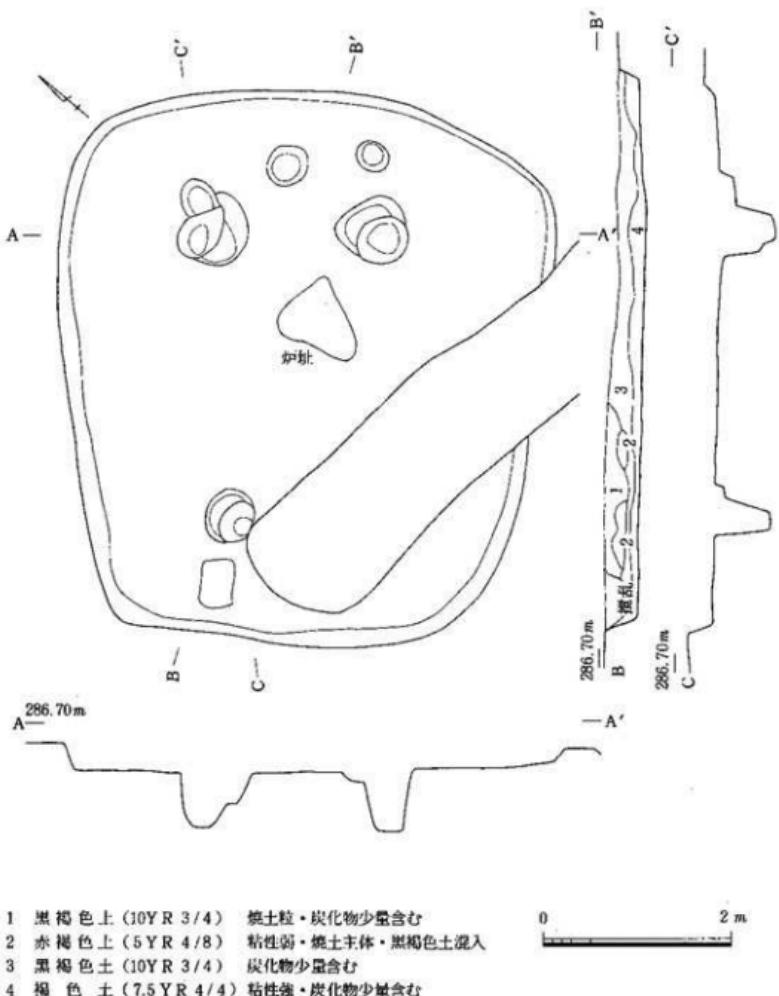
9号住居址（第27・28図、図版6）

北東向きの緩斜面にあたるE-4グリッドを中心位置し、11号方形周溝墓に切られる。平面形は丸みを持った台形で、東北壁付近で5.0m、南西壁付近で3.7m、東北壁の中央から南西壁の中央までは5.9mを測る。深さは25cm前後である。

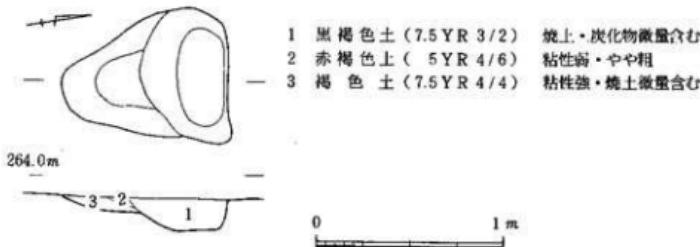
柱穴と思われるピットが3ヶ所で検出された。深さは60~68cmである。方形周溝墓に切られている部分に1口を想定すると長方形もしくは台形の配置となる。他に2口の小形のピットが検出された。

南西壁の西寄りで大形の石が検出された。55×35cmの長方形で、平らな面を上に向けていた。同定式石皿と呼ばれるものと思われるが、顕著な使用痕は認められなかった。

覆土は黒褐色土を主体とし、壁際と床面近くに褐色土が堆積していた。覆土中位に焼土を主体とした上層が認められた。



第27図 9号住居址



第28図 9号住居址 炉址

炉址は地床炉で、床面中央よりやや北寄りで検出された。90×75cmの三角形に近い平面形で、北側が深さ18cmとやや深く掘り込まれている。

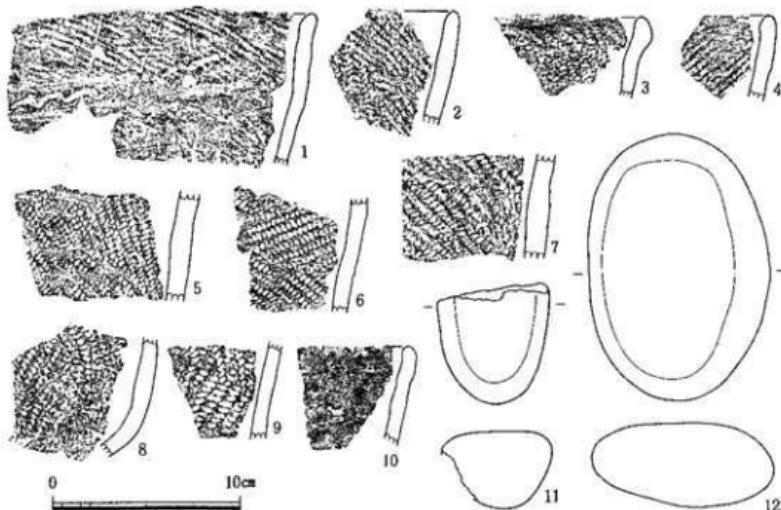
遺物はいずれも覆土巾からの出土である。

本址は出土土器から見て前期前半の所産と思われる。

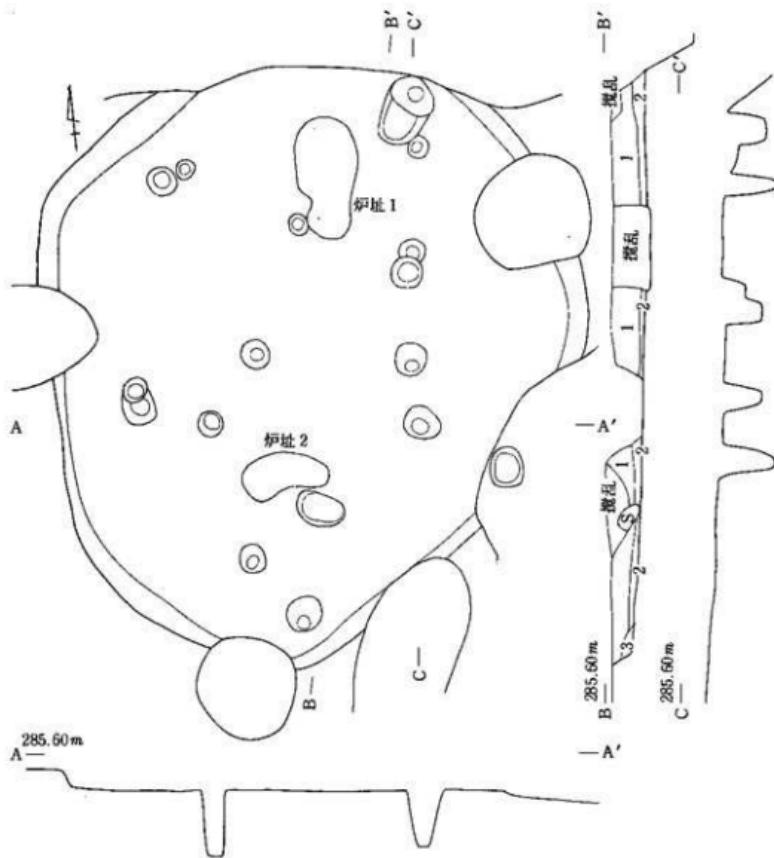
#### 出土遺物（第29図、図版19）

1～14は胎上に纖維を含む土器である。1・4は無節の縄文が施されている。3は外側に肥厚する口縁である。4・14は褐色、7は橙色、他は赤褐色を呈する。

14・15は安山岩製の磨石で、自然石を加工せずに使用している。



第29図 9号住居址出土遺物



- |                     |               |
|---------------------|---------------|
| 1 暗褐色土 (7.5 YR 3/3) | 粘性弱・やや粗・炭化物含む |
| 2 褐色土 (7.5 YR 4/3)  | 粘性中・炭化物含む     |
| 3 褐色土 (7.5 YR 4/4)  | 粘性强・暗褐色土混入    |

0 2 m

第30図 10号住居址

### 10号住居址（第30・31図、図版6）

東北向きの緩斜面にあたるF-3グリッドに位置する。9・11号方形周溝墓に切られ、さらに多数の搅乱を受けているため遺存状態は悪い。

平面形は6.5×5.9m程度の不整円形と思われる。深さは22cmである。

ピットは16口検出された。深さは25~73cmである。北西隅に二つ並んだピットのうちの西のピットから4点の磨石が出土している。

床面中央よりやや南で大形の石が検出された。52×35cmの楕円形で、北側は床面に接しているが、南側は床面から浮き、傾いた状態で出土した。

覆土は暗褐色土が主体で、壁際と床面近くに褐色土の堆積が認められた。

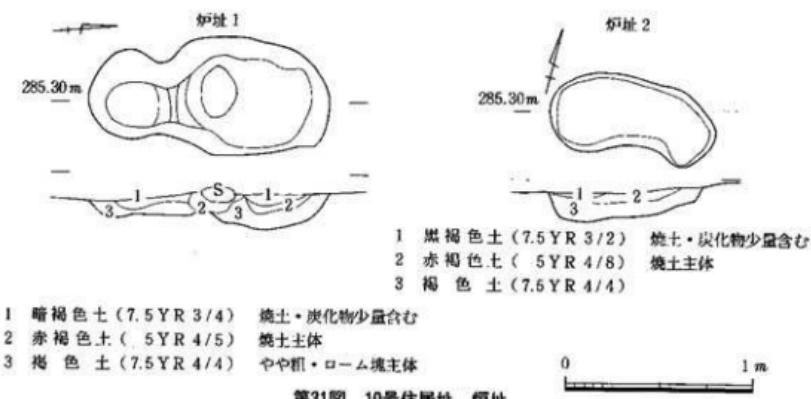
炉址と思われる焼土の堆積が2ヶ所で検出された。炉址1は床面中央より北よりももので、炉址2は床面中央より南よりもものである。いずれも30cm前後の掘り込みを持つ地味である。炉址1は中央部に焼土が堆積し、その上から27×20cmの偏平な石が出土している。

遺物は覆土中から床面にかけて比較的多く出土したが、上器はすべて小破片で、復元可能なものはなかった。磨石の出土が多い。

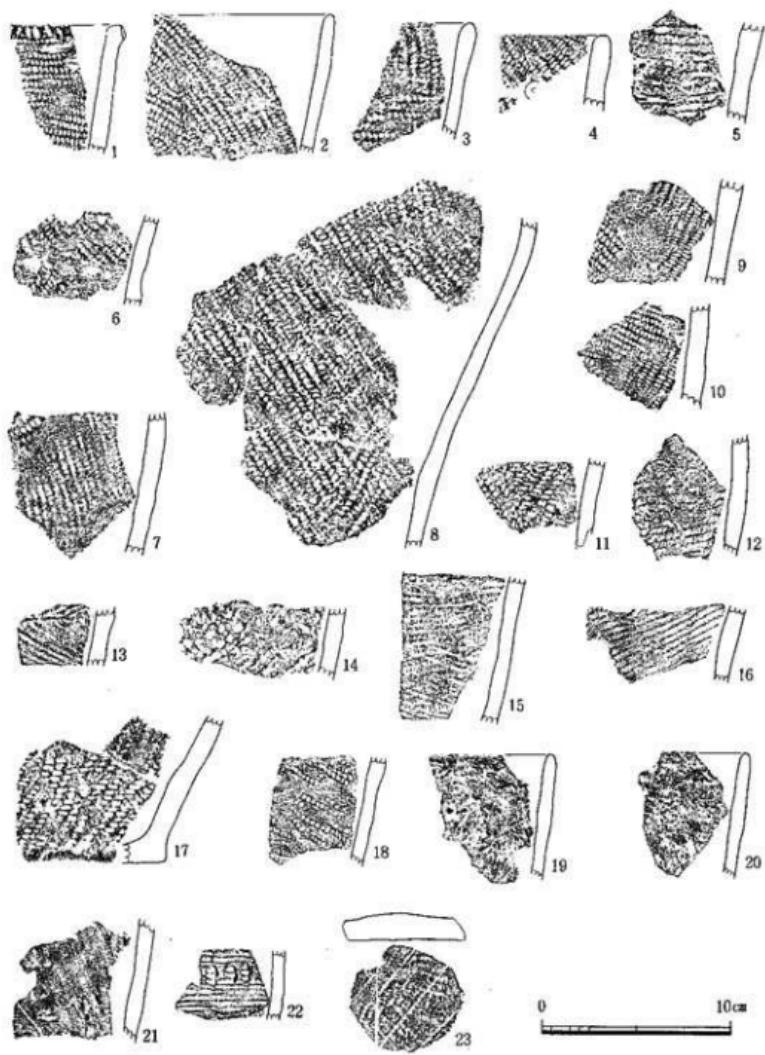
本址は出土土器から見て前期前半の所産と思われる。

### 出土遺物（第32・33図、図版19）

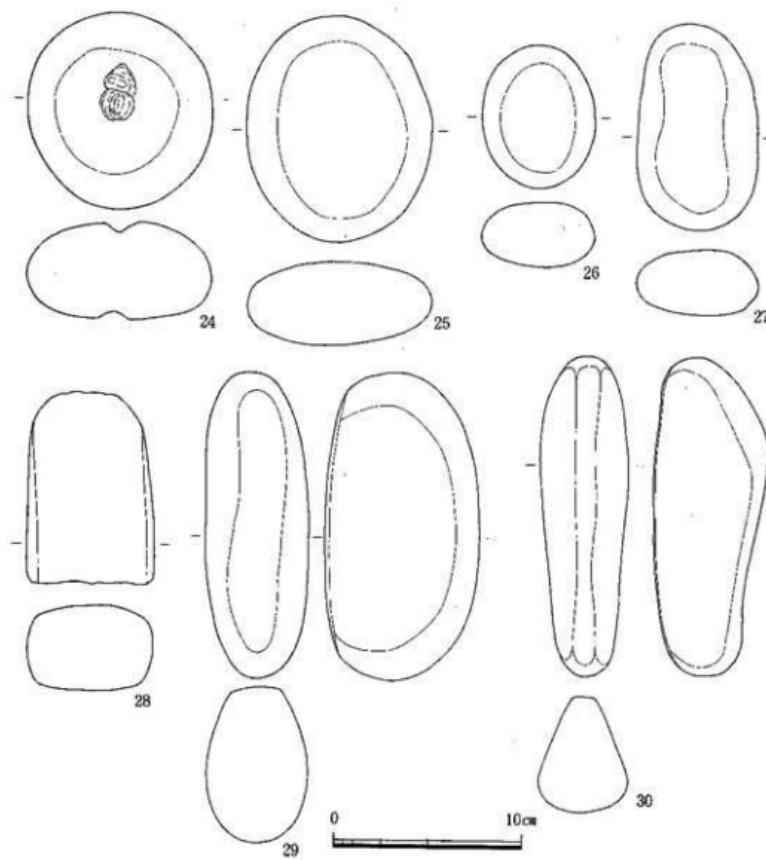
1~18は縄文が施された土器である。いずれも胎土に纖維を含む。1は口縁部に刻み目が施されている。4は補修孔が開けられている。15・16無節の縄文が施されている。18は縄文原体の押圧文と思われる。1は黒褐色、2・3・7~14・16・18は赤褐色、4~6は暗赤褐色、15は明褐色、17は橙色を呈する。19~21は無文の土器片で、19・20は直線的に開く口縁である。19・20は黒褐色、21は明赤褐色を呈する。いずれも胎土に多量の纖維を混入する。22は横



第31図 10号住居址 炉址



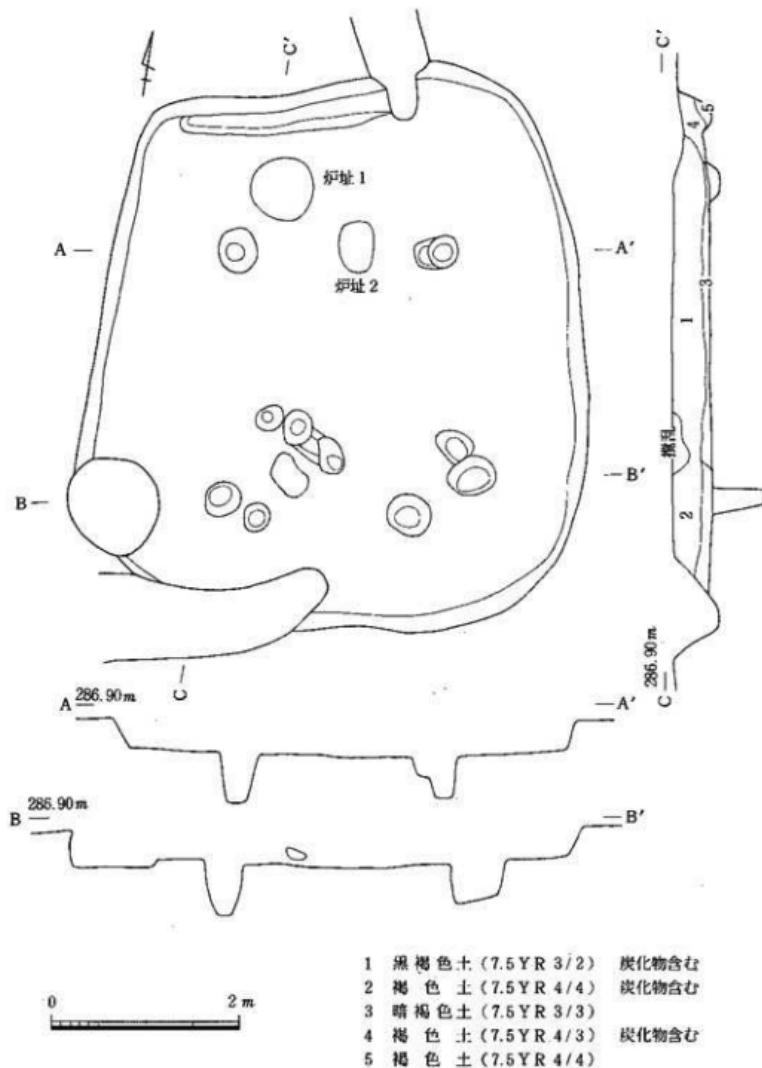
第32圖 10号住居址出土遺物（1）



第33図 10号住居址出土遺物（2）

位の条痕文が施され、同じ工具による連続刺突がなされている。明赤褐色を呈する。胎土の纖維の混入は少ない。23は底部である。木葉痕と縄文の原体と思われる圧痕が認められる。明褐色を呈し、胎土に纖維を混入する。

24～30は磨石である。24～29は安山岩、30は砂岩である。24は表裏面に凹みを持つ。28は側面も面取りされている。29・30は稜磨石である。



第34図 11号住居址

### 11号住居址（第34・35図、図版6）

調査区域南端の平坦面にあたるE-3・4グリッドに位置する。13号方形周溝墓に切られる。平面形は丸みを持った台形で、北壁付近で東西4.0m、南壁付近で東西5.2m、南北は5.8mを測る。深さは30～40cmである。

ピットは10口検出された。いずれも直径50cm以下の中形のもので、深さは17～56cmである。北壁に沿って周溝状の落ち込みが検出された。深さは10cmである。

床面中央よりやや南で大形の石が検出された。45×28cmで厚さは18cmである。平らな面を斜め上に向けていた。顯著な使用痕は認められなかった。

覆土は黒褐色土を主体とし、壁際と床面近くに褐色土、暗褐色土の堆積が認められた。

炉址と思われる焼上が2ヶ所検出された。いずれも地床かで、床面の北寄りに位置する。炉址1は65×72cmの円形で深さは14cm、炉址2は60×46cmの梢円形で深さは9cmである。いずれも検出された焼上は少量である。

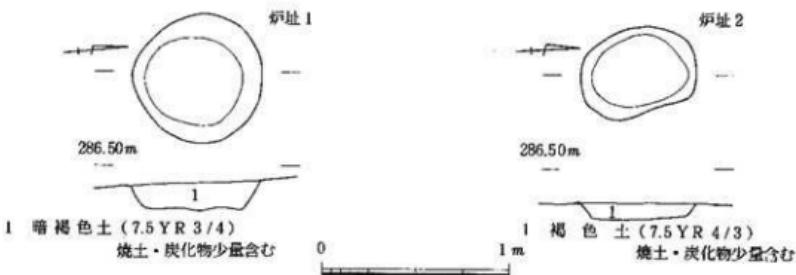
遺物の出土状態は散漫であったが、磨石の出土が多い。

本址は出土遺物から見て前期前半の所産と思われる。

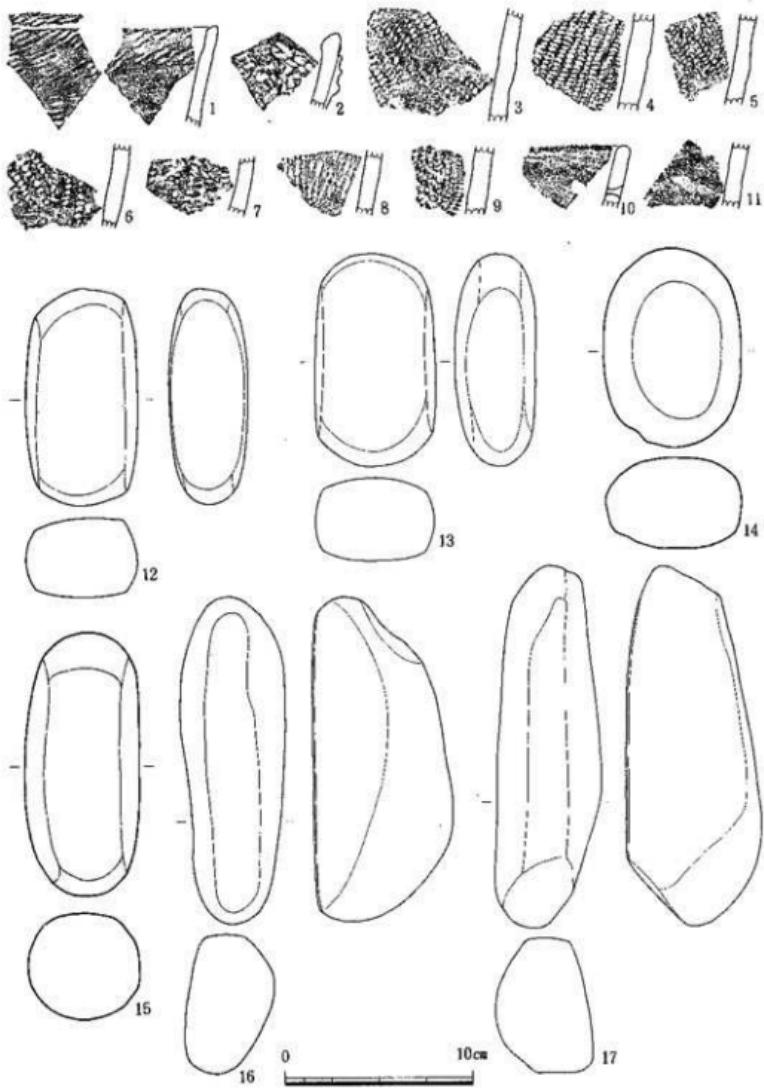
### 出土遺物（第36図、図版19）

1～9は縄文が施された土器である。1は無節と思われる縄文が口縁部表裏面、口唇部に施されている。2は波状の口縁部である。波頂部から下に粘土紐が貼り付けられている。器面全体に粗い縄文かと思われる施文がなされている。いずれも胎土に纖維を含む。10・11は無文の土器片である。10には補修孔が開けられている。いずれも胎土に纖維を含む。1・8は黒褐色、2は暗赤褐色、3は橙色、4・5は暗褐色、6・7・9～11は赤褐色を呈する。

12～17は磨石で、いずれも安山岩製である。12・13は側面も面取りされている。16・17は稜磨石である。



第35図 11号住居址 炉址



第36図 11号住居址出土遺物

## 第2節 穫穴状遺構 (第37図、図版7)

北西向きの緩斜面にあたるD-6グリッドに位置する。2号住居址の柱穴、2号方形周溝墓に切られる。

平面形は $3.70 \times 3.45\text{m}$ の円形を呈する。東端に接してさらに深い円形の掘り込み3段があり、テラスを形成している。遺構検出面からのテラスの深さは上段が28cm、中段が90cm、下段が118cmで、西端の掘り込みの底面までは122cmである。上段のテラスの南側に穿たれたピットは本址に伴うかどうか不明である。当初は覆土の状態から倒木痕かとも考えたが、壁面、テラス面に大きな起伏はなく、ほぼ水平であったことから遺構と判断した。

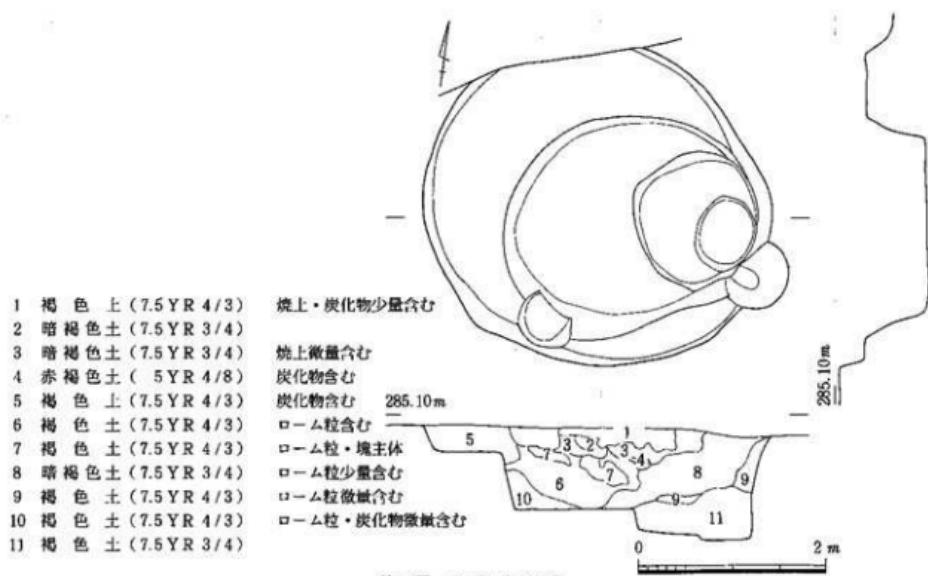
覆土は暗褐色土と褐色土が不安定な堆積をしている。遺構中央部の上層に焼土層、焼土を含む土層が認められた。

覆土の全体から二十数点の諸磯式土器が散漫に出土したが、すべて小片であった。

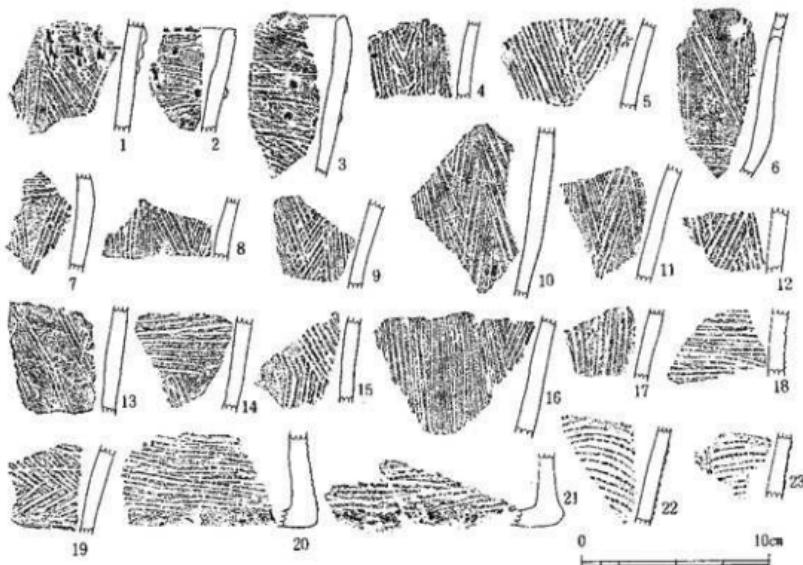
本址は出土土器から見て前期未葉の所産と思われる。

### 出土遺物 (第38図、図版20)

1～21は半裁竹管による平行沈線文が施された土器である。1・2は縦長の棒状の貼り付



第37図 穫穴状遺構



第38図 壁穴状遺構出土遺物

けに半載竹管による押し引きが施されている。2は口縁部にも半載竹管による押し引きが施されている。2～5はボタン状の貼り付け文が施されている。6は補修孔が開いている。20・21は底部片である。横位の平行沈線文が施された胴部が内傾気味に立ち上がる。22・23は細い粘土紐の貼り付けの上に半載竹管による押し引きが施されている。1・4・8～10・16は明赤褐色、2・3・5～7・11・12・17・18は暗赤褐色、13・14・19～21は赤褐色、15は明褐色、22・23は橙色を呈する。3・5・6・17は胎土に少量の金雲母を含む。

### 第3節 土坑

#### 2・3号土坑（第39図、図版7）

西向きの緩斜面にあたるB-6グリッドに位置する。4号方形周溝墓に切られる。

2号土坑は不整形を呈し、規模は80×65cm程度と思われる。深さは10cmである。3号土坑は円形を呈し、開口部の直径は60cm前後と推定される。フラスコ状の土坑で、底面は85×75cmの円形、深さは71cmである。両者は重複した状態で検出されたが、同一の遺構である可能性もある。

2号土坑からは数点の礫が出土している。その内2点は大形のもので、一方は板状に割れていた。他に6点の土器が出土したが、いずれも小片である。

3号土坑からは石皿と二十数点の土器片が出土している。いずれも坑底から5～25cm浮いた位置で出土した。覆土の中位に焼土、炭化物を含む上層が認められた。

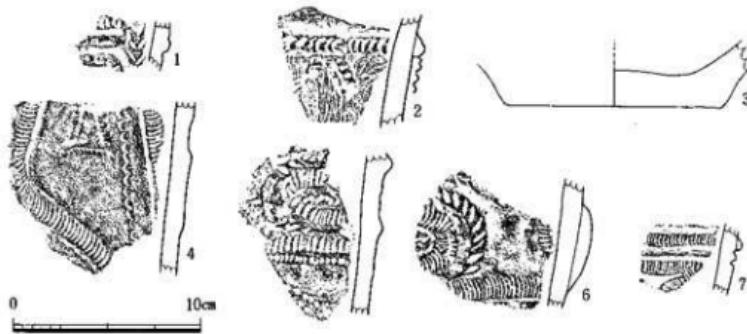
本址は出土土器から見て中期前半の所産と思われる。

#### 出土遺物（第40～42図、図版20）

1～3は2号土坑から出土した土器である。1は縦位の隆帶上に矢羽根状の刻み目が施されている。2は爪形文が施された隆帶の下にヘラ状の工具による多数の切り込みがなされている。3は底部片で、底径は11cmと推定される。残存高は3.7cmである。1・2は明赤褐色、3は橙色を呈する。

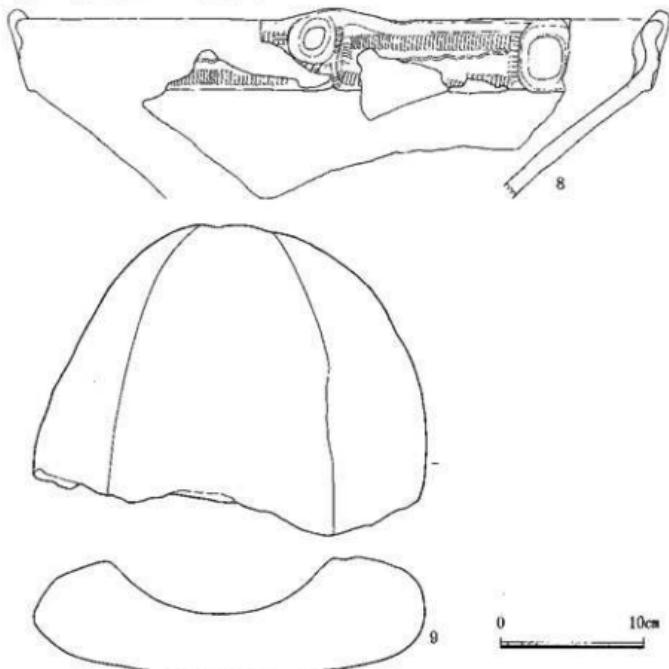


第39図 2・3号土坑



第40図 2・3号土坑出土遺物

4～9は3号土坑から出土したものである。4～6はキャタピラ文と三角押文が施されている。4は半円形の刺突が並ぶ。6は刻み目をもつ隆帯が付けられている。7は幅の狭いキャタピラ文が施され、隆帯上には爪形文が施されている。4・6は明赤褐色、5は赤褐色、7は暗



第41図 3号土坑出土遺物

褐色を呈する。8は浅鉢である。口径は46cmと推定され、残存高は13cmである。口縁部に降帯、キャタピラ文、波状沈線による施文がなされている。赤褐色を呈する。二次焼成を受けたためか口縁部が脆弱である。

9は安山岩製の石皿である。

#### 4号土坑（第42図、図版7）

調査区域南端の平坦面にあたるE-3グリッドに位置する。13号方形周溝墓に切られる。南側を方形周溝墓に削平されているため規模は不明であるが、東西130cmを測り、南北は95cm遺存している。平面形は隅丸長方形と推測される。深さは50cmである。

覆土は粘性の強い暗褐色であった。

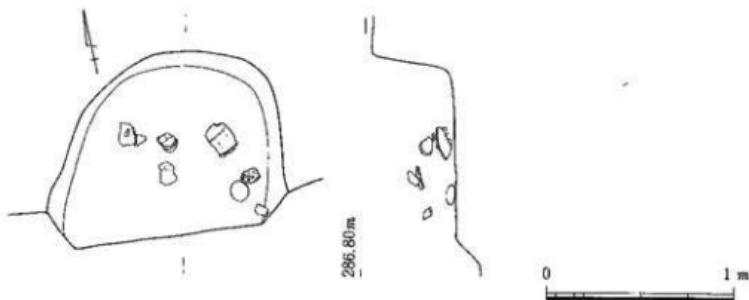
覆土の下層から底面にかけて8点の土器と1点の磨石が出土した。

本址は山土器から見て早期後半の所産と思われる。

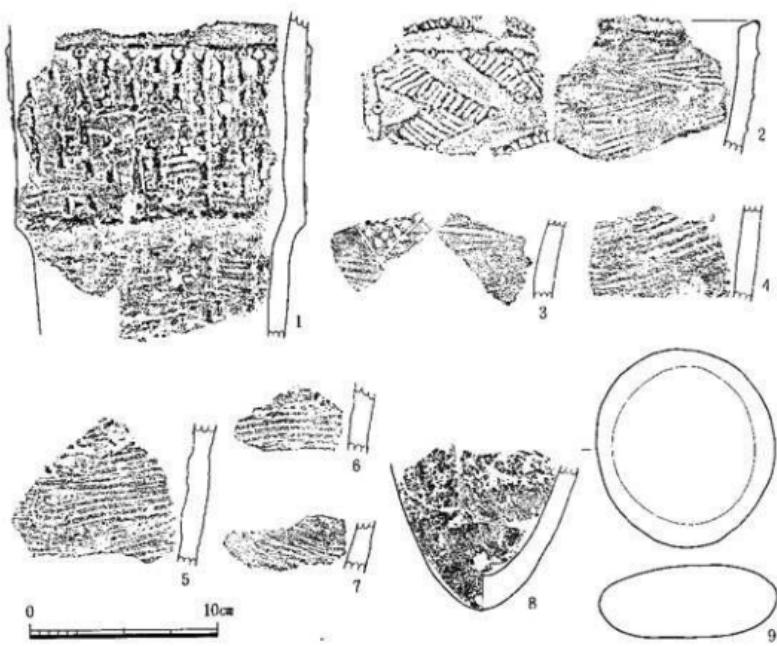
#### 出土遺物（第43図、図版20）

1～8は胎土に纖維を含む土器である。1は段を有する深鉢で、横位の粘土紐の貼り付けの下から縦位の粘土紐が貼り付けられ、縦位の粘土紐に円形の刺突文が施されている。内面に条痕文が施されている。赤褐色を呈し、胎土に金雲母を含む。2は口唇部に刻み目が施され、粘土紐の貼り付けによる区画の内側に押し引きされた短沈線を充填することによって隆起線状の文様を作出している。粘土紐には円形の刺突文が施されている。内面に条痕文が施されている。赤褐色を呈し、胎土に金雲母を含む。3はへら状工具によって切り込まれたような細い沈線による区画の中に刺突文が施されている。内外面に条痕文が施されている。赤褐色を呈し、胎土に金雲母を含む。4～7は条痕文が施された土器である。4は胎土に金雲母を含む。8は尖底の底部である。外面は剥落が著しい。胎土に金雲母を含む。いずれも赤褐色を呈する。

9は安山岩製の磨石である。



第42図 4号土坑



第43図 4号土坑出土遺物

#### 第4節 遺構外出土遺物 (44~49図、図版21~23)

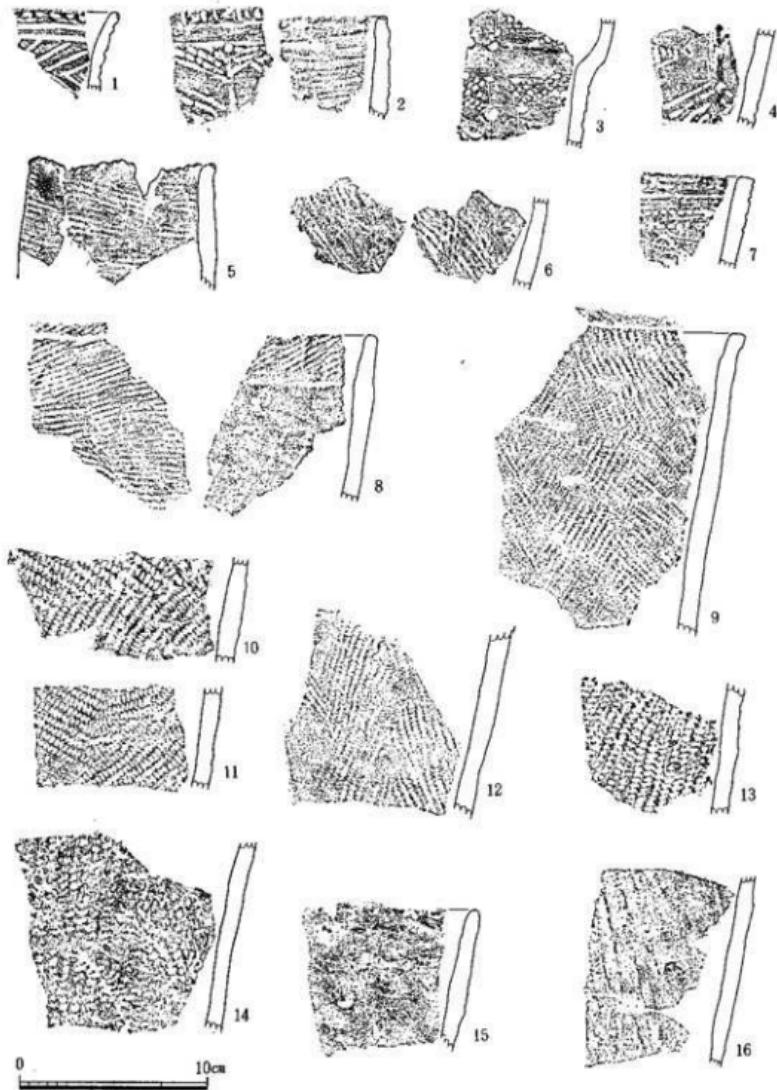
1は早期の沈線文系土器と思われる。横位、斜位の沈線文が施されている。口縁部には刺突文が施されている。黒褐色を呈する。C-5グリッドから出土した。

2~7は早期の条痕文系土器と思われる。いずれも胎上に纖維を含む。2~4は器面に対し斜めに刺突文が施されている。4は押し引きに近い刺突である。5は推定口径10.0cm、残存高は6.5cmである。口縁は波状を呈し、口唇部に刻み目が施されている。7は横位に刺突が並ぶ。2は暗褐色3・5・6は赤褐色、4は明褐色、7は橙色を呈する。2~5はE-4グリッド付近、6はC-5グリッド、7は5号方形周溝臺北溝から出土した。

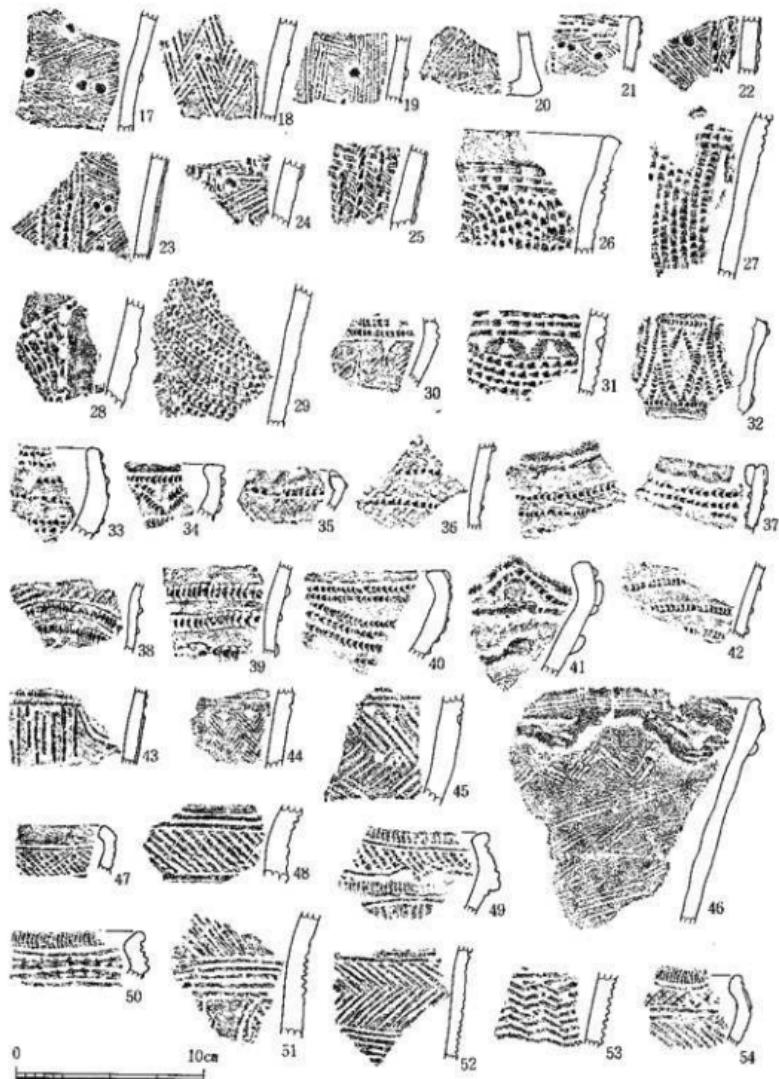
9~16は前期前半の纖維上器と思われる。すべてE-4グリッド周辺で出土したものである。9~15は縄文が施されている。8口縁部内面、口唇部にも縄文が施されている。14は複節の縄文が施されている。16・17は無文の土器である。8・9・14・16は暗褐色、10・12・13は赤褐色、11・15は黒褐色を呈する。

18~55は前期後半から中期初頭の土器と思われる。17~25は半載竹管による平行沈線文が施される土器である。C-4グリッドからの出土が多い。17~23はボタン状の貼り付けがなされている。22~25は棒状の貼り付けに半載竹管による押し引きが施されている。17・20~22・24・25は赤褐色18・19・23は黒褐色を呈する。26~31は半載竹管による押し引き文が施される土器である。26は黒褐色、27は橙色、28・31は赤褐色、29は暗褐色、30は褐色を呈する。32~43は粘土紐の貼り付けの上に半載竹管による押し引き文が施されるものである。32は山形の把手とおもわれる。37・41は波状の口縁と思われる。41は波頂部の直にボタン状の貼り付けがなされている。37は内面も施文されている。43は細い粘土紐の貼り付けもなされている。32・35は黒褐色、33・34・36~39・41・42は赤褐色、40は橙色、43は暗赤褐色を呈する。44は三角形の陰刻と集合沈線文が、45は菱形の陰刻と集合沈線文が施されている。いずれも赤褐色を呈する。46は口縁に波状の隆帯が貼り付けられ、隆帯上にも半載竹管による押し引き文が施されている。暗赤褐色を呈し、胎上に金雲母を多く含む。47~49は斜格子状の沈線文が施されているが、右上から左下へはヘラ状工具で切り込んだ細い沈線である。いずれも赤褐色を呈する。50は結節状の平行沈線文が施されている。54は斜格子状に粘土紐が貼り付けられた土器である。55は胴部のくびれ部に集合沈線文が、その下に縄文が施されている。50~55は赤褐色を呈する。

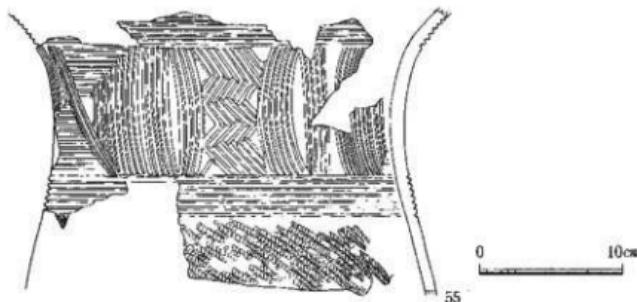
56~63は中期前半から後半の上器と思われる。56は推定口径21cm、残存高11.8cmである。口縁部に縄文が施され、二重の円形の沈線の中央に円形の小突起が付けられている。口縁部直下は横位のキャビラ文が施され、その下に梢円形のキャビラ文に開まれた刻み目をもつ短い隆帯が並ぶ。その隆帯を下から閉むように三角押文が配されている。褐色を呈する。2号方形



第44図 造構外出土遺物



第45図 遺構出土遺物（2）



第46図 遺構外出土遺物（3）

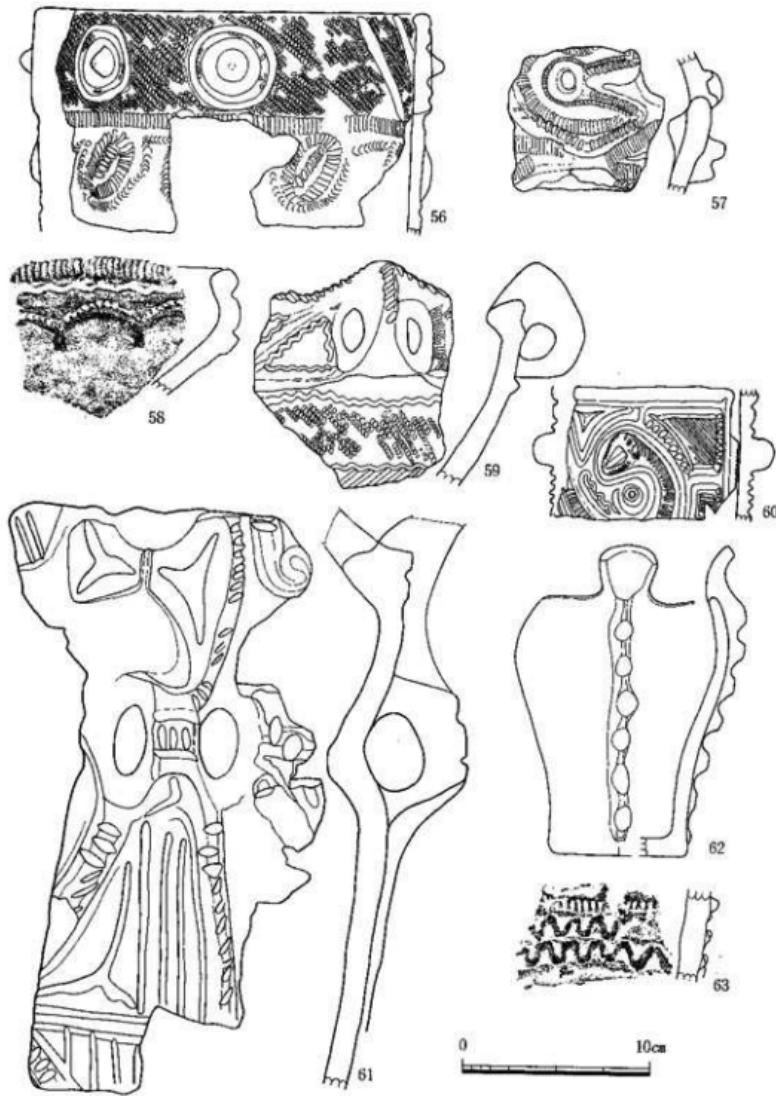
周溝墓南溝から出土した。57は把手部分と思われる。刻み目をもつ隆帯に円形の隆帯が接続している。隆帯の片側に沿って三角押文、キャタピラ文が施されている。赤褐色を呈する。C-6グリッドから山上した。3号方形周溝墓北溝から出土した。58は口縁部に爪形文が施され、その下に波状沈線と弧状の隆帯とそれに沿う三角押文が施されている。赤褐色を呈する。3号方形周溝墓南溝から出土した。59は工具の先端に切り込みを入れたキャタピラ文が施されている。赤褐色を呈する。2号方形周溝墓南溝から出土した。60のJ字状と思われる隆帯は先端で肥大し小突起となる。明赤褐色を呈する。2号方形周溝墓北溝から出土した。61は刻み目をもつ隆帯と沈線文が施される十器である。62は小形の深鉢で、口径 9.4cm、底径 7.2cm、器高は把手を含め16.5cmを測る。把手は1ヶ所付けられ、そこから押捺を施された隆帯が垂下する。赤褐色を呈する。グリッドから出土した。63は刻み目をもつ隆帯をもち、波状の粘土紐の貼り付けがなされた土器である。褐色を呈する。2号方形周溝墓東溝から出土した。

64~67は中期の土器の把手と思われる。64・65は蛇体を表現したものと思われる。67はみずく把手である。64・66は赤褐色、65は褐色、67は橙色を呈する。64・67はC-6グリッドから、65は弥生時代の3号住居址から、66は3号方形周溝墓の南溝から山上した。

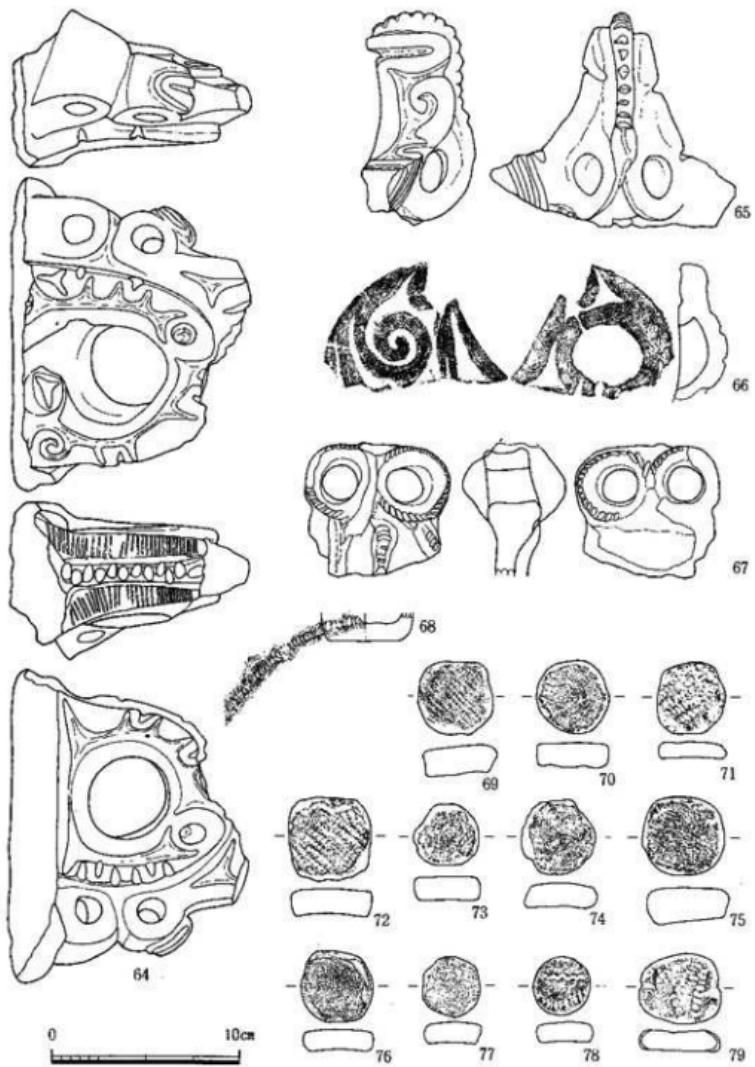
68はミニチュア十器である。底径は4.2cm、残存高は1.5cmである。横位の三角押文が施されている。橙色を呈する。3号方形周溝墓の北溝から山上した。

69~78は十製円板である。直径は3.0~4.4cmである。中期の住居址が集中するC・D-6グリッドからの出土が多い。79は上器片錐である。3号方形周溝墓北溝から山上した。

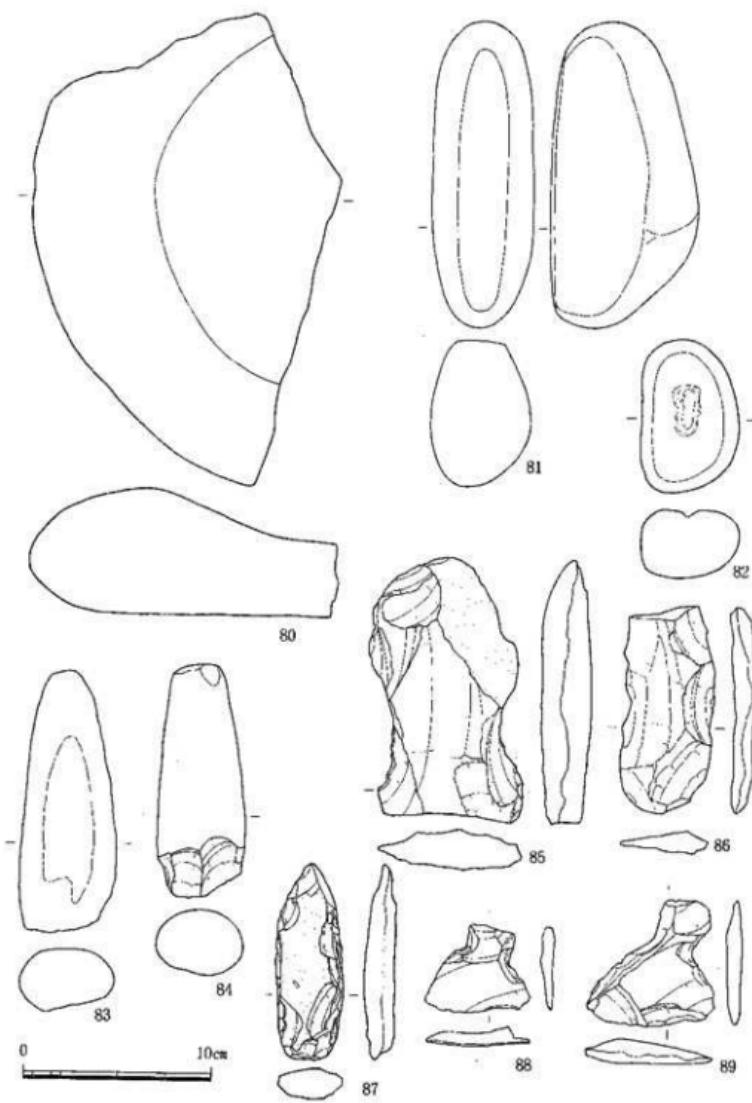
80は安山岩製の石皿である。E-1グリッドから山上した。81は安山岩製の稜磨石である。



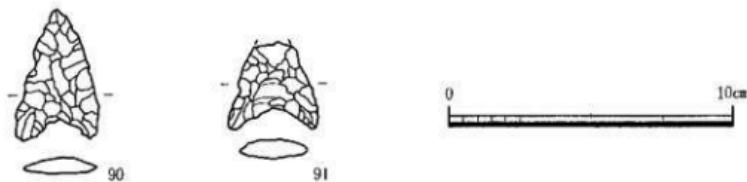
第47図 遺構外出土遺物（4）



第48図 遺構出土遺物（5）



第49図 遺構外出土遺物（6）



第50図 遺構外出土遺物

E-4 グリッドから出土した。稜磨石は遺構外から3点出土しているが、いずれも前期前半の住居址が集中するE-4 グリッド周辺から出土している。82は凹みを片面にもつ磨石で、安山岩製である。D-6 グリッドから出土した。83・84は磨製石斧である。いずれも砂岩製である。いずれもB-6 グリッドから出土した。85~87は打製石斧である。いずれも粘板岩である。85は3号方形周溝墓南溝から、86はC-5 グリッドから、87はC-6 グリッドから出土した。89はスクレイバーである。88は粘板岩製、89は砂岩製である。88は12号方形周溝墓東溝から、89はE-5 グリッドから出土した。90・91は石鎌である。いずれも黒曜石製である。90はC-5 グリッドから、91はD-6 グリッドから出土した。

## 第4章 弥生時代の遺構と遺物

### 第1節 竪穴住居址

#### 1号住居址（第51図、図版8）

北向きの緩斜面にあたるD-6グリッドに位置し、2号方形周溝墓と重複するが新旧関係は不明である。主軸方位はN-35°-Wである。

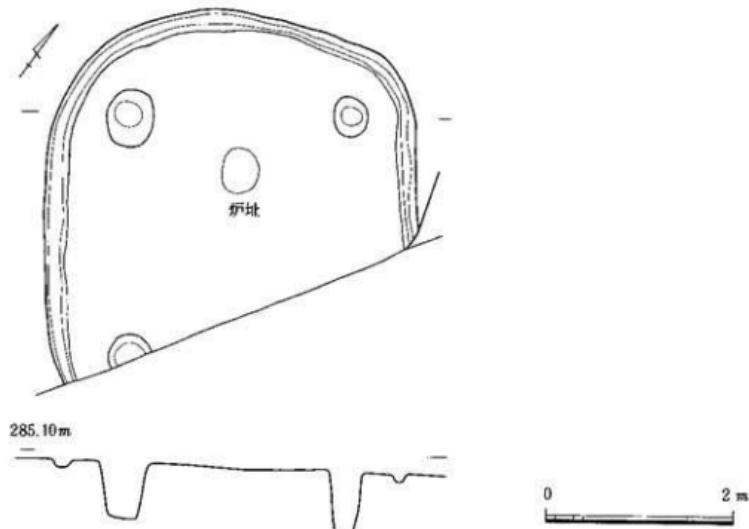
南東部は道路下にあたるため未調査であるが、隅丸長方形を呈すると思われる。短軸は4.00mで、長軸は4.0mまで調査した。上部を大きく削平されているため、壁はほとんど検出できなかった。

柱穴と思われるピットが3口検出された。直径は40~60cmで、深さは62cm前後である。未調査部分に1口遺存していると思われる。

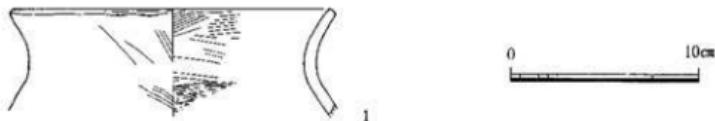
周溝は深さ10cm前後で、調査範囲内では全周する。

床は厚さ10cm程度の、褐色土と暗褐色土が混ざった貼り床で、顯著に硬化していた。

炉址は地火炉で、床面中央より北西寄りで検出された。50×42cmの楕円形で、深さは14cmである。



第51図 1号住居址



第52図 1号住居址出土遺物

弥生土器は3点の破片が出土したにすぎない。

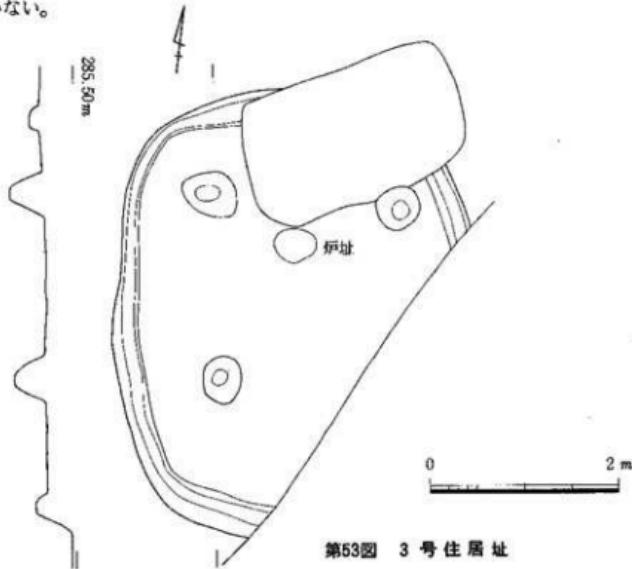
**出土遺物（第52図）**

1は壺形土器の口縁部である。口径は17.4cmと推定され、残存高は5.8cmである。外面と口縁部内面に粗い刷毛目が、胴部内面には細かい刷毛目調整がなされている。口縁部外面の刷毛目は疎らである。褐色を呈する。

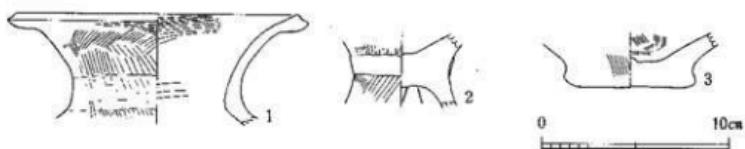
**3号堅穴住居址（第53図、図版8）**

北向きの緩斜面にあたるD-5グリッドに位置し、1号土坑に切られる。主軸方位はN-13°-Wである。

東南部は道路下にあたるため未調査であるが、隅丸長方形を呈すると思われる。端軸は3.90mで、長軸は4.7m前後と思われる。深さは斜面上位にあたる南壁で25cmである。北半部は壁が遺存していない。



第53図 3号住居址



第54図 3号住居址出土遺物

柱穴と思われるビットが3口検出された。直径は40~60cmで、深さは34~38cmである。未調査部分に1口遺存していると思われる。

周溝は深さ12cm前後で、調査範囲内では全周している。

覆土はわずかしか残っていないが、黒褐色土を土体としていた。

炉址は地床炉で、床面中央より北寄りで検出された。50×44cmの円形を呈し、深さは17cmである。

床は厚さ10cm程度の、褐色土と暗褐色土の混ざった貼り床で、顯著に硬化していた。

弥生土器は十数点の破片が出土したにすぎない。

#### 出土遺物（第54図）

1は壺形土器の口縁部で、口径は16.0cmと推定され、残存高は5.9cmである。内外面とも粗い刷毛目調整が施されている。頸部は横位のナデにより刷毛目が消えかかっている。褐色を呈する。2は台付壺と思われる。残存高は4.0cmである。外面に粗い刷毛目調整が施されている。胴部と台部の境のくびれ部分に刷毛目の上から幅の広い粘土糸が貼り付けられている。赤褐色を呈する。3は底部である。底径は7.0cmで、残存高は2.9cmである。内外面に刷毛目調整が施されている。褐色を呈する。

#### 8号住居址（第55図、図版8）

北西向きの緩斜面にあたるC-5グリッドに位置する。主軸方位はN-28°-Wである。

4.60×3.60mの隅丸長方形を呈する。深さは斜面上位にあたる南壁で30cmである。

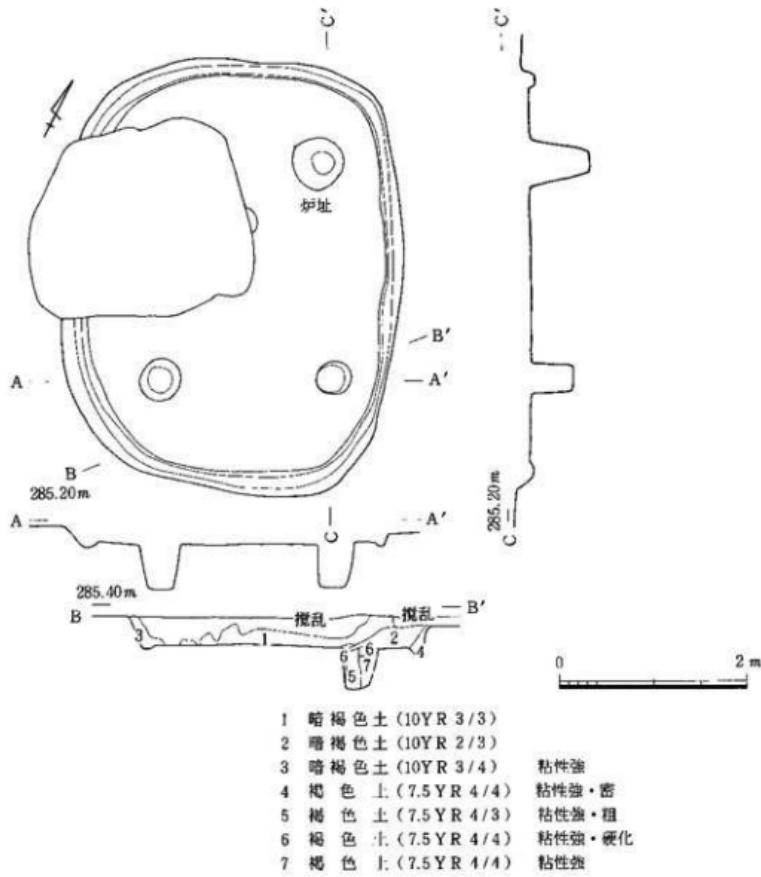
柱穴と思われるビットが3口検出された。直径は35~56cmで、深さは南側の2口が48cm前後、北側のものが62cmである。北西部の大きく搅乱を受けた部分に本来は1口存在したと思われる。

周溝は深さ6cm前後で、搅乱部分を除いて全周する。

炉址は地床炉で、床面中央より北西寄りで検出されたが、一部を除いて搅乱によって失われている。

床は厚さ10cm程度の、褐色土と暗褐色土の混ざった貼り床で、顯著に硬化していた。

弥生土器は3点の小片が出土したにすぎない。



第55図 8号住居址

## 第2節 方形周溝墓

### 1号方形周溝墓（第56図、図版9）

北向きの緩斜面にあたるD-6・7グリッドに位置する。南北軸はN-2°-Wを示す。規模は南北11.5m、東西9.1mを測り、南北に長い。溝の幅はコーナー付近を除き100～130cmである。深さは70cm前後であるが、東北コーナーは30cmと浅い。

北西コーナーから東南コーナーまでは道路下にあたり、未調査であるが、調査範囲内ではブリッジは検出されていない。

覆土は下層に褐色土が、中層に暗褐色土が、上層に褐色土が堆積していた。暗褐色土層が厚い。自然堆積と思われる。

弥生土器は数点の破片が出土したにすぎない。

### 2号方形周溝墓（第57・58図、図版9）

北向きの緩斜面にあたるC・D-6グリッドに位置し、縄文時代の竪穴状造構、弥生時代の1号住居址と重複する。南北軸はN-9°-Wを示す。

規模は東西14.5m、南北12.2mを測り、東西に長い。溝の幅はコーナー付近を除き120～180cmで、深さは南溝が110cm前後と深いが、他は30～55cmである。南溝以外は底面の幅が広い。南西コーナーがブリッジになるが、東南コーナーについては道路下にあたり不明である。

覆土は南溝が黒褐色土を主体としていたが、他は褐色土が主体で、一部に黒褐色土を含む土層が認められた。

弥生土器は北溝の中央より1.5m程東寄りの底面で、ほぼ完形の壺形土器が横倒しの状態で出土した。他に約50点の小片が出土している。

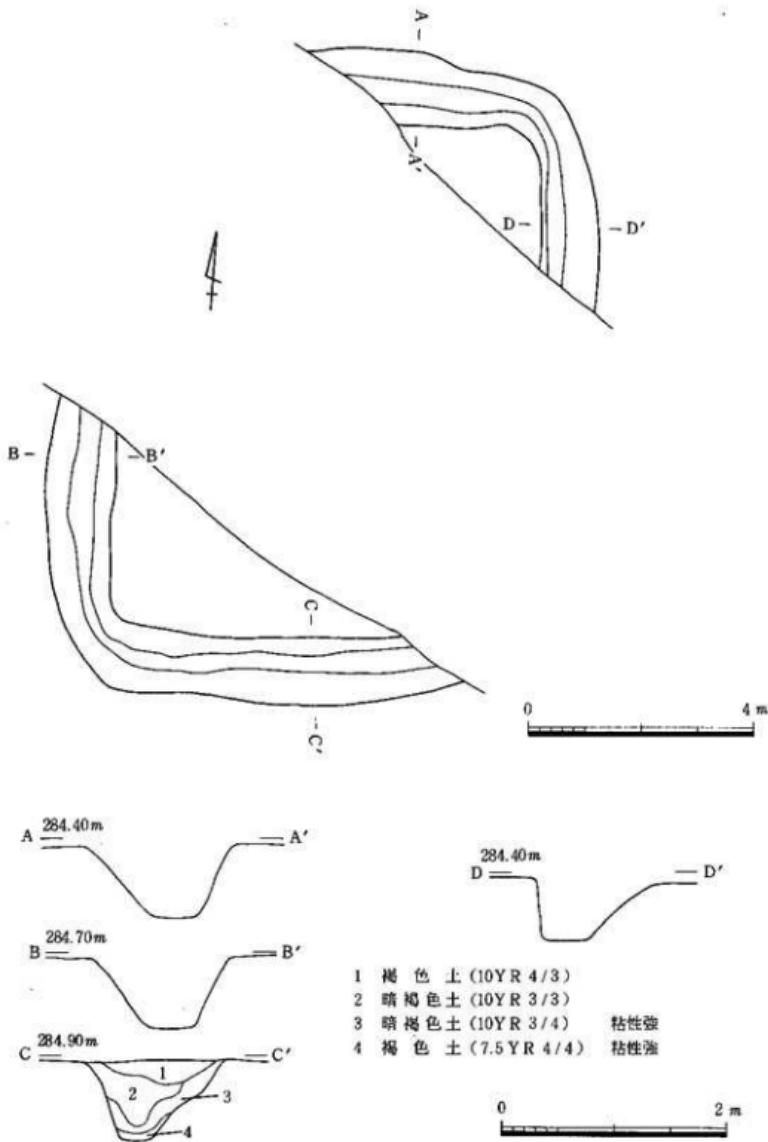
### 出土遺物（第59図、図版24）

1は口径11.5cm、頸部径9.6cm、底径8.0cm、胴部最大径は胴部のほぼ中位にあり、23.8cmである。器高は30.8cmを測る。内外面とも刷毛目調整がなされ、その上から頸部には縦位の、胴下半部には横位のヘラ磨きが施されている。褐色を呈する。

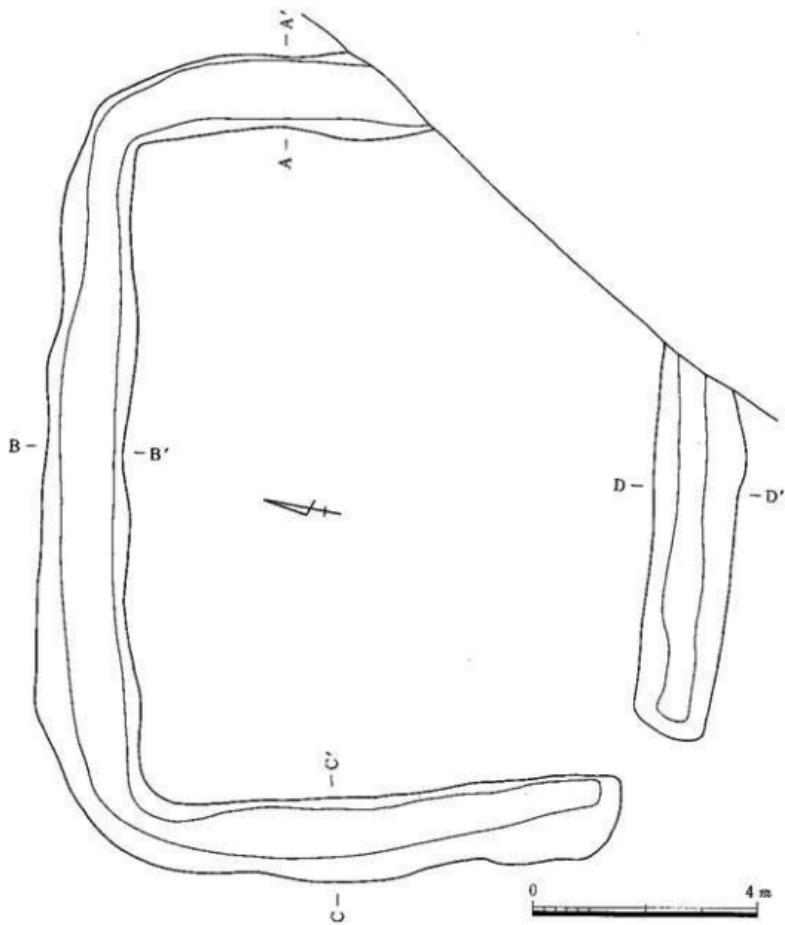
### 3号方形周溝墓（第60図、図版10）

西向きの緩斜面にあたるC-6グリッドに位置し、10号方形周溝墓、縄文時代の6・7号住居址と重複する。南北軸はN-8°-Eを示す。

規模は東西15.2m、南北12.3mを測り、東西に長い。溝の幅は南溝が1m前後と狭く、他は120～220mである。深さは60～80cmである。



第56図 1号方形周溝基



第57図 2号方形周溝墓（1）

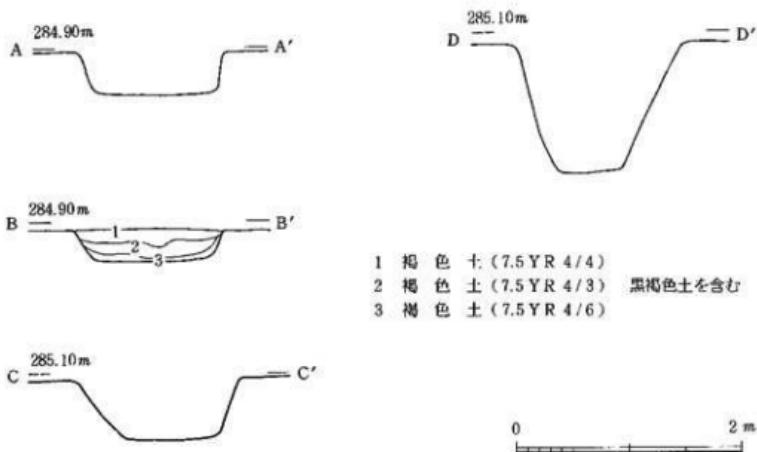
東南コーナーと南西コーナーがブリッジになっている。

覆土は暗褐色土を主体としており、底面と上層に褐色土の堆積が認められた。自然堆積と思われる。

弥生土器は覆土中から數十点が出土したが、大半が小片であった。

出土遺物（第61図）

1は南溝の覆土中から出土した壺形土器の口縁部である。口径13.5cm、頸部径 8.6cm、残存



第58図 2号方形周溝墓（2）

高は8.8cmを測る。内外面とも浅い刷毛目調整が施されている。頸部外面には刷毛目の上から縦位のヘラ磨きが施されている。赤褐色を呈する。2は南溝の覆上中から出土した壺形土器の頸部片である。刷毛状工具による刺突が横位に一列巡り、その下に同じ工具によると思われる刺突によって矢羽根状の文様が描かれている。外面は橙色、内面は青灰色を呈する。胎土に白色の砂粒を多く含む。

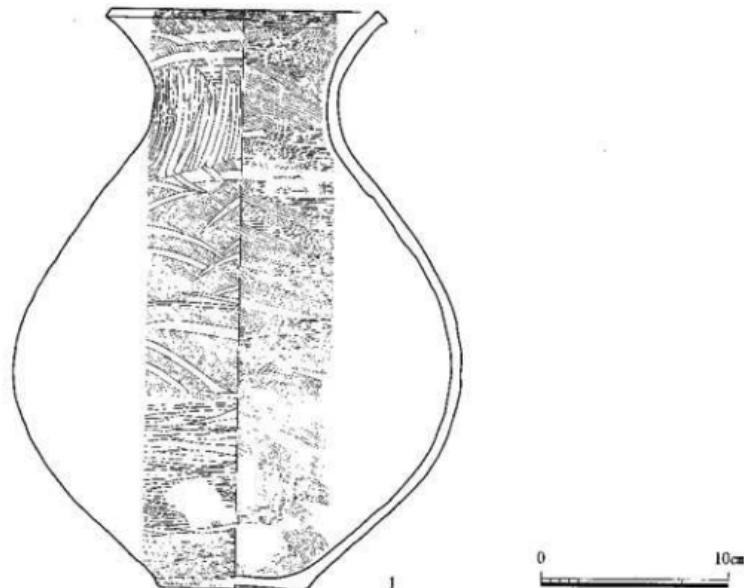
#### 4・5号方形周溝墓（第62・63図、図版10）

西向きの緩斜面にあたるB-6グリッドに位置し、縄文時代の2・3号土坑を切る。本遺跡で調査された方形周溝墓の西端にあたる。南北軸は4号方形周溝墓がN-10°-W、5号方形周溝墓がN-13°-Wを示す。

4号方形周溝墓の北辺に「コ」の字状に接続するものを5号方形周溝墓とした。

4号方形周溝墓は南北11.7m、東西11.0mを測り、やや南北に長い。溝の幅は北溝が1.60mとやや広く、他は90~120cmである。コーナーは狭い。深さは北溝が90cmと深く、他は52~60cmである。東南コーナーは22cm、南西コーナーは19cmと浅い。

5号方形周溝墓は東西11.5mを測り、4号方形周溝墓よりやや大きい。南北は4号方形周溝墓の南溝から測ると16.8m、北溝の南側から測ると6.7mである。溝の幅は北溝が1.25m、西溝が最大で2.00m、東溝は1.8m前後である。深さは北溝が83cm前後、西溝が90cm前後、東溝が95cm前後である。東溝と西溝は接続する4号方形周溝墓の東溝、西溝より広く、深い。



第59図 2号方形周溝墓出土遺物

覆土は両址とも暗褐色土を主体としたもので、自然堆積と思われるが、4号方形周溝墓の北溝では上部に厚い褐色土の堆積が認められた。このことから、この溝は人為的に埋められた可能性もある。両址の西溝が接続する部分の七層断面を見ると、4号方形周溝墓の覆土を切って5号方形周溝墓が築かれたことも考えられる。

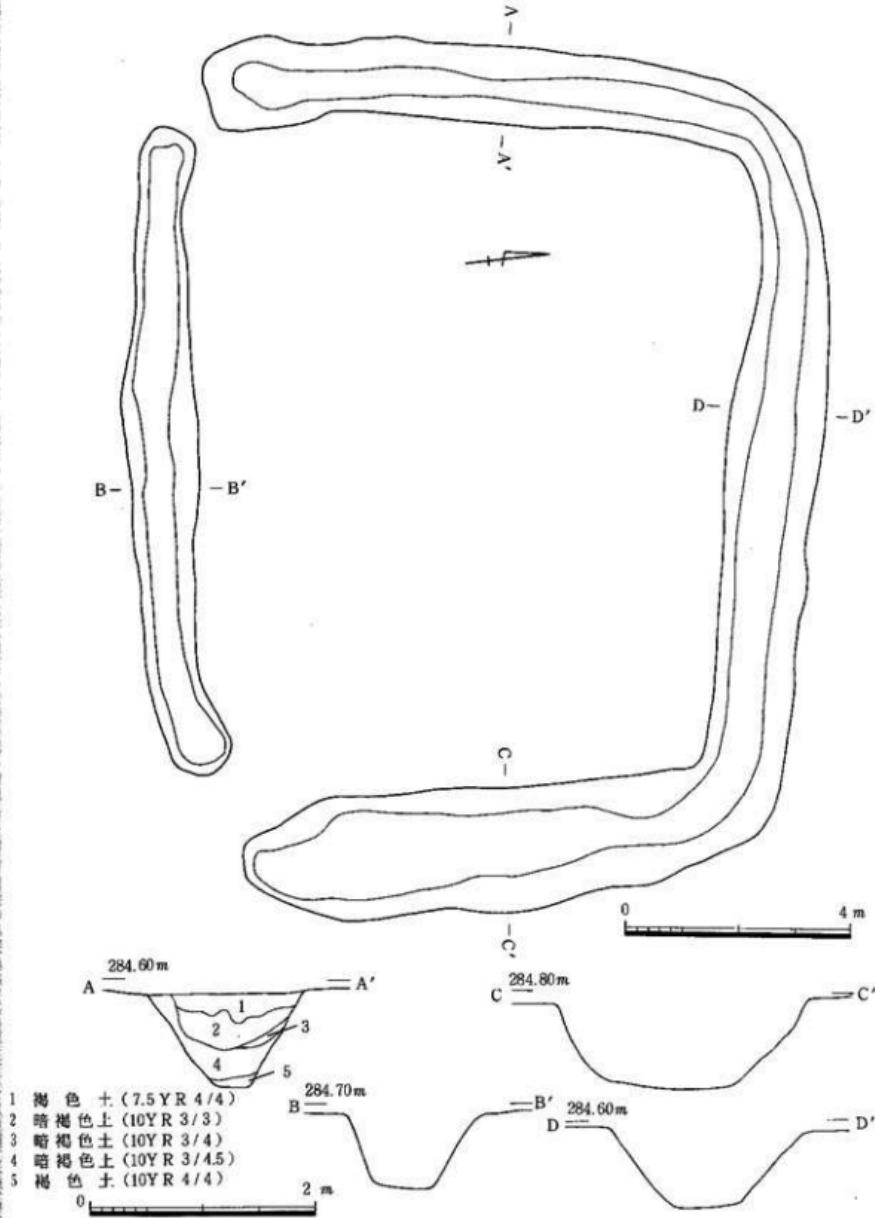
遺物は5号方形周溝墓西溝の南端、4号方形周溝墓と接続する部分で大形の壺形土器が出土した。

#### 出土遺物（第64図）

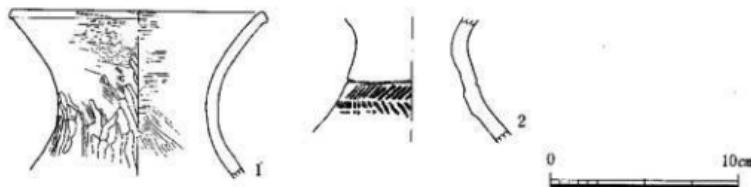
1と2は5号方形周溝墓西溝の南端から出土したもので、同一個体である。非常に脆く、取り上げる際に胴部が割れてしまい、接合できなかった。そのため上下別に作図した。口縁上部を欠く。頸部径17.5cm、底径は15.8cm、胴部最大径は胴部中位にあり、48.0cmである。残存高は61cmと推定される。内外面とも刷毛目調整がなされているが、頸部と胴部下半にヘラ磨きが施されている。底部に木葉痕が認められる。橙色を呈する。

#### 6号方形周溝墓（第65図、図版11）

西向きの緩斜面にあたるC-4・5グリッドに位置する。南北軸はN-7°-Wを示す。東半分は道路下にあたるため未調査であるが、南北 9.0mを測り、東西は 5.8mまで調査した。溝の幅は65～130cmで、深さは50cm前後である。調査部分の規模から推して、本址は本遺跡の方



第60図 3号方形周溝墓



第61図 3号方形周溝墓出土遺物

形周溝墓の中で最も小形のものに属すると思われる。

南西コーナーにブリッジが検出されたが道路下にあたる東北コーナー、東南コーナーについては不明である。

覆土は暗褐色土を主体としていたが、壁際から底面にかけて褐色土の堆積が認められた。自然堆積と思われる。

弥生土器は数点の小片が出土したにすぎない。

#### 7号方形周溝墓（第66図、図版11）

北西向きの緩斜面にあたるC-5グリッドに位置する。北西コーナー付近のみが遺存している。南北軸はN-24°-Wを示す。

北溝は長さ3.6m、西溝は長さ4.9mを調査した。溝の幅は北溝が180cm、西溝が80cmで、深さは30cm前後である。

覆土は暗褐色土を主体としていたが、壁際から底面にかけて褐色土の堆積が認められた。自然堆積と思われる。

弥生土器は数点の小片が出土したにすぎない。

#### 8号方形周溝墓（第67図、図版11）

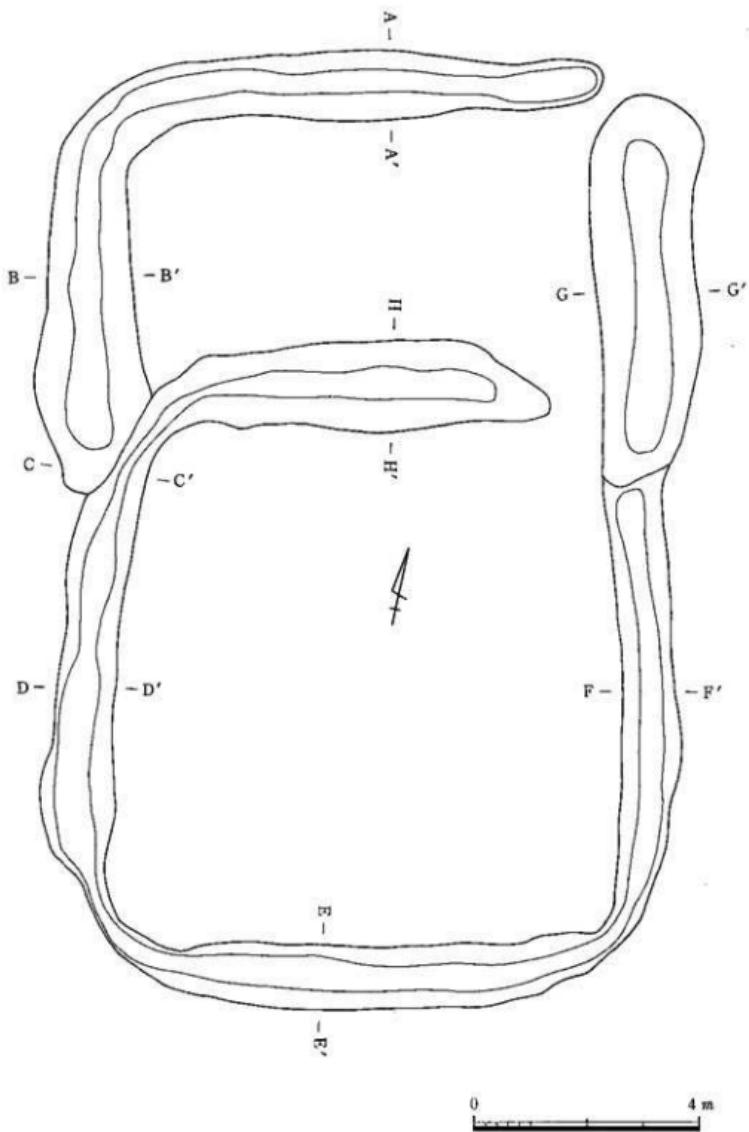
西向きの斜面にあたるC-4グリッドに位置する。東溝の一部は道路下に、南溝は調査区域外にあたるために未調査である。南北軸はN-2°-Eを示す。

正確な規模は不明であるが、東西は13.2m前後と思われる。南北は13.0mまで調査した。溝の幅は120~180cmで、深さは70~90cmである。

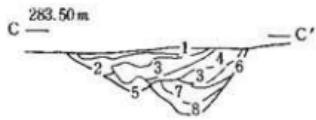
東溝が南端で途切れるため、南西コーナーがブリッジになるとと思われるが、道路下にあたる。東南コーナーについては不明である。

覆土は黒褐色土を主体としていたが、壁際と底面付近に褐色土層が認められた。自然堆積と思われる。

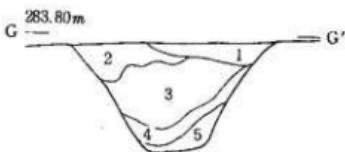
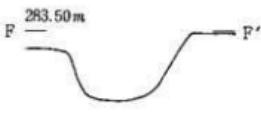
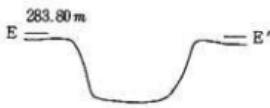
弥生土器は数点の破片が出土したにすぎない。



第62図 4・5号方形周溝墓 (1)



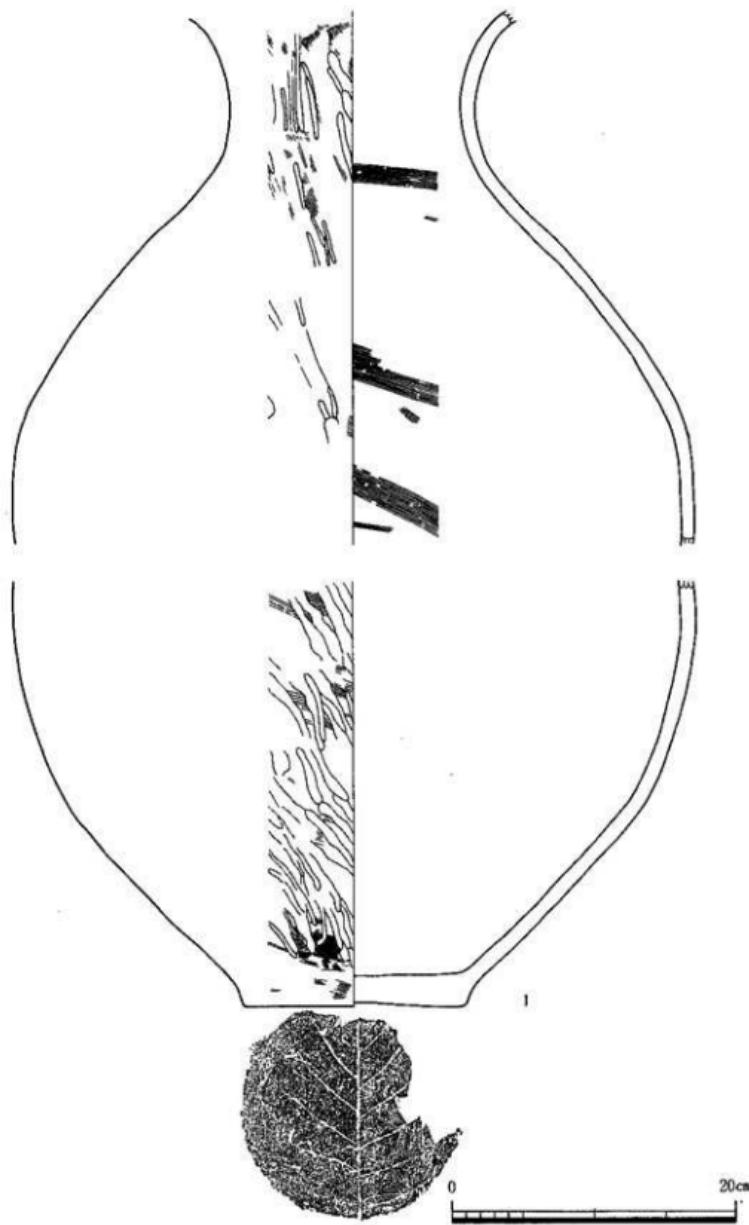
- |                    |          |
|--------------------|----------|
| 1 暗褐色土 (7.5YR 3/3) | 粘性強      |
| 2 暗褐色土 (7.5YR 3/3) | 褐色土多く含む  |
| 3 褐色土 (7.5YR 3/3)  |          |
| 4 褐色土 (7.5YR 4/4)  | ブロック状土主体 |
| 5 褐色土 (7.5YR 4/4)  |          |
| 6 褐色土 (7.5YR 4/3)  | やや粗      |
| 7 暗褐色土 (7.5YR 3/3) | 褐色土含む    |
| 8 褐色土 (7.5YR 4/4)  | 暗褐色土含む   |



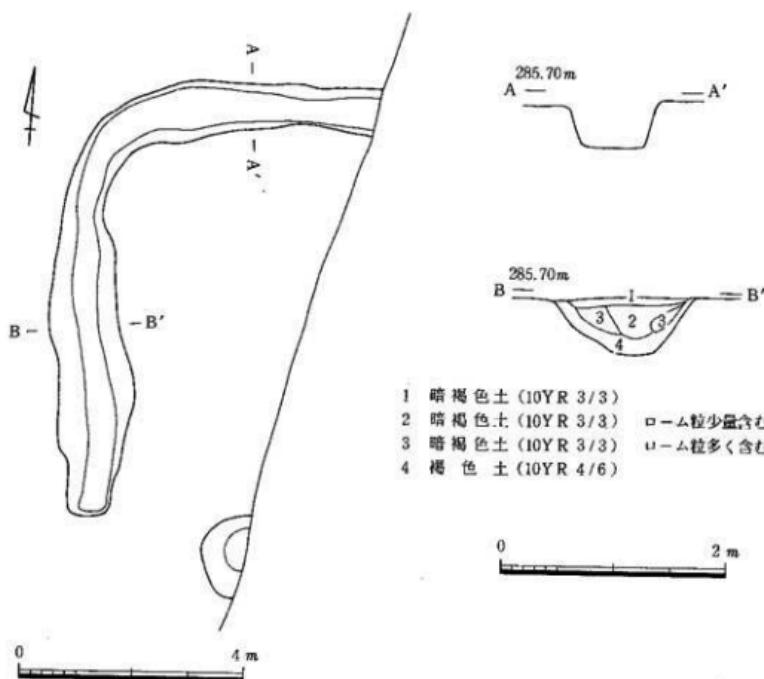
- |                    |              |
|--------------------|--------------|
| 1 褐色土 (7.5YR 4/4)  | ブロック状ローム多く含む |
| 2 黒褐色土 (7.5YR 3/2) |              |
| 3 褐色土 (7.5YR 4/4)  | 暗褐色土層状混入     |
| 4 暗褐色土 (7.5YR 3/3) |              |
| 5 褐色土 (10YR 4/3)   |              |
| 6 褐色土 (10YR 4/6)   | ブロック状ローム主体   |



第63図 4・5号方形周溝墓 (2)



第64図 5号方形周溝墓出土遺物



第65図 6号方形周溝墓

#### 9号方形周溝墓（第68図、図版12）

北東向きの緩斜面にあたるE・F-3グリッドに位置し、縄文時代の10号住居址を切る。南北軸はN-20°-Eを示す。

南半分が調査区域外にあたるが、東西は10.1mを測り、南北は6.0mまで調査した。

溝の幅は100~125cmで、深さは22~34cmと浅い。

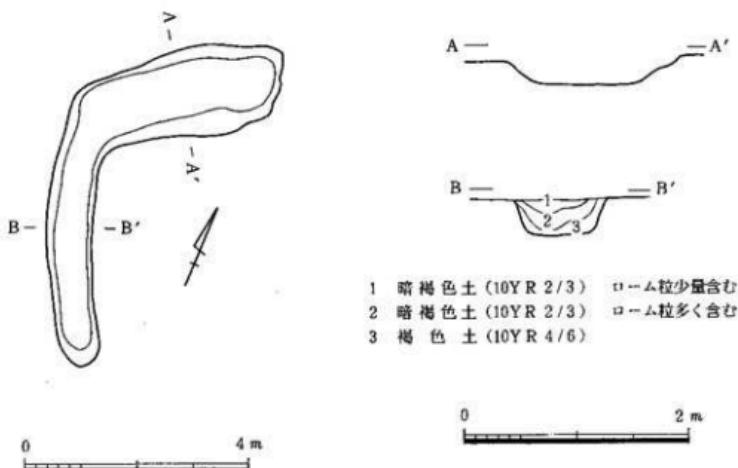
北西コーナーにブリッジが検出されたが、調査区域外の東南コーナー、南西コーナーについては不明である。

覆土は暗褐色土を主体としていたが、底面付近の一部に褐色土層が認められた。自然堆積と思われる。

弥生土器は数点の小片が出土したにすぎない。

#### 10号方形周溝墓（第69図、図版12）

西向きの緩斜面にあたるB・C-6グリッドに位置する。3号方形周溝墓、縄文時代の5・



第66図 7号方形周溝墓

-6号住居址と重複する。南北軸は真北方向と一致する。

遺存状態が悪いが南北9.1mを測る。東西は東溝がほとんど遺存していないため不明であるが9m前後と思われる。溝の幅は80~116cmで、深さは北溝が40cm前後、西溝が30cm前後で、南溝は25cm前後と浅い。北溝は直線的ではなく、外側に股らむ。本址は本遺跡の方形周溝墓の中でも最も小形のものに属する。

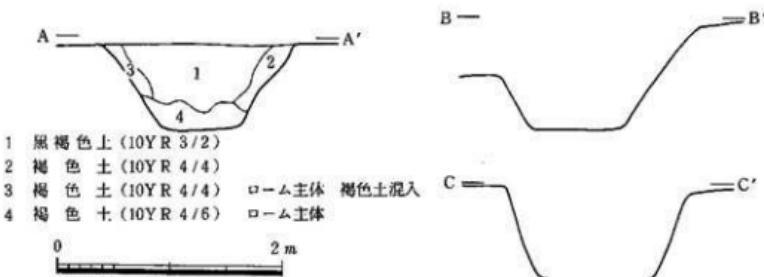
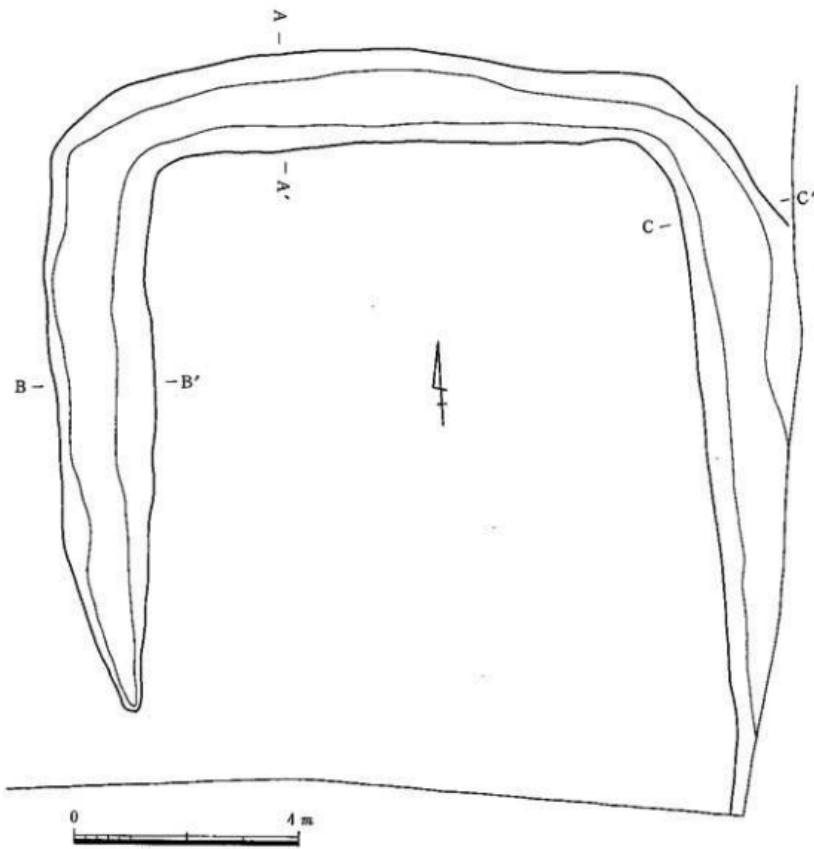
東南コーナーと南西コーナーにブリッジが想定できるが、本址は上部を大きく削平されていると思われ、深度の浅いコーナーが底面まで削平された可能性もある。

覆土は上部に暗褐色土、下部に褐色土が堆積していた。自然堆積と思われる。

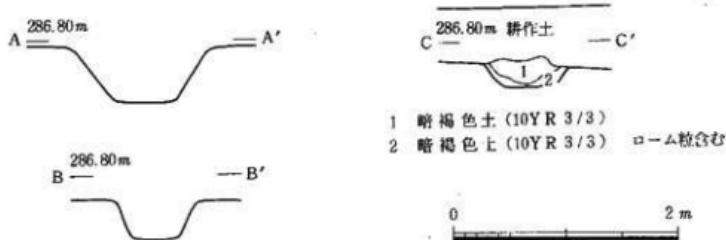
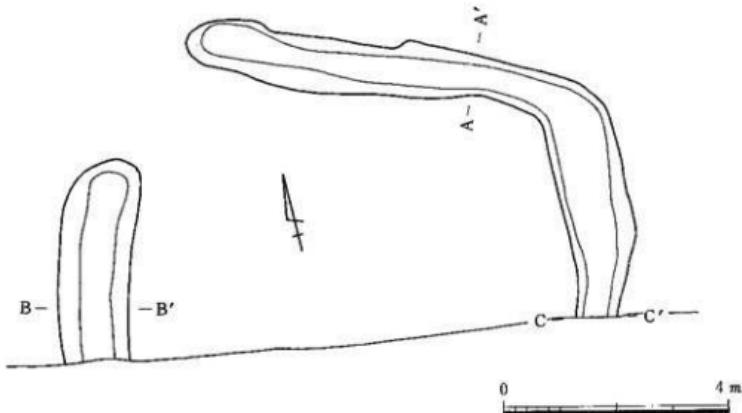
遺物は北溝の中央と東北コーナーの中間で壺形土器が出土した。同じく北溝から台付甕の脚台部が出土している。

#### 出土遺物（第70図、図版24）

1は壺形土器である。底部を欠損する。口径17.7cm、頸部径9.8cm、残存高は31.4cmである。胴部最大径は胴部下位にあり、25.8cmである。胴部下位から底部に向かって直線的にすばまる。口唇部と肩部に縄文が施されている。口縁部、胴部には刷毛目調整がなされ、胴部にはその上からへら磨きが施されている。内面は横位の刷毛目調整がなされている。折り返し口縁である。赤褐色を呈する。2は台付甕の脚台部である。脚部径は10.4cm、残存高は8.5cmである。内外面は粗い刷毛目調整がなされている。脚台部内面の胴部との接合部に指頭による調整が施されている。赤褐色を呈する。



第67図 8号方形周溝墓



第68図 9号方形周溝墓

### 11号方形周溝墓（第71・72図、図版12）

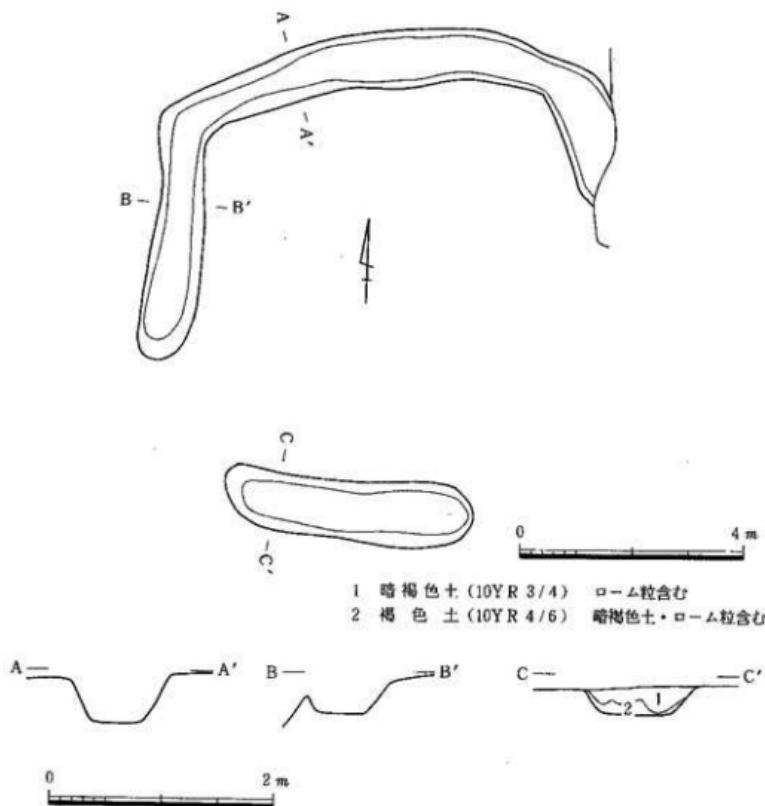
北東向きの緩斜面にあたるE・F-4グリッドに位置し、縄文時代の9・10号住居址と重複する。南北軸は真北方向と一致する。

規模は東西16.7m、南北15.2mを測り、東西に長い。溝の幅はコーナー付近を除き、120~200cmで、深さは78~98cmである。北東コーナーは62cm、北西コーナーは33cm、南西コーナーは28cmと浅い。本址は本遺跡で調査された方形周溝墓の中で最も大規模なものである。

東南コーナーがブリッジになっている。

覆土は黒褐色土、暗褐色土を主体としたもので、壁際と底面付近に褐色土の堆積が認められた。自然堆積と思われる。

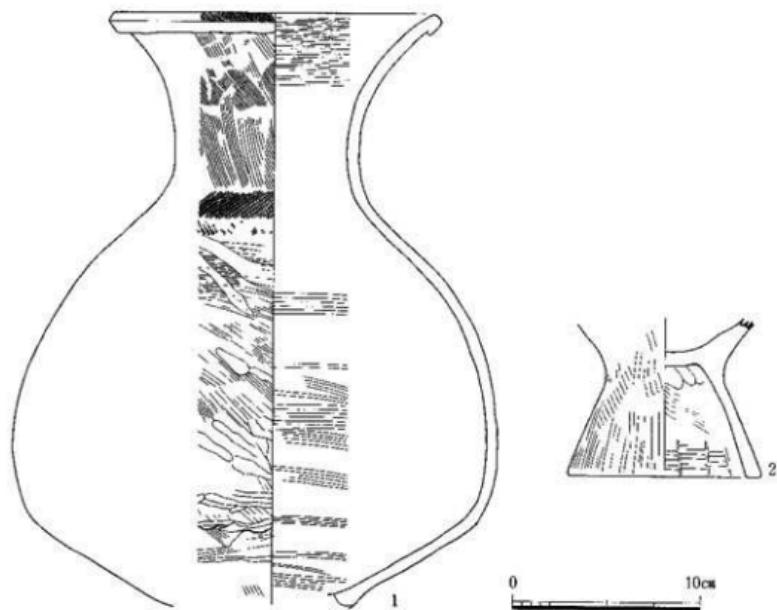
遺物は東溝の中央よりやや北よりの位置で覆土中から圓形土器が出上した。他に十数点の破片が出土している。



第69図 10号方形周溝墓

**出土遺物（第73図、図版24）**

1は北溝から出土した壺形土器で、口径13.5cm、頸部径は11.1cm、底径は6.0cm、器高は14.5cm、胴部最大径は頸部直下にあり、11.6cmである。口縁上部はわずかに内折する。外面は口縁部から胴部中位までは斜位の粗い刷毛目調整が施され、胴部下位は縦位の細かい刷毛目調整がなされている。口縁部内面は粗い刷毛目調整が施され、胴部内面はヘラなでが施されている。外面は黒褐色、内面は橙色を呈する。2は西溝の南端の覆土中から出土した底部である。底径は8.2cm、残存高は7.3cmである。内外面とも刷毛目調整がなされているが、外面はその上からヘラ磨きが施されている。胴部中位の内面は横位のなでが施されている。橙色を呈する。



第70図 10号方形周溝墓出土遺物

#### 12号方形周溝墓（第74図、図版13）

北向きの緩斜面にあたるD-7グリッドに位置する。本遺跡で調査された方形周溝墓の北端にあたる。南北軸はN-8°-Wを示す。

規模は南北10.9m、東西9.1mを測り、南北に長い。溝の幅は83～136cmであるが、北西コーナーは幅60cmと狭い。深さは29～55cmであるが、北西コーナーが17cm、南西コーナーは21cmと浅い。いずれのコーナーも丸みが強い。

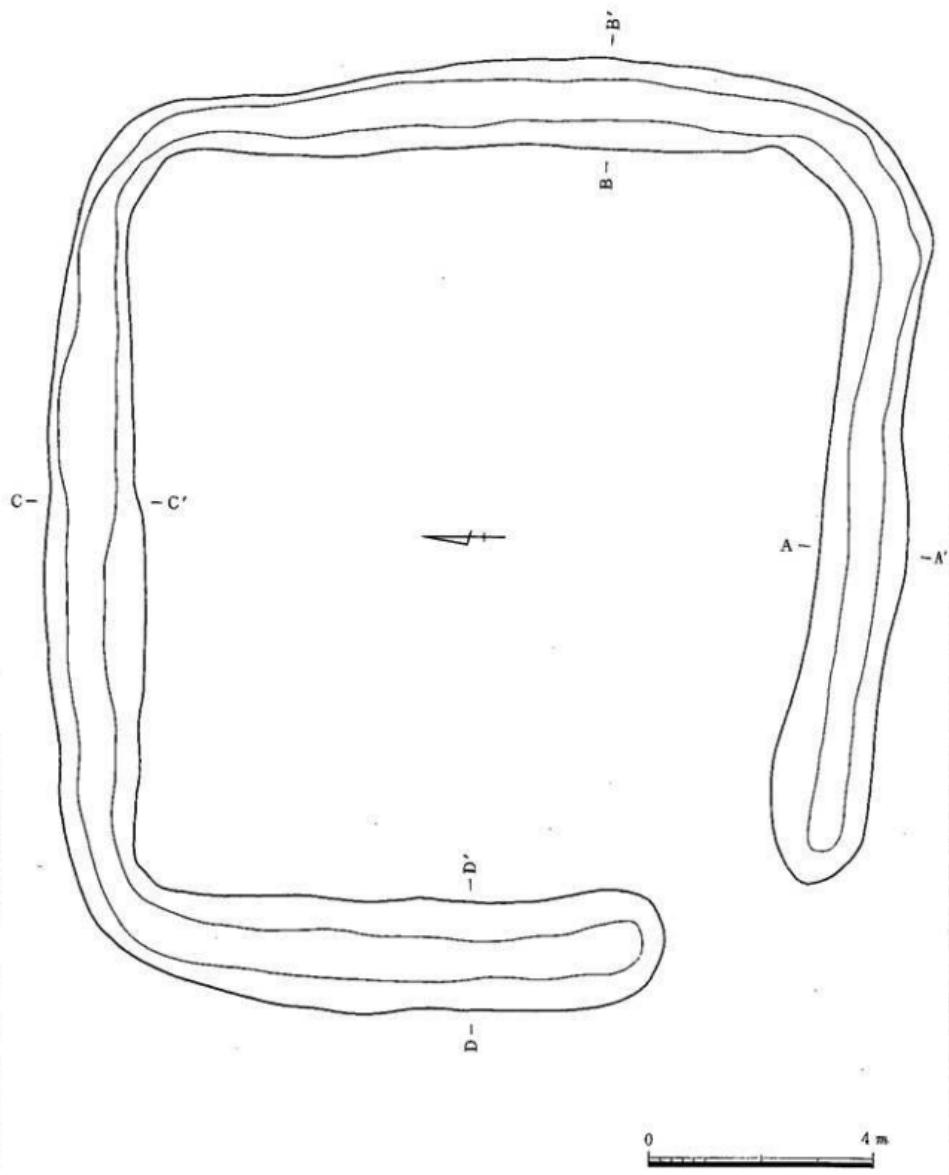
東南コーナーがブリッジになっている。

覆土は暗褐色土を主体とし、壁際から底面付近にかけて褐色土の堆積が認められた。自然堆積と思われる。

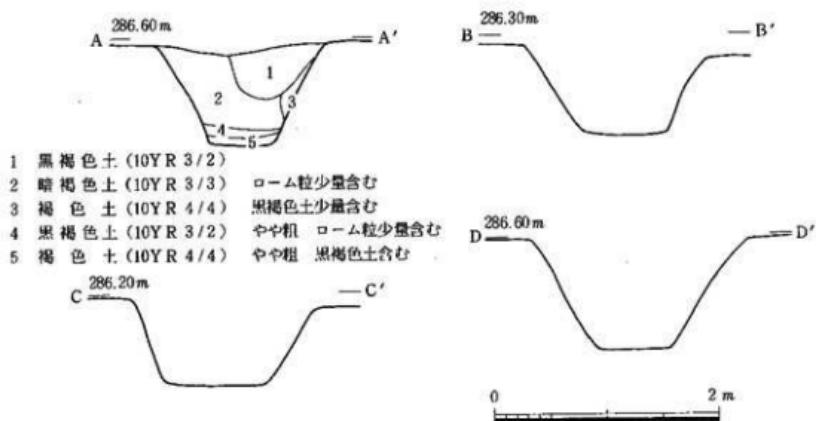
遺物は南溝の中央よりやや西寄りの底面から小形の整形土器が、東溝中央部の覆土中から台付甕の脚台部が出土した。

#### 出土遺物（第75図、図版24）

1は南溝から出土した整形土器である。底部を欠損する。口径14.0cm、頸部径は11.2cm、胴部最大径は胴部中位よりやや上にあり、13.3cm、残存高は12.2cmである。口縁部に押捺が施さ

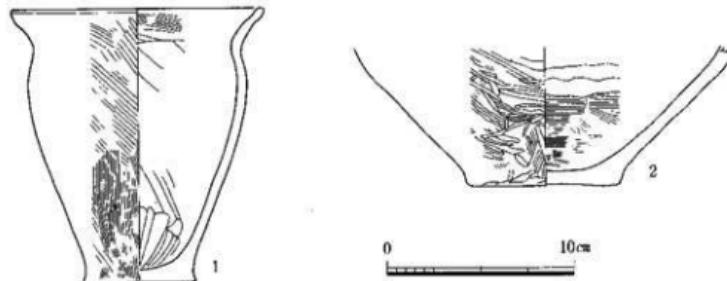


第71図 11号方形周溝墓

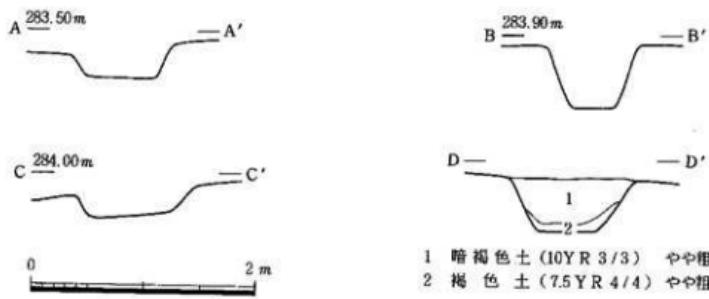
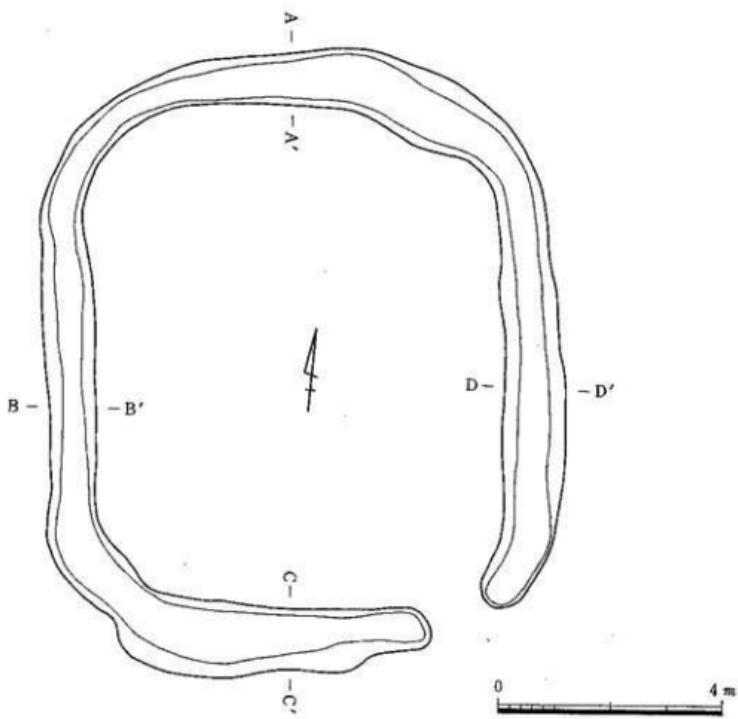


第72図 11号方形周溝墓

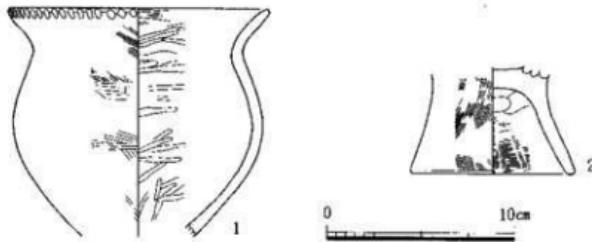
れている。外面は口縁部、頸部に細かい刷毛目調整が、胴部に粗い刷毛目調整がなされている。内面は口縁部が刷毛目調整が、胴部はヘラ磨きが施されている。黒褐色を呈する。胎上に白色の砂粒を多く含む。2は東溝から出土した台付甕の脚台部である。裾部径は8.3cm、残存高は5.7cmである。外面に縦位の、内面に横位の細かい刷毛目調整がなされている。内面の胴部との接合部は指頭による調整がなされている。橙色を呈する。



第73図 11号方形周溝墓出土遺物



第74図 12号方形周溝墓



第75図 12号方形周溝墓出土遺物

### 13号方形周溝墓 (第76図、図版13)

調査区南端の平坦面にあたるD・E-3・4グリッドに位置し、縄文時代の11号住居址、4号土坑を切る。南北軸は真北方向を示す。

規模は南北9.4m、東西10.7mを測り、東西に長い。溝の幅は東溝が65 前後とやや狭いが、他は85~110cmである。深さは東溝が45cm前後とやや浅く、南溝は52cm前後、西溝は60cm前後、北溝は60cm前後である。東南コーナーは28cm、南西コーナーは39cm、北東コーナーは23cmといずれのコーナーも浅くなる。

北溝の東部は長さ37mにわたって、幅124cm、深さ77cmと大きく掘り込まれている。この部分は底面の幅が拡がる。

北西コーナーがブリッジとなっている。

覆土は暗褐色土を主体としていたが、壁際から底面付近にかけて褐色土の堆積が認められた。自然堆積と思われる。

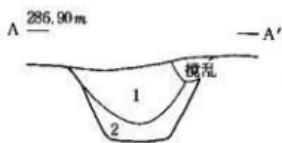
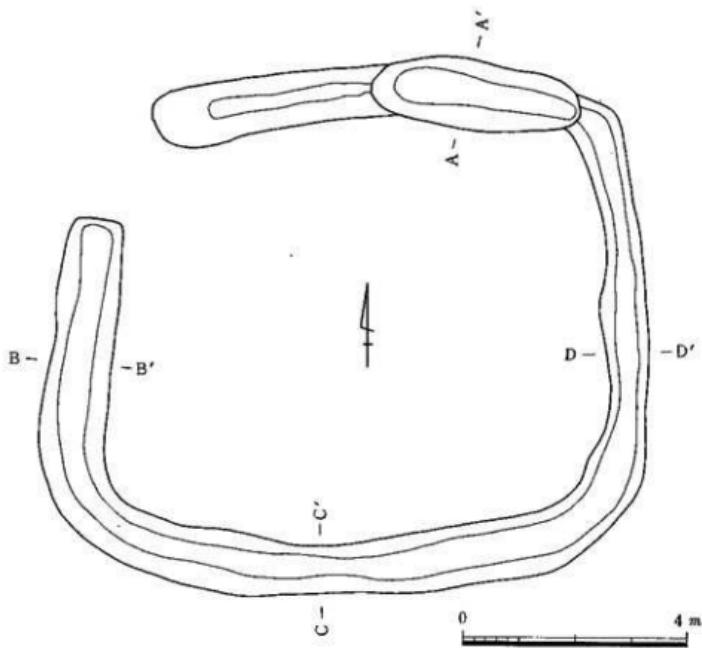
遺物は東南コーナーの覆土中から壺形土器が出土した。他に数点の小片が出土している。

### 出土遺物 (第77図)

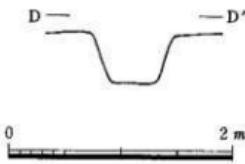
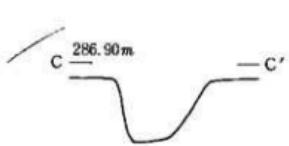
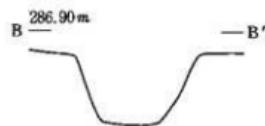
1は東南コーナーから出土した壺形土器である。口径は20.0cm、頸部径は16.9cmと推定され、残存高は8.9cmである。口縁上端に刷毛状工具による刻み目が巡る。口縁部外面は斜位の刷毛目調整が施され、上部はその上から横位の刷毛目調整がなされている。胴部外面は斜位の刷毛目調整がなされている。内面は主に横位の粗い刷毛目調整が施されている。外面は暗褐色、内面は橙色を呈する。

### 14号方形周溝墓 (第78図、図版13)

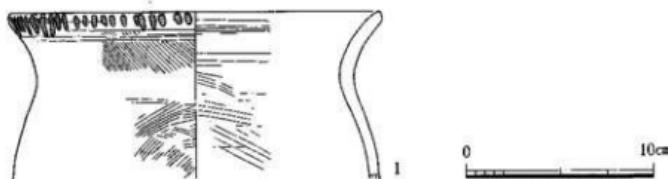
北西向きの緩斜面にあたるE-5グリッドに位置する。東溝と北溝の一部を調査した。南北軸はN-8°-Wを示す。



1 暗褐色土 (10YR 3/3)  
2 褐色土 (7.5YR 4/4) 暗褐色上少量混入



第76図 13号方形周溝墓



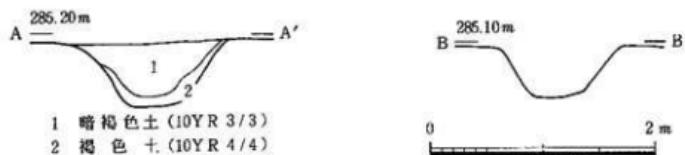
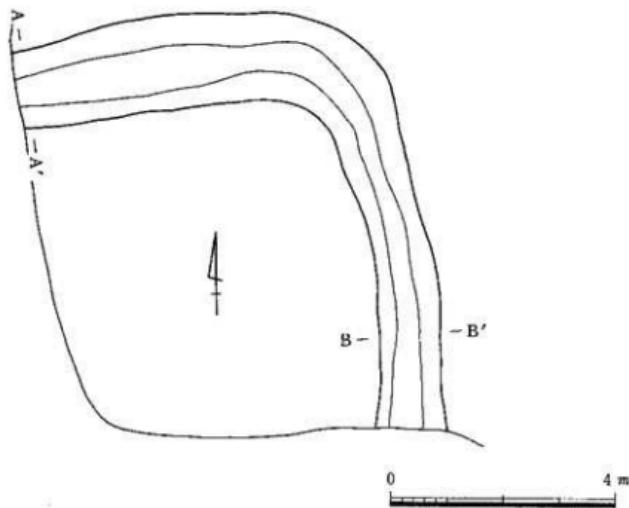
第77図 13号方形周溝墓出土遺物

東溝は長さ 7.4m、北溝は長さ 6.4mを調査した。溝の幅は東溝が 100cm前後、北溝が 160cm前後である。深さは東溝が48cm前後、北溝が56cm前後である。

調査範囲内ではブリッジは検出されていない。

覆土は暗褐色土を主体としていたが、壁際から底面付近にかけて褐色土の堆積が認められた。自然堆積と思われる。

弥生土器は数点の小片が出土したにすぎない。



第78図 14号方形周溝墓

# 第5章 古墳時代の遺構と遺物

## 第1節 土 坑

### 1号土坑（第79図、図版14）

北向きの緩斜面にあたるD-5グリッドに位置し、弥生時代の3号住居址を切る。

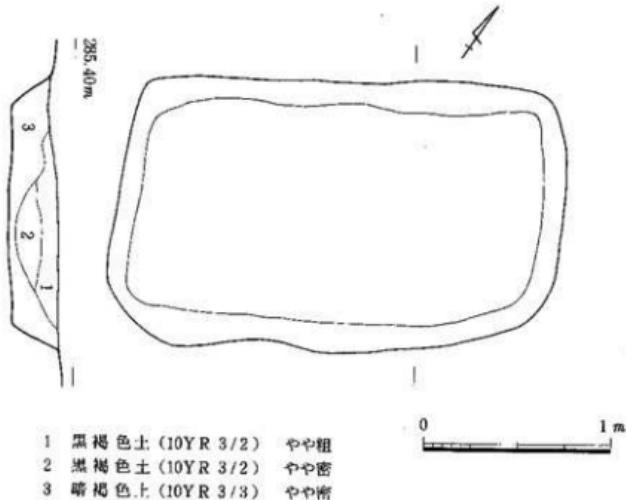
平面形は長方形を呈し、長軸は2.34m、短軸は1.41mを測る。深さは26cmである。長軸方向はN-55°-Eである。

覆土は中央部に黒褐色土が、壁際から底面付近にかけて暗褐色土が堆積していた。

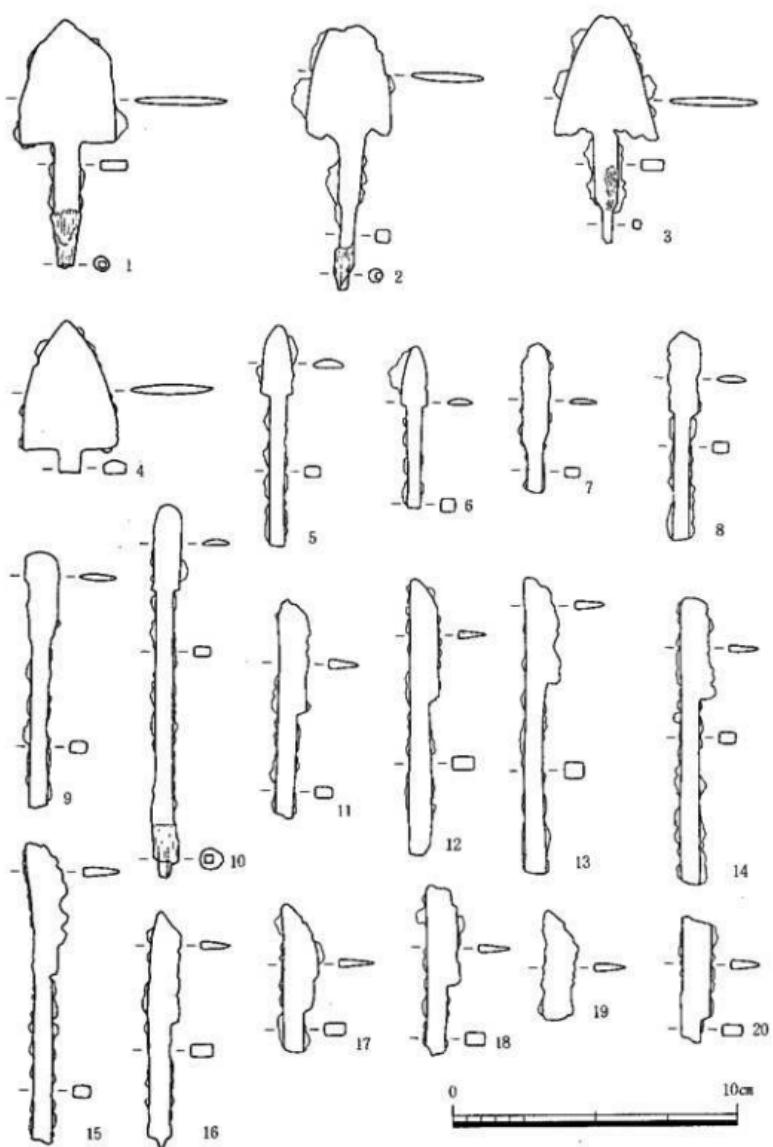
遺物は東隅から鉄鏃が束になって出土した。鉄鏃は遺存状態が悪いため、正確な点数は不明であるが、20点をわずかに超えると思われる。

### 出土遺物（第80図、図版25）

1～4は鎌身が三角形あるいは五角形を呈するものと思われる。11～20は片刃の鎌身である。1・2・10は木質が残っている。



第79図 1号土坑



第80圖 1号土坑出土遺物

## 第2節 古墳石室（第81図、図版14）

北西向きの緩斜面にあたるE-5グリッドに位置する。

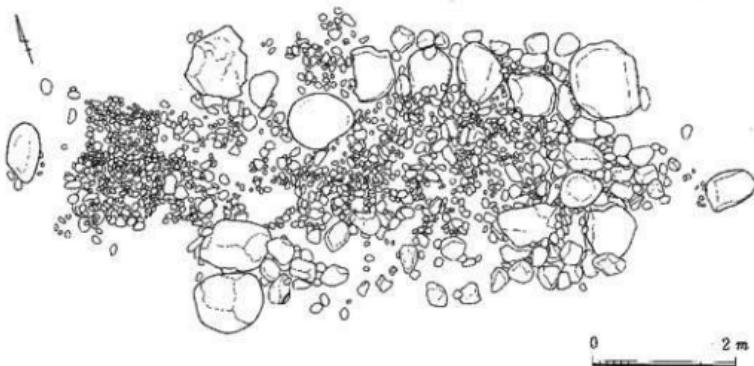
横穴式石室であるが、遺存状態は極めて悪く、基底部だけが検出された。

2×8mの長方形の範囲に小石が密集し、その北側に大形の石の列が残る。開口部は東側と思われ、主軸方位はN-20°-Wである。

遺物は元位置を保っていたとは考えられないが、石室中央から西端にかけて散漫に出土した。2点の直刀はいずれも西端から出土している。

### 出土遺物（第82～84図、図版25）

1・2は須恵器である。1は提瓶で、口径は5.6cm、体部径は14.3cm、体部の厚さは8.1cm、器高は17.9cmである。肩部にボタン状の把手が付く。体部外面は回転ヘラ削り調整



第81図 古 墳 石 室

が施されている。2は蓋である。直径は11.4cm、器高は3.5cmである。内面にかえりを持つ。天井部外面に2条1単位の円形の沈線が二重に巡り、その間にヘラ状工具による刻み目がほどこされている。

3・4は直刀である。3はほぼ完形で、長さ74.0cmを測る。刃渡り61cm、刀身幅2.8cm、棟幅0.8cmである。直径0.4cmの目釘が残る。4は長さ45.0cmが遺存している。刃身幅2.7cm、棟幅0.6cmである。

5～8は馬具である。5は轡である。6は鎧鉢である。鉄具に3連の兵庫鎖がつく。7は鉄具で、6と対になると思われる。8は鎧への取り付け金具である。

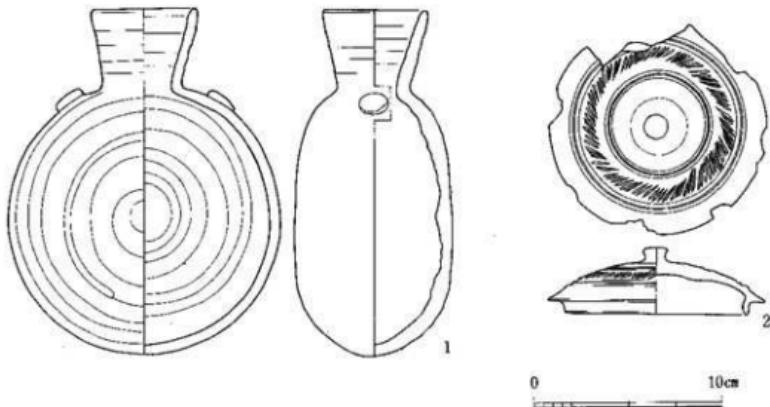
9～18は鉄鎌である。

19は火打金である。

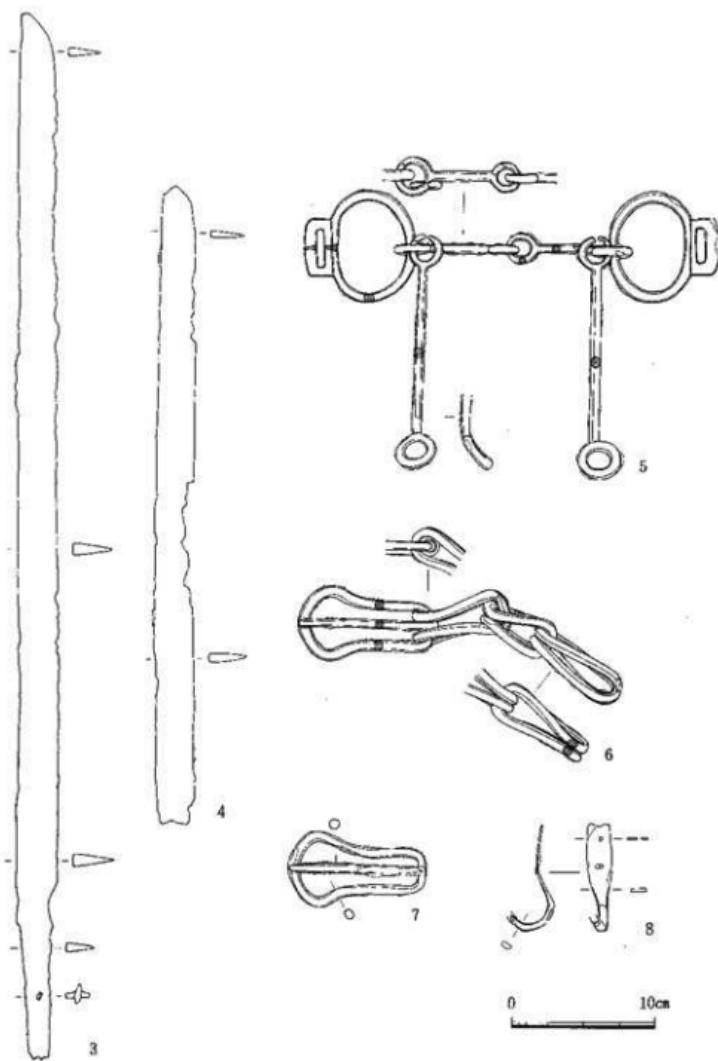
20・21は用途不明の鉄製品である。20は棒状である。

22～24は耳環で、直径は22が3.1cm、23が2.5cm、24が1.4cmである。断面は22が円形、23が隅丸長方形、24が梢円形である。いずれも銅製で、金は遺存していない。

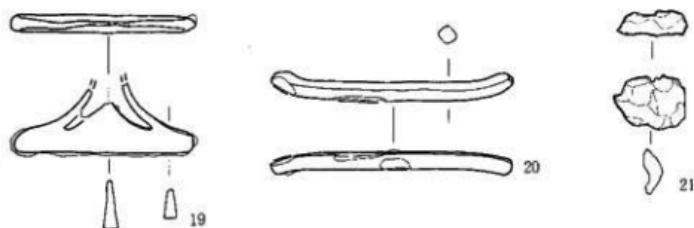
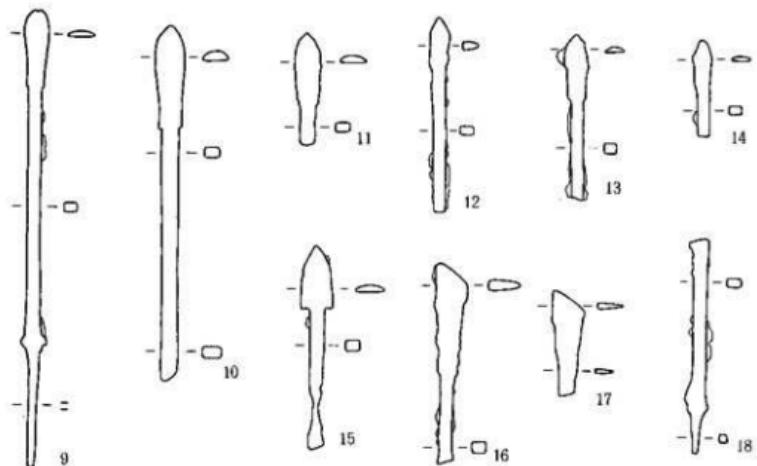
25は水晶製の算盤玉である。



第82図 古墳石室出土遺物（1）



第83図 古墳石室出土遺物（2）



第84図 古墳石室出土遺物 (3)

## 第5章 まとめ

一・条氏館跡遺跡の調査は今回で4回目となった。遺跡の全面は調査されていないが、これまでの調査について簡単に振り返ってみたい。

今回、初めて縄文時代の遺構を調査した。内訳は8基の住居址と1基の竪穴状遺構、3基の土坑である。

早期の遺構としては鶴ヶ島台式土器を出土した4号七坑がある。鶴ヶ島台式土器は第1次調査の際も出土しているが、4号土坑、遺構外川十の鶴ヶ島台式土器は第1次調査の調査区域に近い調査区の南端で検出された。

9・10・11号住居址は前期前半の所産と思われるが、これらは調査区の南に近接している。いずれの住居址も盤状石皿、あるいは固定式石皿などと呼ばれる大形の石が設置されていた。これらの住居址内、あるいは住居址の周辺からは多くの磨石、穂先石が出土している。この時期の住居址は上野遺跡でも1基検出されている。

4号住居址からは十二菩提式土器が出土している。前期末葉の所産と思われるが、調査区域内には同時期の住居址は検出されていない。4号住居址の北には40m程の間隔をあけて竪穴状遺構が位置する。この遺構からは諸磯C式土器が出土している。遺構外からも小破片ではあるが、諸磯C、十三菩提式土器がある程度まとまって出土している。なお、上野遺跡では五領ヶ台式期の住居址が1基検出されているが、本遺跡では土器は出土していないもの遺構は検出されていない。

2・5・6・7号住居址は中期の所産と思われる。これらの住居址は前期前半の住居址とは対照的に、調査区の北部に集中している。2・5号住居址は藤内式期、6・7号住居址は井戸尻式期の所産と思われる。

今回の調査では当初の予想通り多数の方形周溝墓を発見することができた。第1次調査では6基の方形周溝墓が発見され、第2次調査では4基の方形周溝墓が発見されている。今回の調査では14基の方形周溝墓を調査した。試掘調査である第3次調査で発見されたものの、公園造成計画の変更によって今回の調査の対象とならなかったもの3基を加えると、本遺跡では24基の方形周溝墓が発見されたこととなる。今回は調査の対象外となったが13号方形周溝墓の北に接して方形周溝墓と思われる溝が発見されており、試掘調査のトレントをはずれた方形周溝墓が存在する可能性は高く、本遺跡の方形周溝墓の数は24を超えるものと思われる。本遺跡の南に位置する上野遺跡では5基の方形周溝墓が発見されており、本遺跡の方形周溝墓と合わせると29基となる。

上野遺跡で発見された弥生時代の竪穴住居址は9基で、本遺跡の3基に比べ多い。本遺

跡と上野遺跡の、集落と墓域の変遷については興味深いが、今後の課題としたい。

5号方形周溝墓は4号方形周溝墓に接続しているが、両址の溝に若干のずれと深さの違いがあり、同時に築かれたとは限らない。4号方形周溝墓の北溝が人為的に埋められた可能性があることから、5号方形周溝墓は4号方形周溝墓を拡張した部分と考えることもできる。

今回の調査の大きな成果のひとつに古墳石室の発見がある。三珠町は曾根丘陵に分布する古墳の西限にあたるが、従来は本遺跡の東700mに位置するエモン塚古墳が本町の古墳の西限とされてきた。今回の調査によって本遺跡の古墳と、本遺跡に隣接し、石室を構成したと思われる石の累積の認められる蹴裂神社が本町の古墳の西限と認められることとなった。

本遺跡の古墳は出土した須恵器などから、6世紀後半の所産と思われる。本町の古墳については本格的な調査が行われた例がなく、不明な部分が多いが、鳥居原狐塚古墳が5世紀中葉、大塚古墳が6世紀初頭の所産と考えられている。なお、本遺跡に隣接する上野遺跡で検出された円形周溝墓は5世紀中葉の所産と考えられている。

1号土坑からは多数の鉄鏃が出土している。形状から推しても墓壙かと思われる。詳細な年代は不明であるが、古墳群の中の上坑墓として興味深い。

三珠町内には桜塚、仏塚など多数の古墳の存在が伝承されているが、現在は人半が墳丘を全く失っている。今後、それらの所在地を確定し、古墳群としてのあり方を確認することも必要であろう。

#### 参考文献

- 『三珠町誌』 1980 三珠町
- 『一城林遺跡』 1981 山梨県教育委員会
- 『一条氏館跡遺跡』 1988 三珠町教育委員会
- 『上野遺跡』 1989 三珠町教育委員会
- 『花鳥山遺跡・水呑場北遺跡』 1989 山梨県教育委員会
- 『一条氏館跡遺跡 第2次・第3次調査報告』 1991 三珠町教育委員会

# —条氏館跡遺跡

---

— 山梨県三珠町一条氏館跡遺跡第4次調査報告書 —

発 行 1993年3月31日

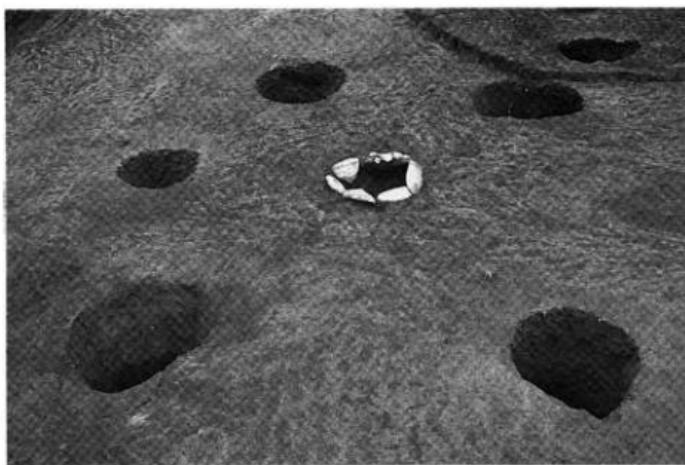
印 刷 1993年3月25日

編集・発行 山梨県西八代郡三珠町上野  
三珠町教育委員会

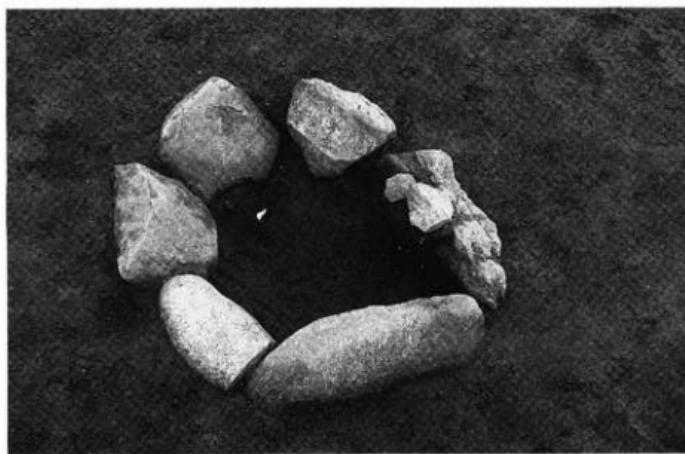
印 刷 有泉堂印刷所

---

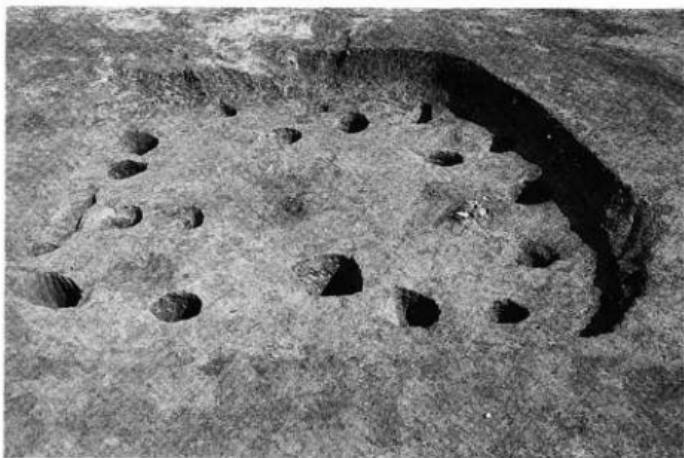
图版 1



2号住居址



2号住居址 炉址



4号住居址



4号住居址遗物出土状态

图版 3

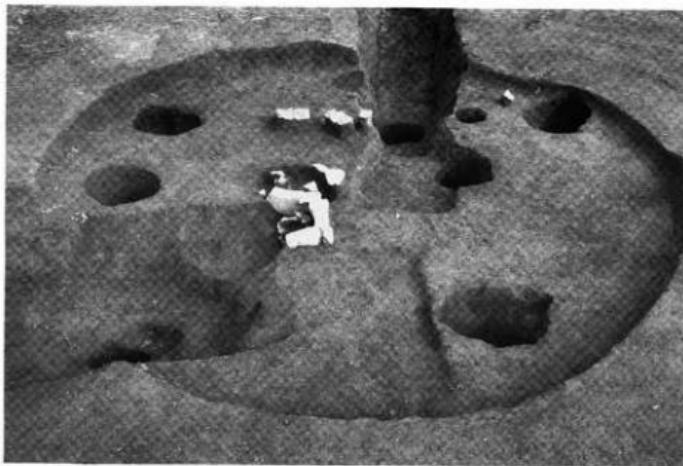


5号住居址



5号住居址 炉址

图版 4



6号住居址



6号住居址 炉址



7号住居址



7号住居址 炉址

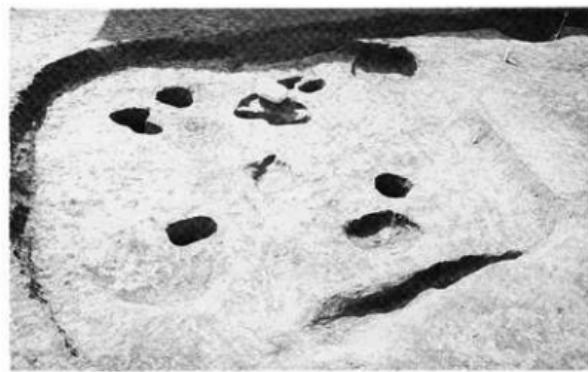
图版 6



9号住居址



10号住居址



11号住居址

圖版 7



竖穴状遗構

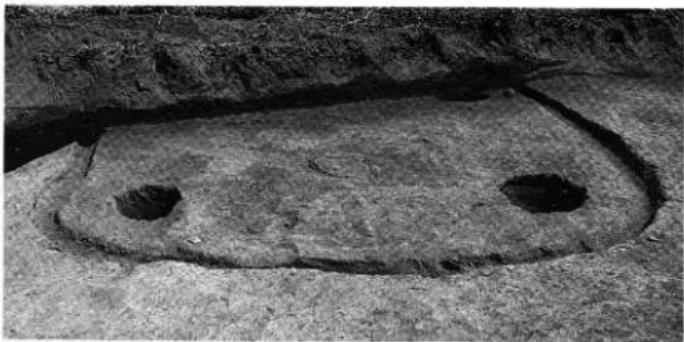


2・3号土坑



4号土坑

图版 8



1号住居址



3号住居址



8号住居址

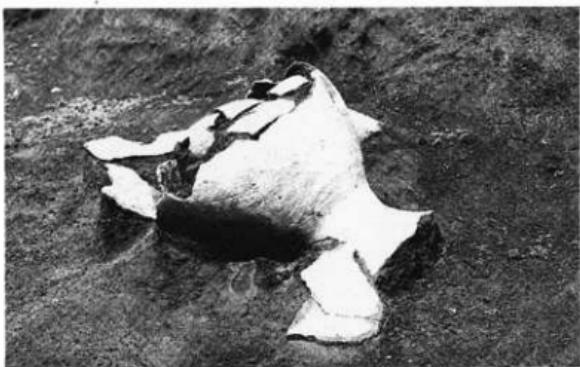
图版 9



1号方形周溝墓



2号方形周溝墓



2号方形周溝遗物出土状态

图版10



3号方形周溝墓



4·5号方形周溝墓



4·5号方形周溝墓



5号方形周溝遺物出土状態

图版11



6号方形周溝墓

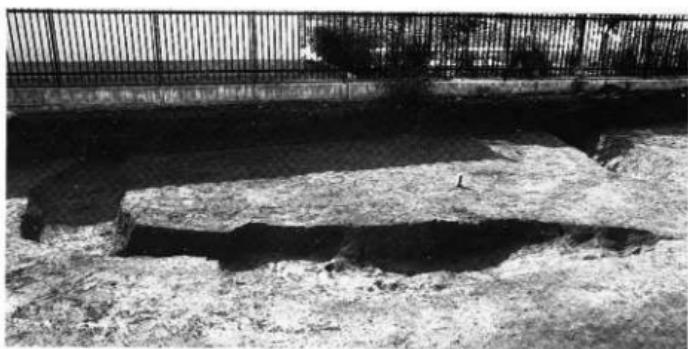


7号方形周溝墓



8号方形周溝墓

图版12



9号方形周溝墓



10号方形周溝墓

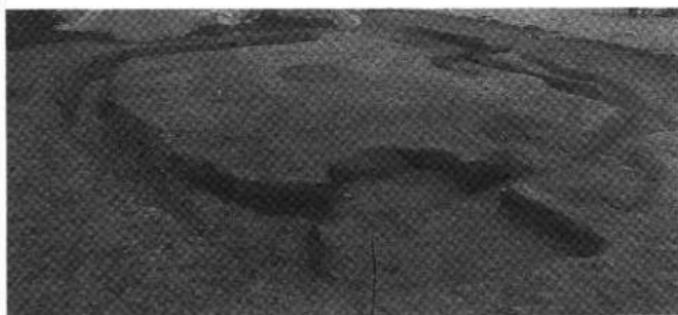


11号方形周溝墓

图版13



12号方形周溝墓

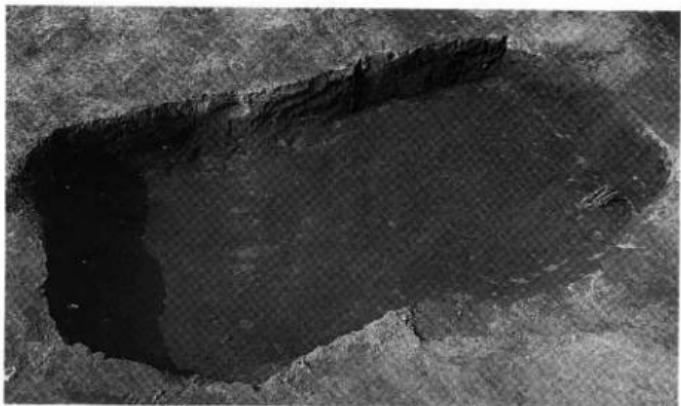


13号方形周溝墓



14号方形周溝墓

图版14



1号土坑

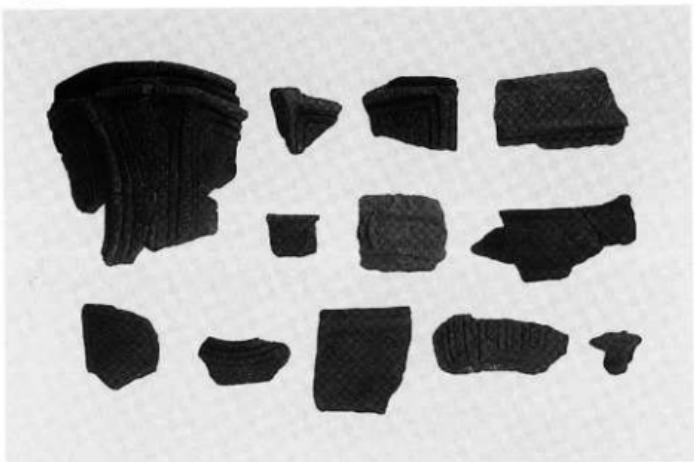


1号土坑遗物出土状態



古墳石室

图版15

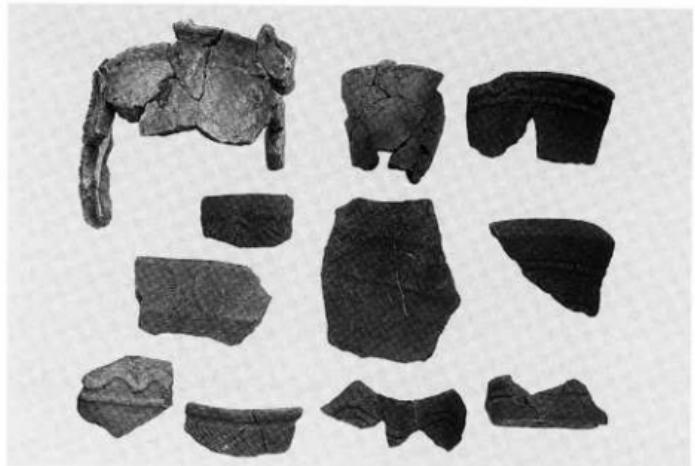


1号住居址出土遗物

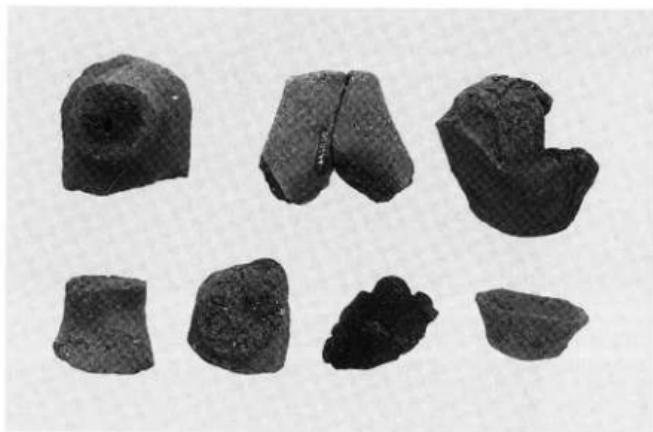


4号住居址出土遗物

图版16



5号住居址出土遗物



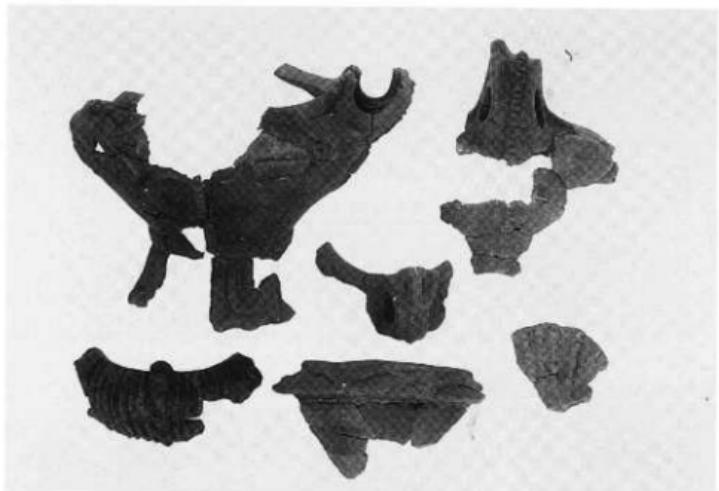
5号住居址出土遗物

图版17



6号住居址出土遗物

图版18

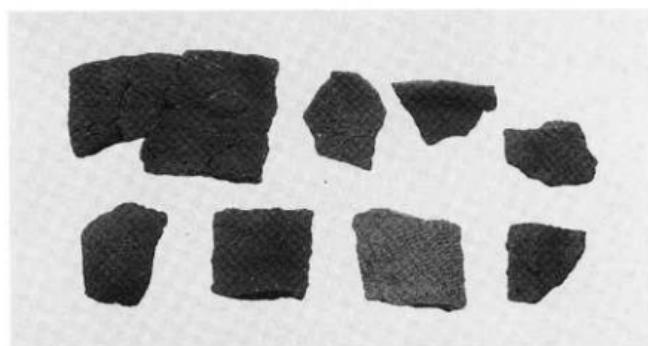


7号住居址出土遗物

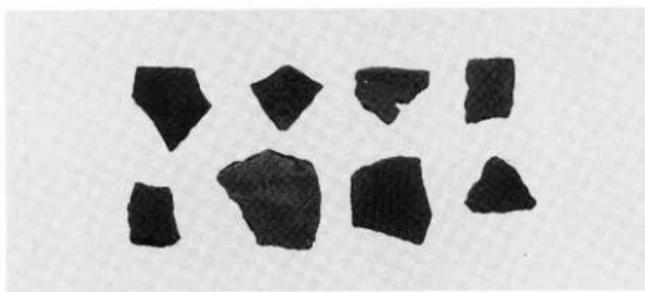
图版19



9号住居址出土遗物



10号住居址出土遗物

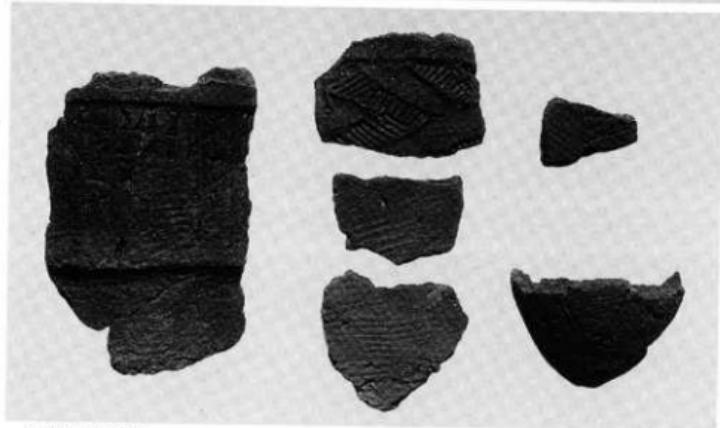
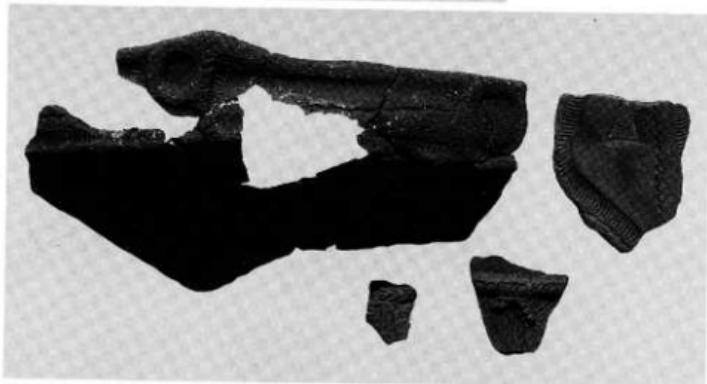


11号住居址出土遗物

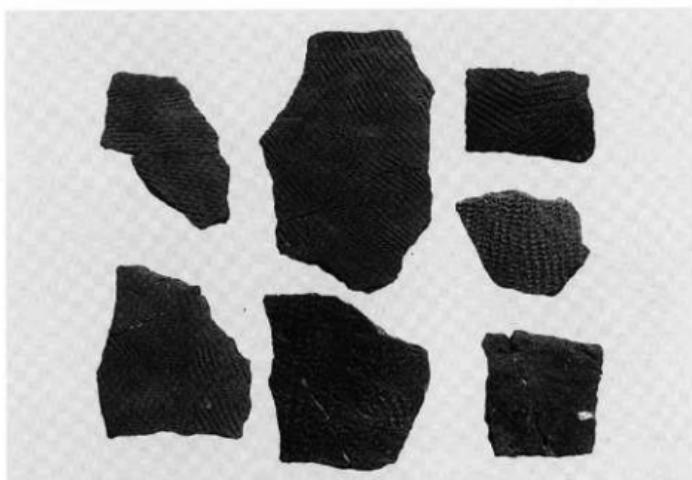
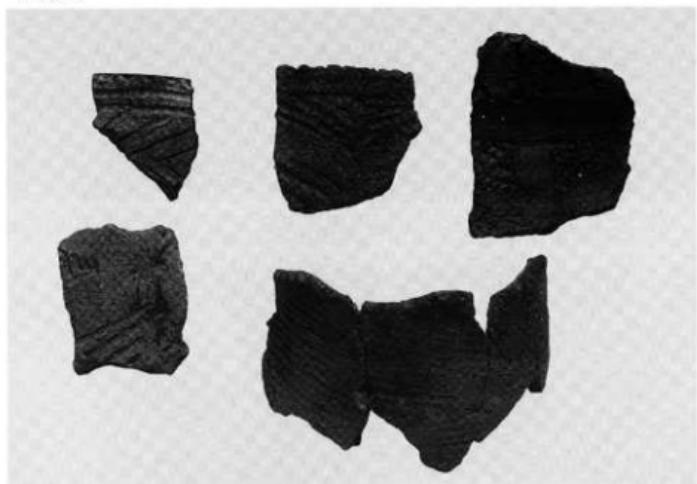
图版20



2·3号土坑出土遺物

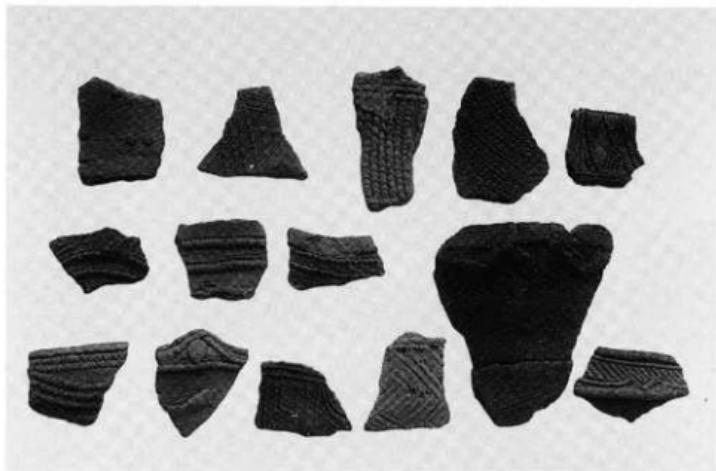


図版21



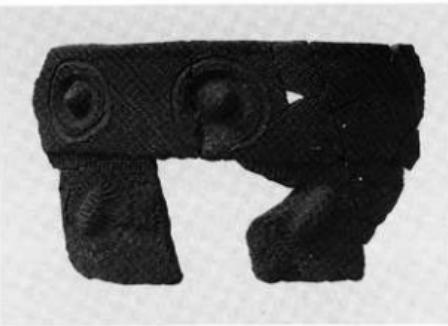
遺構外出土遺物

圖版22



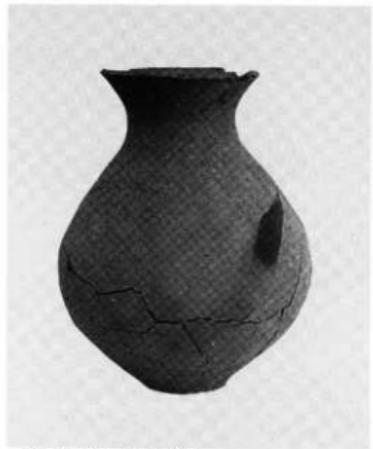
追橋外出土遺物

图版23



造桥外出土遗物

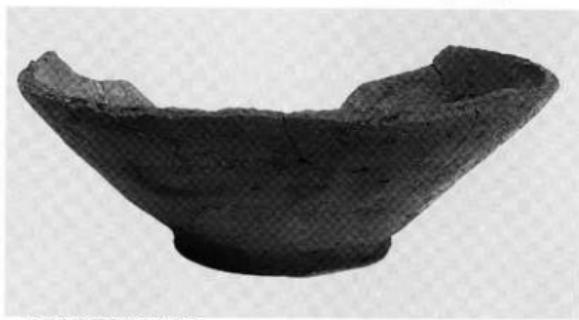
图版 24



2号方形周溝墓出土遗物



10号方形周溝墓出土遗物



11号方形周溝墓出土遗物

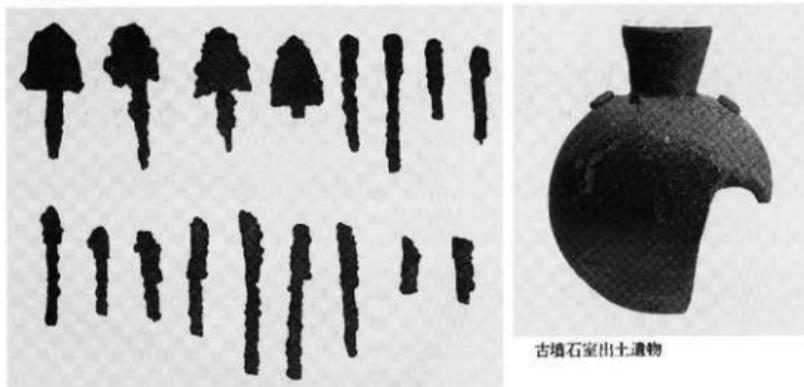


11号方形周溝墓出土遗物

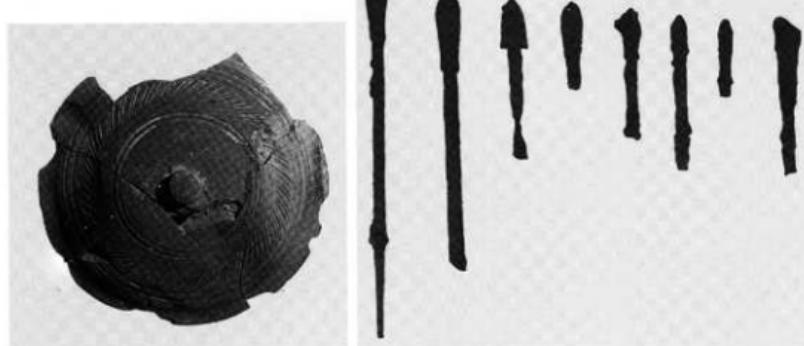


12号方形周溝墓出土遗物

图版25

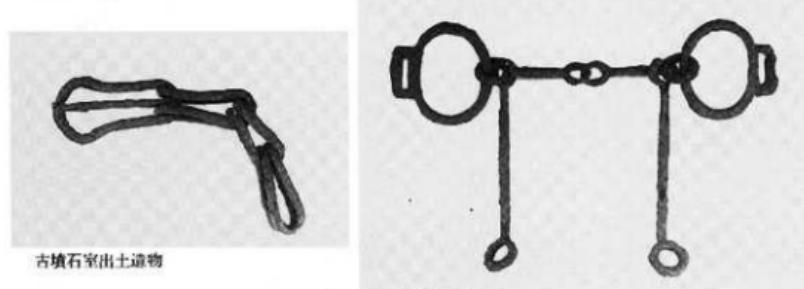


1号土坑出土遗物



古墳石室出土遺物

古墳石室出土遺物



古墳石室出土遺物

古墳石室出土遺物



古墳石室出土遺物

